

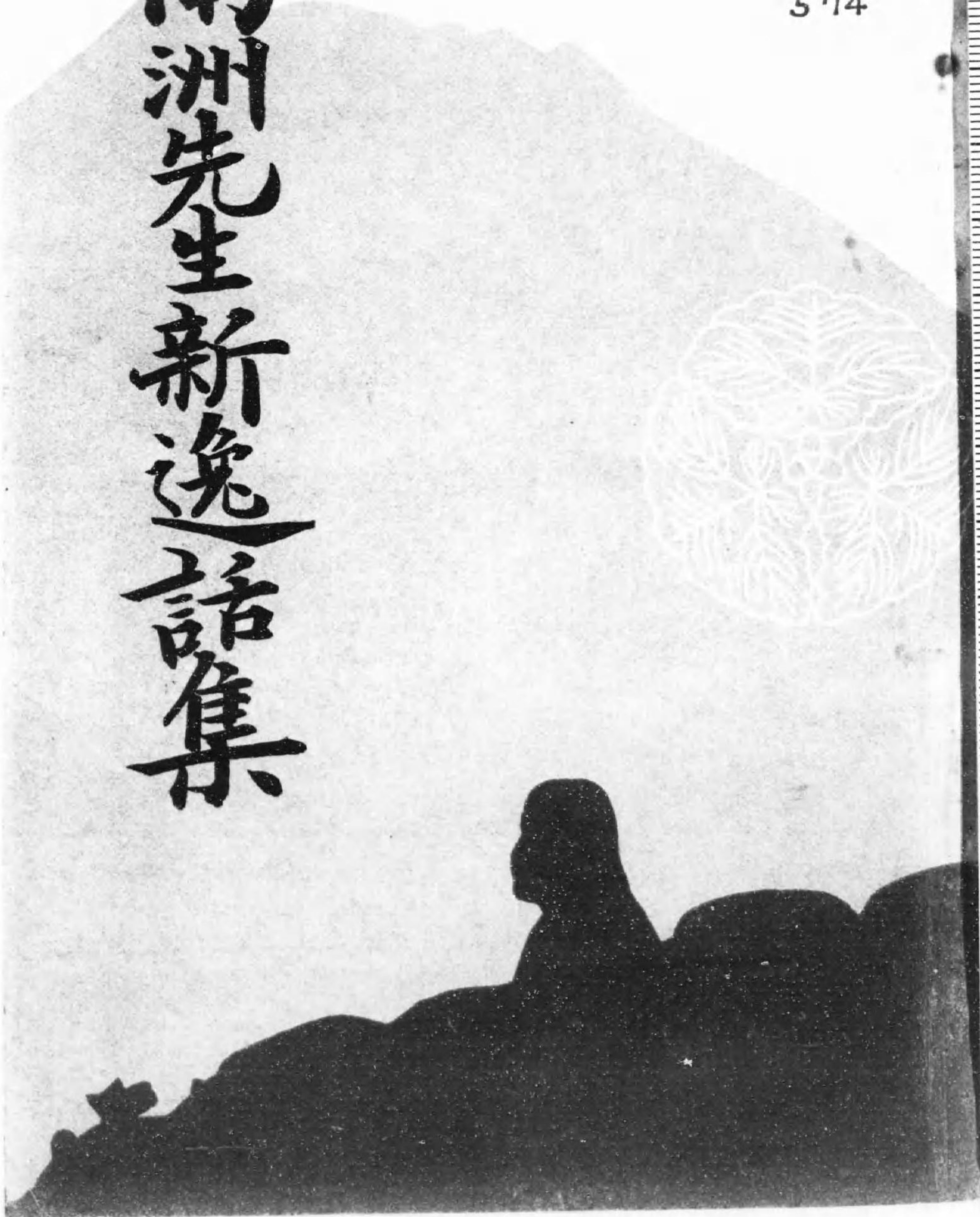
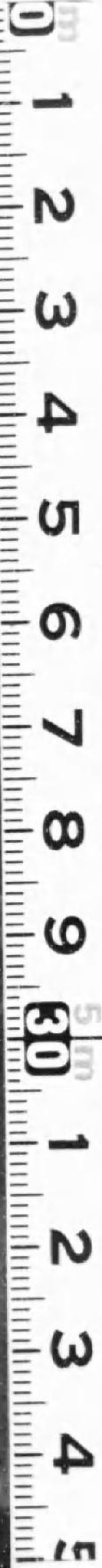
南洲先生新逸話集

特 220

574



始



特 220
574

西郷從德侯題

池田米男執筆
鹿兒島新聞社編纂

南洲先生新逸話集



發行所 鹿兒島新聞社

蘇州府 蘇州府 蘇州府

蘇州府 蘇州府 蘇州府



西泠對齋刻圖

蘇州府 蘇州府 蘇州府

山中之元 難得 伴 序 東
於 舟 中 亦 有 意 為 之 也
積 善 登 第 守 心 崇 古 重 節
矣 習 折 之 世 經

侯 爵 官 少 德 侯 表



西 鄉 從 德 侯 題 字



Handwritten text in Chinese characters, arranged in vertical columns. The text is faint and appears to be a list or record. At the bottom right, there is a small, faint stamp or printed text.

人至家

大西郷筆
明治九年十二月廿九日
出獵之際有合せ
のホイ紙に揮毫せられたる
ものであつた

大西郷筆



明治九年十二月廿九日
出獵之際有合せ
のホイ紙に揮毫せられたる
ものであつた
(藏氏衛正濱長)

大西郷筆

序

巨人西郷南洲先生が明治十年城山の露と消えられてから正に六拾年來る九月二十四日の忌辰には莊嚴なる祭典が営まれんとしてゐる。この時に際しわが國彫塑界の權威安藤照氏が約拾年の歲月にわたる肝膽を砕いて上就した南洲先生の銅像は島津氏十八代家久公以來二十九代忠義公に至る十一代の居城たりし鶴舞城の翠綠滴る城山を背景として建設工を告げ來る五月二十三日を以て盛大なる除幕式が行はれるなど本年の鹿兒島にこの偉人を偲ぶ様々の意義深き催が企てられてゐる。

南洲先生は多年武の邸宅に起居されそこではまた世間に現はれない逸話も多く生れましたそれ等の逸話に自分が多年各方面に亘り涉獵して得たる新資料を纏め「武の西郷邸物語」と題して鹿兒島新聞

の本年の初刷より登載し初め三十九回に亘つて發表した
西郷屋敷の由緒環境その家庭訓等より先生の晩年に至るまで興味
ある物語を種々の方面から記述し不文ながら些かこの巨人の風貌を
傳へ得たに信ずるのである

終稿に際し更に廣く之を世間に傳へたいといふ兒玉社長の好意に
より「南洲先生新逸話集」と改題して一本に纏められしことは誠に身
に過ぎたる光榮であつて本縣史蹟の調査に携はるものとして欣快に
堪へないところであり深く感謝の意を捧ぐる次第である

この一本が維新の鴻業を翼賛したる偉人の眞骨頂を傳ふことゆゑに
人間味豊かな武村のおぢさんの天真を彷彿し得るものなれば筆者の
願望は足るのである

鹿兒島縣史蹟調査會
常任委員 池田米男

西郷南洲先生新逸話集 目次

- 一、南洲翁祖先の薩摩入り……………一
- 二、西郷家の家系圖(南洲先生自記家系記帳)……………三
- 三、藩主齊彬公に見出さる……………三
- 四、再東上の途次勤王志士との會見……………一五
- 五、責任感の強かつた先生の祖先覺左衛門氏……………一九
- 六、南洲先生と上之園邸……………二三
- 七、四本家と西郷家對日置島津家に絡まる經緯……………二四
- 八、大島配流三年後の國事奔走……………二六
- 九、怪物パークス英公使も先生の人格には數歩を譲つた……………二四
- 一〇、薩長藝の三藩聯盟成り王政復古の大業を決議す……………三六

二、王政復古大號令煥發より江戸城明渡しまで	四二
三、先生の信念と敬天愛人	四七
三、藩政改革に參與さる	五〇
四、榎本武揚等の反逆軍の征路に就かれた	五一
五、薩藩有爲の青年子弟を京都春日潜庵の塾門に入らしめた	五四
六、戊辰役の東征亡碑を建立さる	五七
七、上之園邸より武村二階堂別邸へ轉居	六一
八、齊彬公の養蠶奨勵法に盡瘁多大の好成績を擧げられた	六九
九、武屋敷と南洲先生の御家族	七二
二、先祖代々の愛書古諸書	七八
二、南洲先生の容姿と居常	九〇
三、先生の狩獵と愛犬	九六

三、薩軍の陣中に先生の官位褫奪の辞令書を手交した勇者上村直翁	一〇三
四、南洲先生と相撲	一〇八
五、西郷家の使用人家僕	一三八
六、南洲先生の歴史的感興物語り	一四三
七、他縣より年少慷慨の士來曉し先生に私塾し自ら名乗る四西郷	一四八
八、敬天愛人の信條は人種の差別なく外人にも注がれてゐた	一五二
九、上村彦之丞氏先生の一言で危き一命を助かる	一五五
三〇、明治十年役の勃發より武屋敷焼失まで	一六一

一、南洲翁祖先の薩摩入り

西郷家の始祖は政隆といつて菊地則隆の第二子でこの則隆は藤原鎌足第十五世の後裔として肥後の國司を承けて第七十一代後三條天皇の御宇、延久二年其任に赴き城を肥後之國菊地郡に構へて菊地氏を稱へたものでこれ即ち菊地家の始祖となるのである、政隆は菊地郡内にある十八居城の中の外城たる増永城に居城したのである、この城は西郷村に在るので政隆は之れより姓を西郷と稱へる事となつた、政隆の子に隆元―この子に隆季―この子に隆秀―この子に隆房―この子に隆有後凡二三代の記録が缺けてゐるが菊地氏八代主能隆の次男隆政は西郷三郎と稱へ其子の政朝は西郷四郎といひ、其十代菊地武房の子隆盛は彌四郎と稱へたといふ事は現在菊地家の系圖に明かに銘記されてゐる、西郷南洲先生が明治維新史上に有名なる安政五年の冬彼の勤王僧月照上人と大崎ヶ鼻に相抱擁して入水し月照は死し先生は蘇られし時に鹿兒島藩廳は徳川幕府の嫌疑を避けんがため西郷先生を大島に潜居させた此時に先生は菊地源吾と變名されて居る即ち先生宗家

の姓を冒して菊地と名乗られたものである、西郷家の始祖政隆の居城である増永城跡は今尚ほ肥後の菊地郡西郷村に儼存して其城の後に政隆の墓所と傳へらるゝ高さ三尺餘の五輪塔がある其墓の形狀からして政隆時代のものであることが首肯される、又其地に西郷岩宮神社といふ一小祠もある外に棚池と稱する壕隍の跡、古井戸及地藏院の遺跡が點々あつて座ろに往時を偲ばせてゐる、所で南洲先生の祖先が何時の代に我が薩摩入りされたかといふ點にをいて其頃の系圖が喪失してゐるために其氏名及年代等を詳かにすることは出来ないのは遺憾な事であるが、しかし薩藩史官の編纂に係はる藩士の家系を略述した「諸家大概」といふ寫本がある其の中に「西郷氏追テ考フ可シ建武ノ頃西郷九郎秀範ト申ス者有之候」云々……とある丈けに過ぎないが要するに西郷九郎秀範は波瀾多き建武の頃同族たる菊地氏一族と共に擧つて王事に力めて奮戦し君國のために殉死を遂げられしものではなからうか、

南洲先生の自記に係る西郷家系圖を先年西郷家に於て一見せしが先生の元祖を九郎兵衛としてある、九郎兵衛は建武の頃 西郷九郎秀範の後裔と思はれる即ち先生自記の西郷家系圖を記せば

一、西郷家系圖 (南洲先生自記家系記帳)

藤原性實名隆の字

◇元祖九郎兵衛

○某家より分立せしや其出づる處を知らず、只御記録所にある系圖を得て記す
○元祿?十二月廿五日死す法名道祖清居士といふ

◇吉兵衛

○平瀬治右衛門三男なりしが元祿三年午十二月四日養子となれり
○元祿六年酉二月廿一日養子成
繼目の御禮をなしたり

○寛保二年戊三月二十四日隠居して宜慶といふ
 ○寛延三年庚午十二月七日死す法名百心了主居士其妻何氏より來りしや知らず
 寛延二年己巳八月十七日に死す法名紅林玉露大師といふ
 新兵衛

○享保四年己亥三月十一日死す法名松屋道案居士といふ

◇覺左衛門

初小吉 吉左衛門

○享保五年子二月廿八日嫡子となる
 ○同年三月廿二日嫡子となりしが御禮旦初ての御目見得をなしたり吉左衛門と改名す
 ○天文三年己九月二日家督す御禮は同年十月廿二日になしたり
 ○同五年申五月廿八日覺左衛門と改名す
 ○明和八年辛卯八月十七日死す法名 覺法元雄居士といふ
 ○中村十兵衛の女を娶つて妻とせり

寛政二年庚戌十二月廿日死す法名惠心了圓大師といふ

◇吉兵衛

初小吉 小兵衛

○延保五年辰七月廿八日初て御目見得をなしたり
 ○明和八年卯十月十八日家督をなす同九年辰九月廿五日吉兵衛と改め御禮をなす
 ○享和三年癸亥潤正月廿八日死す法名惟光元明居士といふ
 ○町田此右衛門の女を娶りて妻とす天明八年戊申九月二十一日死す法名月心照潭大師
 といふ、後弄わり某氏より出來りしや知るへからず寛政二年癸戌十月廿一日死す法名
 月心智照大師といふ
 ○怪力の人なり皆世人の知る所なり、武藝を善す大山角四郎の門人となり

◇五郎左衛門

○寶曆五年亥十二月十一日初めて御目見得をなしたり
 ○明和六年丑九月廿五日別家を立たり

女

- 中村市十郎の妻となれり覺左衛門 初小太郎
 - 安永四年末八月廿八日初て御目見得をなしたり
 - 寛政五年癸丑八月十日江戸において罪あり割腹す士籍を消られたり法名天岩崇運居士といふ
 - 三原孫兵衛の女を娶りしが離別に及びたり
- 吉左衛門
- 親の科により士籍を放たれ親類預となれり
 - 寛政十一年巳未十二月晦日死す

女

- 初永山平太の妻となりしが離別して後小濱彦九郎の妻となりたり
- ◇龍右衛門隆允
- 天明三年卯十一月三日初て御目見得なしたり

- 寛政二年戊五月廿一日村山藤七の養子となれり
- 寛政五年丑四月六日村山家を辭して本家に歸れり
- 享和三年亥八月九日家督をなす文化四年子四月十五日御禮をなしたり
- 弘化四年未五月十九日隠居して遊山といふ
- 墓永五年壬子七月十八日死す法名西壽遊山居士といふ
- 日置の士四本大清院妹を娶つて妻とす文久二年壬戌五月廿九日死す法名壽操貞延大師といふ

◇吉兵衛隆盛

初吉兵衛 九郎

- 文化十一年戊八月廿八日初て御目見得をなしたり
- 天保五年午正月廿六日九郎と改む
- 弘化二年巳十一月十五日御勘定方小頭となれり
- 同四年未六月廿日家督をなし嘉永二年酉三月十五日御禮をなし吉兵衛と改む

○嘉永五年壬子九月廿七日死す法名自覺院祖榮忠道居士と云ふ

○椎原權右衛門の女を娶つて妻とせり

嘉永五年壬子十一月廿九日死す法名圓眞霜鏡大師と云ふ

小兵衛

○文化十一年戊八月廿八日初て御目見得をなす

○天保六年未六月十九日大山彦八養子となれり

◇吉之助隆永

初小吉、吉之助、善兵衛、吉兵衛、三助、菊地源吾、大島三右衛門

○天保八年酉十二月廿二日初て御目見得をなす

○嘉永六年丑二月九日家督して同年三月朔日御禮をなし善兵衛と改む

○安政五年戊午十二月晦日故ありて菊地源吾と姓名を變し大島に流寓せり其うち一男一女をもふけたり

○文久二年壬戌十二日家に歸れり同十五日又大島三右衛門と變名したり

○文久三年壬戌六月徳之島に流され同月六日吉之助と改められたり同年七月十四日沖之永良部島に變せられ遠島のうへ園に入られたり元治元年子二月赦を得て家に歸れり

○元治元年子三月十九日御軍賦役となれり

○同年四月十四日御小納戸頭取にて御用取次見習となれり

○元治元年子十月九日御側役となれり同日西郷に復せられたり

○元治二年丑五月九日大番頭にて御側役勤となれり

○慶應三年卯十二月大政官の參與となり翌年辰二月官を辭したり

○明治元年辰二月征討大總督の參謀となれり

○同二年巳二月廿三日參政となれり

○岩山八郎太の女を娶つて妻とす

○明治三年午正月十六日辭職御許容相成一世養米百五十俵を賜たり

○朝廷より軍賞として高二千石位正三位を賜ふといへ共固辭して不受

○明治三年庚午八月十五日大參事に任せられたり

女

○市來六左衛門の妻となれり

吉二郎 隆廣 初金次郎

○天保十四年卯八月十五日初めて御目見得をなす

○番兵二番隊監軍となり越後に陣出明治元年戊辰八月二日五十嵐川に於て賊と戦ひ丸に傷き同月十四日死す、高田に葬る法名義勇軒猛道忠逸居士といふ

○有馬九之丞の女を娶つて妻とせり、慶應元年乙丑十月十六日死す法名玉質貞艶大師といふ後妻仁平藏妹を娶れり

○明治二年巳十一月十一日軍攻を奏し終に戦死を遂げり、親子兄弟不惑の譯を以て扶持米七拾俵を三十年限り下し賜り候

女

勇袈裟

○明治三年庚午潤十月十四日父吉二郎戦死抜群の功を以て別家立の恩命ありて吉二郎

を家祖に立て相續致す

女

○三原傳左衛門の妻となれり

女

○大山彦八の妻となれり

信吾 隆興 初龍助 龍庵

○文久元年酉九月晦日還俗いたす信吾と改名す

○明治二年巳二月二十三日監察となれり

○同年四月朝命を以て魯佛二國形勢視察のため洋行せり、朝廷の奉命なるにより監察は同月二十四日免せられたり

○出羽秋田口にて朝廷より軍監を命せられしが戦止みて戰場を踏まず

○伏見の初戦に賊壘を打敗り鳥羽の戦急なるを聞き一番隊に加はり應援に出て正月四日朝侵入して重傷を蒙りたり、然れ共平癒して江戸に出て又諸所の戦に出でたり

○明治三年午七月晦日横濱に歸着せり、同年八月二十七日兵部權大丞に任せられ正六位に叙せられたり

小兵衛 隆雄 初彦吉

○明治二年巳二月二十九日分隊長となれり

○八幡の戦より初め後に一番隊となりて江戸に出て數度の戦を経て白川に出て諸所の戦を経て會津城を攻略したりし時も相加はりたり

南洲先生が建武の頃の西郷九郎の後裔であること此先生自記の家系記帳によつて略々推知され得るであらう

三、藩主齊彬公に見出さる

南洲先生は鍛冶屋町邸から嘉永六年に上ノ園町に轉居され武邸には明治二年の冬轉居され其の間の年数は約十七年間にわたつてゐる先生は此上ノ園町居住時代から島津家の藩臣として又一家の家長として

活躍の第一歩を踏み出したのである即ち先生は安政元年正月に中小姓組となり藩主齊彬公に見出されて早くも江戸お洪を仰せつけられたのが實に先生二十八歳の時で此上ノ園町の居宅から首途したのである、留守宅は老祖母(四本氏)と吉次郎、信吾、小兵衛の三令弟それに三人の令妹並に忠僕水田熊吉の實父權兵衛も留守居してゐた、當時熊吉の實父は重き病の床にあつたが、先生はその首途の日まで懇ろに看病された南洲先生が藩主のお供役として晴れの首途の詩に

壯士腰間三尺劔。欲排妖霧靚青天。不堪雙淚辭親日。正是丹心報國年。

右詩句に不堪雙淚辭親日の轉句は後に居残る留守居の肉親と老祖母(四本氏)等への溢る

るばかりの愛情と重大なる使命を帯びて生還を期せざる覺悟の程が偲ばれ又先生が平素師と仰いでゐられた關勇助廣國先生が

贈君有一言。不說窮與達。近聞蠻夷船。窺竄謀囊括。我公帷幄明。千里見毫末。壯哉

烈士膽。水火踏可越。斬蛟劍在手。捕虎弦臨筈。慎哉千斤弩。莫爲蹊鼠癸。

と詠まれたこの有名な五言絶句の詩も實に此時の作詩で南洲先生首途の幸先を祝福すると共に 激勵し且深く訓戒したものである

四、再東上の途次勤王志士との會見

斯くして晴れの江戸上りをした南洲先生は安政四年四月江戸を出發、一旦歸藩して上ノ園町の邸に入り更に又同年十一月一日に鹿兒島を出發して上京、その途中熊本に立寄り長岡監物と會見し十二月初旬江戸に到着の上、同八日越前邸に橋本左内を訪ねて共に國事を談じたが先生が左内との會見は此時が初會見であつた、此間南洲先生は建儲の内勅降下について江戸と京都の間を往復されて成就院住職月照とも暫々會見してゐることには世上周知の史實である安政五年の六月七日先生は江戸より歸藩して藩主齊彬公に面謁し審に關東の形勢を報告席暖まる暇もなく同月十八日鹿兒島を出發して江戸に上つたのである途中七月七日先づ大阪に着いて吉井幸輔(友實)と土浦藩 大久保要の兩人に面接して同十日吉井と共に京都に上り、此處で梁川星巖、春日潜庵を訪問し、天下國家を論じてゐたが此月の廿四日餘りにも突然に藩主齊彬公の薨去といふ一大悲報に接したのである、南洲先生にあつては青天のへきれきであつた先生の悲嘆は譬へんにもなく「噫

我事終れり、歸藩して殉死を遂げん……」と深く決意した。月照上人に慰諭されて歸藩を思ひ止つた、盡きぬ悲涙を胸に秘めた南洲先生は八月初旬近衛公のお頼みにより水戸藩に賜ふところの内勅を携へて京都を出發、江戸に上つたが幕府の壓迫を受けて内勅を傳達することが出來ず同二十四日江戸を發つて三十日京都に入り京に集ふ天下の諸有志と會合を重ね此處に井伊大老を排斥して幕政を改革せんことを企劃したのである。天下はいよいよ騒然として雲行荒い中に幕府の勤王志士に對する壓迫は日々に加はり捕吏は先づ月照を捕へんとした危機一髪の際に南洲先生は九月十三日月照有村俊齊と共に伏見に出でて大阪に落ち大久保要の宅に月照を潜居せしめ先生自身は再び入洛した、先生京入りの直後勤王志士逮捕はますます厳しく同月十九日には間部閣老自ら京都に入つて、志士捕縛の任に當つたので南洲先生の身邊も危くなつて來た、そこで先生は有村俊齊、伊地知正治等と共に一時難を大阪に避けたが、廿四日幕府の捕手は大阪にも迫り追跡急を告げて來た、よつて先生は月照、有村の二人を伴ひ、綱目に張られた捕吏の眼の大阪を密かに脱出し海路歸藩の途につき、瀬戸内海の波も靜かな船路をつゞけて十月一日下

關に到着、月照を有村に頼んで一時筑前に潜匿せしめ先生は同六日鹿兒島に着いて上ノ園町の邸に久々で旅装を解いたのであつた。筑前に潜居の月照は同月十日平野次郎を伴ひ、鹿兒島に到着し上ノ園町の先生宅を親しく訪問して種々國事について談合を重ね此時月照は藩廳の命によつて今の第四百四十七銀行の隣地にて近年まで久木田氏が住ひた當時のお使者宿たる田原助次郎方に投宿し藩廳の監視を受けてゐたがこれより一週間目日向への途即ち十月十六日の曉明に先生、月照は平野と共に舟を寒月河へかへる灣上の大崎鼻に漕ぎ出だし小宴を張り其沖合で先生と月照は相抱いて入水、驚いて平野が之を救助したが月照は遂に死してかへらず南洲先生は幸ひにも蘇生した、時に先生三十二歳にして月照は四十六歳であつた、この餘りにも有名な一大悲劇の史實は既に世間周知の事であるが、この大悲劇について私が先年調査した所で未だ世に知られざる史實に就て述べよう。南洲先生が月照と共に大崎鼻の沖合に入水された當日上ノ園町西郷家では家長先生入水といふ意外な報知に同家の親類の四本義照さんが急遽駕籠を用意して三枚の着物をこの駕籠に入れ人目繁き大門口下の船着場を避け先生の乗つた舟を天保山の海岸

に廻航して貰ひここで氣息奄々たる南洲先生に着衣を着替へさせた上駕籠で上ノ園町の邸におくつた。先生が入水當時の着衣は四本家で洗濯の上三日程してから西郷家に届けられ又天保山より先生が上ノ園町の邸まで乗られた駕籠は四本さんが記念のためとして貰ひ受け同家に格納されてあつたが惜しいことには明治十年役の兵火に罹りて焼けてしまつた、この四本氏は先生の祖母君(日置の四本太清院妹)の實家の人で前記四本義照さんは即ち先生の祖母君の二弟である、此史實は義照さんの二女満子さんの直話であつた四本家の宅は今の鹿兒島市松原町日蓮宗教王寺の在る所に當時在住してゐたのであつた

五、責任感の強かつた先生の祖先覺左衛門氏

先生の家系中に覺左衛門といふ先祖が寛政五年癸丑八月十日江戸に於いて罪あり割腹し士籍を消されたりとの記述がある、それに就て隠れたる物語がある、明治三十七、八年の日露戦役後、私が一日上村彦之丞將軍を東京芝三田網町の邸を往訪せしに、幸ひに將軍も在邸で將軍の養嗣子の從義氏の母堂なる西郷從道侯未亡人清子刀自も同家へ來訪中であり清子刀自を主賓とし將軍及び家族之れに私も一緒に晝餐を攝つた、其席上、私は將軍の取持を以て清子刀自に南洲南浦の事共に就て、くさくのお尋ねをし、ノートに數多き未聞の珍史料を走り書きにした其中に先生の祖先の覺左衛門さんが罪あり割腹して士籍を削られた事に就いて南洲先生が造次顛沛の間にも決して祖事祭を愚かにされなかつたといふ美しき物語には感激して覺へず涙を掬つた、乃ち清子刀自の云はるゝに家兄様(南洲先生)が征韓論で、お國許へ御出立の當時のことです、誰かが玄關に音なふ氣配がしますので、耳を聳てますると信吾くと呼はるるお家兄さまの語音なのであり

まするから玄關へと御出迎へする途端お家兄様は臺所にお見へになり信吾は留守トやな
わー俺は鹿兒島に歸るので、信吾に頼みに參つたわけぢや、留守なら詮方がない、お前
に話し措くから信吾にお傳へ下さい、芝高輪大圓寺の御墓所の中に我が西郷家の先祖の
覺左衛門さんは實に氣の毒の人で、俺が東京に居る間、月の十日のお命日には缺がさず
墓參して香花を捧げて來たが、俺が今日東京を去つた後は信吾に十日の忌命日には屹度
墓參してくれと頼むとのこと、始めて御家兄様の歸國といふを知つて、暫時なりとも
表座敷へ請ト參らせてお別れ申さんと表へ御案内せうとしました。が御家兄様はこれで歸
らう申されて辭去されました、これがお家兄様とは最後の御別れの場面であつたので御
家兄様の辭去後主人(從道侯)も歸宅して妻から逐一お家兄様御訪問の次第を物語りしま
すと主人も留守なりしを残念がり大圓寺の祖先墓の存在も初て承知して覺左衛門様のお
人となりを取調べますと覺左衛門様は江戸芝屋敷の御守居のお小納戸の下役を勤められ
たが其上役様がお納戸金を私消されたので責任感が強い覺左衛門様は割腹して相果て、
其潔白を明瞭にされた清廉の侍であられたけれど、同座の人といふを以て處置され士の

籍まで削られた方で御家兄様は其お人を氣の毒がり月の十日のお命日には墓參を缺がさ
れたことはなかつたことでありました、覺左衛門様の次の代の龍右衛門隆允様の代
にはもとの通り士籍を復されて居られ其方がお家兄様(南洲先生)の曾祖父上様で其家内
様といふのが日置の四本大法院の妹様で、お孫の御家兄様が御生誕の時袈裟をかけて居
られ、西郷家通り名の小吉に長男なるゆへに太郎、之れに袈裟かけの生誕の三事を取交
へて小吉、太郎、袈裟と名付けられたといふ逸話もありて此の祖母上様はお家兄様を可
愛がられること並み大抵ではなかつた、祖母上様が南島御配流中に死去されたのでお
家兄上様が始て祖母様の訃を聞かれたときは終日終夜固圍の中で悲嘆遺瀨なかつた、承
ります云々と清子刀自の話は哀々切々聞くものをして蕭乎として襟を繕はしむるもの一
再ではなかつた又南洲先生自記の家系圖には先生の諱を隆永と記して隆盛とは書いては
ない後年河口雪蓬翁が先生自記の隆永の二字の下に「隆盛と改む」の字を附け加へ、なほ
河口之を書き加ふと附記してあるが隆永が隆盛と改められし由緒に就ては心友なる宮内
少輔吉井友實が明治の初年宮中の御規式の御召狀に隆永の永の字をわすれて隆盛と書か

せしめしに據出るのである

六、南州先生と上之園邸

西郷家が鍛冶町から上之園町へ轉居

西郷家が鍛冶町から上之園町へ移轉のことは西郷家の記録に見へてゐないが諸種の參考資料に基いて考察するに嘉永六年の末頃南洲先生は其年の九月廿七日から十一月二十九日迄の間に嚴父吉兵衛慈母椎原氏の御兩親及び曾父君龍右衛門さんを失はれ其一年忌法要を終へてから上の園町に移轉されたやうで時に南洲先生は二十七才、從道侯は十四才であつた、上ノ園町の移轉先さといふは現在の女子興業學校の本門前あたりの地點に該當するのである縣立圖書館の珍襲にかゝる嘉永年間の鹿兒島御城下圖によれば上ノ園町西郷吉兵衛宅地六畝一步と記されてある家の構造はといへば瓦葺で間どりは八疊と六疊、裏座が六疊に小座があつた、其玄関の上に二階建があつて當時其附近には二階建の

家は僅かに二軒あつた位で上ノ園町方限りの目標となり家族は家長が南洲先生即ち吉之助、吉二郎、信吾、小兵衛の男兄弟に三人の妹方會母君四本氏家僕永田權兵衛熊吉の父子といふ多人數が住居してゐられたが此の上ノ園邸で南洲先生の逸話が傳はつてゐる、先生住宅附近は甲突川の豊田殿の川原を控へて後に西田、武の田圃があつて大雨の際等は地形上甲突川の水が氾濫する一方、西田、武方面からの濁水と合流して先生宅から上の園町一帯の地は降雨の際にこれ等の汚水で家々戸々毎に浸水した、先生がこの上の園町に轉居されてから安政四年の夏に大豪雨があつて甲突川が一大氾濫をなし上の園町方限一帯の地は悉く家々戸々に浸水して宛然湖水を見る如くになつた、此時先生は眞ッ先きに井戸への浸水を恐れて疊を井筒に伏せて之を防水した爲無難だつたしかるに附近民家の井戸は厠と一時に押し寄せる濁水に浸されたため減水した後も汚水と化して暫時は使用が出来ず困却してゐたが先生は水は一刻も人生缺ぐ可からざるものだ、拙者の所の井戸は大丈夫だ皆汲みなさい……といはれて住民は蘇生の思ひで感激した一時は水貰ひで先生宅の門前は市をなしたといふ、先生の此機敏の處置はまことに常意即妙の計ひとい

ふべきで又一面眼中天下國家の外餘念なき大人物の先生が斯る些事に直面してもその用意の周到にして隣人愛の念に燃へてゐられたことがうかがはれるではないか

七、四本家と西郷家對日置島津に絡まる經緯

此機會に於て前述の四本家と西郷家對日置島津家に絡まる經緯について未だ江湖に知られざる秘話を述べて諸種の西郷隆盛傳の流布本を訂正したいと思ふ、此秘話については殊更に私が異説を立てるやうに考へられる人もあるかも知れないがこれは此の史實中の人物の直話であり決して根據なき浮説でないことを前以つて斷つて置かう、前述南洲先生の曾祖父覺左衛門が割腹して西郷家は士籍を削られた上祿高を召上げられ、次ぎの代の龍右衛門隆充に至つて漸く士籍を許されるまでの西郷家の生計といふものは赤貧のドン底に達し一日を糊することさへ容易でなかつた幸ひにも此苦難時代に西郷家の一家が生命を繋ぎ得たといふのは南洲先生の祖母四本太清院の妹さんが日置の領主島津左衛

門久風の御家中にあり此祖母さんが日置家に入出入して米鹽を調達されたからこの緣故に據て西郷家は四本家を通つて南洲先生の父吉兵衛が日置家に入出入することになつて日置家とは非常な緊密さを加へ、後には日置家の次男家たる赤山靱負久普の御用人に起用された、此赤山靱負は八千石を領して藩主島津齊彬公城代御家老を勤めた島津左衛門の未弟で別居して赤山姓を名乗つたもので父吉兵衛が赤山家の御用人として仕へてからは南洲先生も此赤山家に入出入した當時先生の親友の大久保一藏も靱負に其名を知られるた先生の父吉兵衛は當時西郷家の通り名なる九郎と稱して赤山家の外嫡兄の島津左衛門家の家政上のことまで采配をふるほどに信任を得るようになったが當時薩藩では此種の御用人役を「用頼み」と稱してゐた

前記赤山靱負は資性極めて豪邁、且正義觀念の強い人で彼の有名な嘉永年間の島津齊彬公繼嗣事件に連座して藩譴を蒙り遂に座敷牢を申しつけられ其揚句には藩廳よりの御召狀を受けてしまつた、(當時藩よりの御召狀を受けたものは自害せよとの謎)そこで靱負は嘉永三年三月五日自邸(今の天文館通日置屋敷跡一角)において従容として自刃を遂げ

たのである其時の介錯人は加藤新平といふ撃劍家であつた、從來の記録の流布本には鞆負の介錯人は南洲先生の父とあるがこれは間違ひで此の加藤新平である、赤山家「用頼み」の南洲先生の父九郎は主人鞆負の臨終を見届けて藩廳の允しに據て一切の處置をつけたのである鞆負は死の直前九郎を側近く呼んで……齊彬公が一日も早く七十五萬石の薩、隅、日、琉球領知の太守たる御家督を繼承されんことを我は死して祈らんお方も齊彬公御家督の事を神佛に祈つてくれヨと……悲壯な遺言を申され介錯人の加藤には其方の介錯誠に御苦勞千萬である其介錯の刀は永く其方の家に收めて呉れ……と盡きぬ訣れの言葉を遣して自害したのである（法命覺院劍空夢相居士、墓所日置家の菩提所なる日置郡柗山墓地に在り）從來の流布本の西郷傳記には此時南洲の父九郎は襖衣を遺品に貰つたといふことが實説として取扱はれてゐるが此説は右の齊彬公繼嗣事件に赤山鞆負と同志で齊彬公擁護派の巨魁高崎五郎右衛門 實子なる高崎正風が誤り傳へたもので真正の史實は赤山鞆負が切腹の際は身に袴を着けてゐたので南洲先生の父九郎には鞆負が遺品として血染の肩衣を貰つた、この秘話は齊彬公に近待して公より種々の顧命を蒙つて

ゐた市來四郎から翁が翁の生前に聞き及んだもので市來翁の直話に……これは俺が親しく鞆負の介錯人であつた加藤から聞いた……とあるから九郎が鞆負から血染の肩衣を頂戴したことは確實性があるので、話は軌道に逸れたが南洲先生の父九郎は血染の肩衣を鍛冶町の自邸に持ち帰りこれを南洲と大久保一藏に示して鞆負が正義のために立派な最後を遂げた臨終の悲壯な場面を詳さに涙を浮べて説き聞かせたので南洲、大久保は切齒扼腕共に正義に一貫して藩國のために盡しもつて先輩の遺志に報ひようと深く感奮したのである、時に南洲は二十四才で大久保は二十一才といふ血氣旺盛な年輩であつたこれより南洲先生の日置家に對する敬慕は非常なもので先生が日置家の出なる桂久武と水漁の交りをなし共に王事に勤勞し、又明治十年役には死生を共にされたのも實に西郷家が日置家と親密を重ねられた因縁によるものである、文久二年に南洲先生が南島に配流中に祖母の四本太清院病死の訃報に接した時は祖母の高恩にも報いず先き立たせなは梅田雲賓先生の如き諸先輩も死しわれ今この世に何の楽しみがあらうかと配所の月を眺めつつ長太息されたとこふことは私が故西郷菊次郎翁から翁の生前再々聞く所で現に西

郷家に興入れの時持参し來た道具の一つたる蝶箆筒が今日も同家の家寶として屢次修繕を加へられ秘藏されて家庭訓を垂れてゐるが南洲先生がこの祖母の並々ならぬ當時の勞苦に對する感謝思慕と日置家に對する敬虔の情のいかに濃厚であつたか前述の概説に依つて想像に餘りあらう

八、大島配流三年後の國事奔走

南洲先生は大島に配流三年——文久二年二月十二日に歸藩を命せられ上ノ園町の邸に歸着名を大島三右衛門と變名され南島に配所の月を眺めつゝ只一念國事に感を練つてゐた先生は三年の牢舎生活に些かの疲れも見せず歸藩の翌十三日には大久保一藏と重臣小松帶刀の邸に三人會合——久光公が近く上京して公武周旋の意あることについて重大意見を交した、十五日には親友等の奨めもあつて南洲先生は指宿温泉に入湯をかねて靜養されてゐるが、此日に先生は藩の徒目附、鳥預庭方の兼役を命せられた、三月初旬に指宿から歸郷して同十三日には村田新八を従へて鹿城下を後に京に上つたが途中肥後の形

勢を探り二十一日に馬關に着いた、此所で小川彌右衛門、平野次郎等と共に同地の勤王志士白石正一郎の家に會合して京都方面の情勢を聞き、即夜海路大阪に向ひ二十六日大阪に到着の上郎士等を統御してゐたが二十九日伏見に至り、又四月八日大阪に引返し久光公の到着を待つことになつた、南洲先生の此行動は久光公の命令を違へるものなりとして公の激怒に觸れ先生は鹿兒島へ護送され一旦上ノ園町の自邸に入つたが夏近い六月再び紫紺の波躍る七島灘を乗り切つて徳ノ島に配流の身となり、名を吉之助と改められた、七月十四日には更に沖永良部に移送され和泊の獄舎に入ることになつた前述の祖母四本氏の死去や翌文久三年の薩英戦争の勃發も實に此和泊の獄舎で聞かれたのである、元治元年南洲先生は獄舎で三十八才を迎へたが此頃に至つて薩藩政廳の動向も先生のためには頗る有利に展開し二月二十二日には親友の吉井幸輔(友實)弟信吾の兩人が相携へて先牛謫居の和泊を訪づれ藩候召還の命を傳へ、同二十八日には早くも先生は鹿兒島に歸つて上ノ園町の邸に入つた、越へて三月三日南洲先生は國事周旋の命を受けて上京の途について十四日京都に入り、十八日には軍賦役といふ重要な職務を拜し、次いで四

月十四日御小納戸頭取にて御用取次見習を命せられ十月九日に御使役となつて同日西郷の姓に復されたこれより先生は諸藩の志士と相會して密議を凝らすことが頻繁となり九月十一日には大阪に下り勝麟太郎(海舟)と初の會見して幕府の内情及開港の意見を聞いてゐる、この大阪に於ける勝海舟先生と南洲先生の初對面について私は勝先生の生前に赤坂氷川森の先生邸に往訪してこのことただしたるに勝先生は次の如く語られた

「俺が喃！初めて西郷に會つたのは元治元年九月十一日大阪に於てであつた、その時西郷は肥大の体軀に黒ちりめんを羽織つて傳家の大小刀を帶んで其堂々たる風采は歌舞伎で見る大星由良之助を見るようであり、一城の御留守居役か又は城代家老の如き立派な態度には俺れも喃！これは油斷のならぬ人物であるわいと考へさせられたヨ……」云々と當時の感想を洩らされてゐる通り南洲先生がよく禮装を整へて進退節度を苟くもせざりし人であることが判り木綿羽織に山太郎刀を差し草履をつっかけた狩裝束の先生を見て、衣服に無頓着で如何にも粗野の風の人であつたように考へる人があつたら甚だしき間違ひである慶應元年正月八日小倉を發して十五日に歸國した南洲先生は防長處分の功

によつて藩公より刀一口を賜つてゐる。國事に寸暇なき先生は又直ちに上京した、直後の四月幕府は防長再征の命を下すといふ報が來たので先生は大久保、小松等と相會して薩藩は出兵を拒絶するの藩論を決すべく同二十二日京都を發つた、此歸國に際しては坂本龍馬も南洲先生と行を共にして五月上旬歸國した、此時南洲先生は大番頭を命せられてゐる、閏五月六日岩下佐次衛門(方平)京都より急遽歸藩して徳川將軍の進發を報つて先生の出京を促して來たので先生は同十五日岩下と鹿兒島を出發上京、同二十三日京都に入り各方面と接渉を重ねてゐた、十月四日藩命により歸藩して上ノ園町の自邸に入つた、此年先生は有川矢九郎の取持ちで藩士岩山八郎太の女系子を娶つた、新妻系子さんを迎へて憩ふ間もなく先生は十月二十五日又も上京、十二年黒田了介(清隆)と會して薩長聯合の大策を議した、翌れば慶長二年南洲先生四十才の春を迎へた正月——京都日本松の薩摩邸に於て小松、大久保、木戸、坂本、黒田、村田、三好、品川の諸豪と會同し正月二十日の夜に至つてこゝに薩長聯合の盟約が結ばれた、當夜盟約の議まとまつて祝宴が催され天下の諸豪勇士も痛飲敬語宴酣なるこゝろ薩藩の誰れやらが隣室から一人の美

少年を掠して薩摩琵琶を演奏せしめた、この演奏の美少年は鹿兒島城下は内ノ丸の出身姓を兒玉、名を平藏諱を利純、鹿兒島一の美少年で當時の兵兒仁才衆は平藏を稚兒是内ノ丸、玉顔亦玉顔、と目且したほどの容顏美麗の美少年がこの歴史的薩長聯盟成立の祝宴場で弾トた曲目は「形見の櫻」で漕々切々の演奏には並居る勤王志士の嗚を絞らしめた中にも長藩の木戸松菊(孝允)は此美少年の悲想なる琵琶歌に感愴を深ふして即席左の一詩を賦してゐる

別離在近歎分決、忽聞座邊彈四絃。曲是悲想第一曲、人是少年第一人、追懷往事感追骨、不覺紅淚自潛々、知是明朝浣水夢、半在京城半故園、

木戸松菊の自筆にかつゝ此詩稿は其後長府の桂彌一に傳はつてゐたが薩摩出身の薩摩琵琶彈奏家にして明治時代名手西幸吉が十數年前長府の有志に聘せられ薩摩琵琶を演奏して非常な喝采を博した際に西は長府有志からの謝禮を固辭して受けなかつたので桂彌一は謝禮のかほりに前記木戸の詩稿を贈つて謝意を表した、この國寶的明治の維新史料たる詩稿は西幸吉没後、其女婿なる海軍中將上田良武宅に現に秘藏されてゐる、此劇的薩

長盟約の成立當夜の祝宴場で薩摩琵琶を演奏した美少年兒玉は征韓論で官を辭して故山に歸り十年戦役には南洲先生に従つて各地に奮戦した勇士で晩年は鹿兒島新聞社に奉職して八十余歳の高齢で逝いてゐるが明治維新當時の兒玉の友人連は後には元帥、大將中將といふ顯職にのぼつてゐる、日露戦争の凱旋後滿洲丸で野津元帥、高崎正風、上村彦之丞、清浦奎吾其他の將帥が鹿兒島に來航して南洲神社に戦勝報告を營みたことがある其時料亭鶴鳴館で盛大な歡迎會が開かれた時には兒玉も出席して野津歸つて來た會津戦争の東山の一夜の事よ……と親友の野津元帥を盛んにひやかしたものであつた、斯くて南洲先生は薩長の盟約めでたく終へて同年二月二十九日小松、吉井、坂本等と相携へて歸藩の上國事を談議してゐた、六月十七日英國公使パークスが軍艦で鹿兒島を訪づれて來たので先生は翌十八日早速寺島陶藏(宗則)を同伴して英國にパークスを訪問して會見し、兵庫開港について長幕の事情を告げて彼我の親交を計つた、七月十二日に上ノ園町の自邸で嫡子寅太郎が生れ九月には大目附を仰せつけられるといふ南洲先生にとつては内外共に順風の潮に乗ツかり先生の身邊はいよゝゝ多事となつて來た次で先生は大目

附の役を辭して十月十五日小松等と共に京都に上り、十二月九日には英國通譯官サトーと應接のため兵庫に赴いた此兵庫に於ける南洲先生とサトー通譯官との會見應接について下の如き興味ある逸話が傳はつてゐる

九、怪物パークス英公使も先生の人格 には數歩を譲つた

サトー、アーネスト、サトーは本邦駐劄の初代英國公使パークスの通譯官として後には本邦駐劄公使として手腕を發揮した東洋通でことに日本通をもつて外交界に知られた名外交官であつた、元々サトーは醫者で早くより本邦に渡來し流暢なる日本語を使ひ日本の事情に精通しパークス公使の通譯官となつたもので、またパークス英公使は明治維新前より明治朝の上半期に亘つて本邦駐劄初代公使として南洲先生とは明治維新前より面識があつた剛腹眼中人なく無理を押通す怪物のパークスも偉大なる人物の南洲先生の人格には平生より數歩を譲つてゐた、其のパークスの許に在るサトー通譯官も南洲先生と

は度々會見してゐるが其サトーが先生の巨眼について「丁度明治維新前場面は兵庫港内で、パークス公使の命を受けて神戸碇泊中なる薩藩の船を訪問した、其際に珍らしき人物に面會したのである其人は大きく逞しき男で輝く黒き大目玉を持つてゐる、彼は船室の寢台に横はつてゐた、其名を問へば船員は島津左仲といふ人物ぢやと答へた、予は彼の腕に刀傷の痕をチラリと認めた（南洲先生の腕傷は少年時代甲突川で喧嘩された時の傷痕）予は其後數月を経て薩藩人の訪問を受けた引見すると其人は予が一千八百六十五年の十一月に島津左仲として紹介された人であつた、然るに今回は其人島津左仲とはいはず西郷吉之助でござると名乗つた、予は貴方は西郷といはるるが島津左仲と申す人ではないかと問ふたら彼は呵々大笑した予は此處に至つて初めて島津左仲とは假名であつたことを首肯して挨拶を交換したのである、彼は一時黙然としてゐたが彼の眼は大なる黒ダイヤの如く光り輝いた暫時黙してゐた彼が靜かに口を開いた其口を開く時には誠に友愛に満ちた微笑が満顔に溢れ出てゐた……」と其自著に書いてゐる、これは誠に南洲先生の言貌を描寫し得て甚だ滋味あるものがある、先生一度怒氣を發すれば件の大目玉

(先生の眼は虎眼)光り輝いたもので先生が巨眼翁又は目太さあといはれたのであつた又先生不氣嫌の際等は煙管でよくこの巨眼のあたりをグルグル廻された、然し乍ら南洲先生の巨眼と面相はよく調和を保つていふにはれない柔和な優し味が溢れ三尺の童子でも大人でもなづき相な和かな相貌を持つてゐられたところに南洲先生が古今獨歩の大英雄たる所以も實に此の點にあると思ふ私が河野主一郎氏の生前聞いた一話に、明治西南役直後或東京の油繪師が南洲先生を油繪に描いた、これが當時非常な評判となつた時横濱の英國領事の夫人がこの油繪の南洲先生を一見して、これは強盜か辻斬の如き惡黨を描いたものではないか、成程眼は大きいこの眼に伴ふ優し味はチットモ面相に表れてゐない、薩南八千の子弟が、生命まで捧げた南洲先生には千萬人がなづむべき優しみが出てゐなければならぬ筈なのに此油繪には少しの優しさが無い、かのナポレオン一世は眼光炬の如く輝いた勇猛果敢の風貌の持主であつたが彼れには口邊に優しみが溢れ出で、赤子も彼に懷づみたこの優味あり懷みがあり彼が萬人に擁されて大偉業を樹てたのもこれが爲めである、よく泰西の畫家は彼れを描くに赤子を以て配するのも彼の目彼の口

邊に溢れ出づる懐かしみを表情するにある、西郷の油繪に此表情の描寫なきが即ち強盜辻斬の惡人の相といふのである……と領事夫人は評したとあつたが之は誠に至評であらう、眼といふものは男性と云はず女性と云はず最も力強く口より、より以上の支配力を持つものトや梨園界の明星九代目の成田屋の目は太かつた築地のお目玉様と異名を取つてゐた團十郎丈が歌舞伎でお家の十八番ものを演ずる時はこの大目が異様に舞台一面を支配するが如くに輝いた私は彼の至藝を舞台面に見る毎にいつも此感を湧かした、また山本權兵衛さんの眼玉も大きく優しき語音の持主で此言音と太き目との表情に云れぬ懐かしさがあつた序に云ふ權兵衛さんは築地の目玉の腹藝即ち至藝を愛して團十郎丈が出演の時には目深く帽を被つた權兵衛さんを歌舞伎座の看棚に見出す事が度々あつたさに南洲先生の銅像設作を託された彫製家安藤照君も大南洲の風神を表現するに就てこの先生の兩眼に最も細心の工夫を凝らしたと聞くが、この眼あつて初めて南洲先生が生きたり死ぬるのであるから安藤君の苦心も頗る此點にあつたらうと安藤君に多大の敬意を表す

一〇、薩長藝三藩聯盟成り王政復古

の大業決議す

南洲先生は慶應三年四十一歳の春を迎へ正月二十二日京都を出發して二月一日に歸藩上ノ園町の自邸に歸着されたが十三日には土佐、宇和島に使者を命せられて十五日には早くも高知に至り十六日山内容堂公に面謁し廿四日には宇和島に至り、伊達宗城公に謁し共に上京國事に盡力せられんことを説いた、三月二十五日藩主忠義公の後見久光公に扈從して鹿兒島を發した此行には薩の陸軍兵七隊海軍兵七百人を統率して四月十二日京都に着した、五月二十一日に中岡慎太郎、板垣退助と共に小松帶刀の寓に會して王政復古のことを議した爾後小松、大久保、伊地知(正治)山縣(狂介)品川(彌次郎)中岡、後藤(象次郎)等と共に屢々會議を重ねた南洲先生は十月八日に藝藩の辻將曹、植田乙次郎、長藩の廣澤兵助と會し、ここに薩、長、藝の三藩聯盟して復古の斷行を決議した十月十二日討幕の宣旨を乞ふた翌十三日には討幕の密勅を薩藩へ、十四日には長藩に降し賜ふ

た、此處に至つて南洲先生は大久保、小松、廣澤、品川、福田(俠平)と共に連署し請書を奉つた(此日將軍慶喜公より大政奉還の議を奏請せしを以て後に討幕のこと止む)先生は同十七日小松、大久保、廣澤等と藝船萬年丸に搭つて三田尻に上陸し二十二日毛利敬親公父子に面謁し、二十四日三田尻を出帆、二十六日歸藩、直ちに忠義公、久光公父子に面謁、討幕の密勅を呈上して上ノ園町の邸に入つた、滯慶一ヶ月にして十一月十三日藩主忠義公に扈從して海路東上、十七日三田尻に上陸し翌十八日島津忠義公と毛利元徳公との會見あり、十九日三田尻を出帆、二十三日に京都に着してゐるが、其前日一行の乗つた船は大阪川口に着いたので一先づ大阪の薩摩屋敷に休息した大阪の薩摩屋敷は大目橋際に在つたが此薩摩屋敷の下の大目橋筋と江戸堀の間に伊勢屋七兵衛といふ其當時豪華な旅館があつた、此旅館が薩藩の指定宿で其旅館には宿泊した薩藩士の氏名が掲げて伊勢屋の薩摩宿として有名なものであつた、南洲先生一行は當日久しぶりに此伊勢屋の二階で大久保、岩下の重臣と共に酒を酌み交はし旅の疲勞を醫やした此の宴には大阪の藝妓衆も侍つてゐるが無論南洲先生おなトみの紀の國屋の乾女小寅さんも其座に侍

つてゐた、此小寅さんは豚豚の如く肥つてゐたところから豚姫といふ綽名をとり、髪は蝶々に結び性質極めて活潑、美音朝々よく相撲甚句を歌つて踊つた酒も随分飲める女性であつた、當夜南洲先生以下諸豪も頗る上機嫌でお極りの箸戦が始まつて豪興の中に南洲先生と此小寅との箸戦は中々の見もので活潑な小寅さんは天下の英雄を向ふにまはし腕を捲くつて先生と勝負を争ふあたり實に壯觀？奇觀？を呈したものだ、斯くてその翌二十三日忠義公は西郷、大久保、岩下、村田(新八)等同船して一隊擁護の下に淀川を上り京都に着いた、南洲先生と豚姫小寅との秘話は前述の如くであるが、其後奥羽鎮定して薩藩兵の指揮役であつた島津式部(市成の領主後の土岐四郎贈從五位)は京都藩邸留守居役の有川十右衛門の嫡男藤七郎(諱は貞常)が藩兵大砲第二隊分隊長として七月二十九日奥州二本松城攻拔の時奮戦し年廿一歳を以て天晴れ名譽の忠死を遂げたので薩藩へ凱旋の途上入洛して藩邸に十右衛門を訪問弔詞を述べた、挨拶交換の後に十右衛門が「貴殿にお見せ申す珍品がある、オイ／＼一寸來い」……と聲に應つて襖を靜かに開いて出て來た一人の女性は誰あらず南洲先生お馴染の豚姫こと小寅さんであつた、島津式部も

餘りに意外な人物の登場に暫時啞然としてゐた、十右衛門は徐ろに口を開いて「西郷愛顧の女姓だつたから此戦争中は俺が保護を加へてゐたのである」といはれたのには、式部も十右衛門が西郷先生に對する其友情が那邊まで及んだかと更に感激を深ふした元來十右衛門は藩中でも有數の富者であり西郷先生とは斷金の交りあるところより先生に財的援助を與へたことは恰度藩中の大富豪森山棠園が大久保甲東先生に財的後援をなしたと同一であつたなほ前記大阪の薩藩の指定宿たる伊勢屋七兵衛の娘お里は明治三年に鹿兒島に來り、岩下方平の宅に宿つて武の西郷先生を始め藩中諸士の屋敷／＼に參上し明治維新以來の恩顧を感謝してゐる

一一、王政復古大號令煥發より江戸城 明渡しまで

夫より南洲先生は十一月二十九日大久保、伊地知等と共に王政復古大號令煥發について會議を遂げ十二月六日には岩倉富研公(具視)吉井幸輔と會して王政復古大號令が煥發されると共に南洲先生は太政官參與を拜命した、即ち先生は一藩の士より一躍して朝廷の大官となられたのである。翌れば明治元年黎明日本の戊辰一南洲先生四十二才の一月一日江戸芝三田の島津邸事變所謂幕兵の島津邸焼打(慶應三年十二月二十四日のこと)の報に接した、風雲急を告げて來た同二日先生は岩倉公を訪問して王政復古について外國布令の形式を議して直ちに九條邸に至り朝議に列した、此日大阪方面の幕兵も又不穩との情報があるので先生は長藩の山田顯義と計らひ鳥羽、伏見二街道筋の警備を嚴にするところがあつた、所へ幕軍は大舉して北上、進軍中を薩、長の精兵が鳥羽、伏見にこれを撃破した、南洲先生は同五日淀に行き攻城の諸隊を督し、七日には征討の大會議に列

して二月十二日東征總督府參謀を仰せつけられ翌十三日先發して江戸に向つた、先生には同二十五日東海道先鋒の各隊長を駿府に召集し、三月九日山岡鐵太郎が駿府に來つたので朝裁の處分を交附した、次で南洲先生は十二日池上本門寺に屯し、十三日江戸攻撃の命令を先鋒諸隊に發した、此日幕府の勝海舟先生より交渉ありよつて十四日芝高輪の薩摩屋敷で勝先生と會見を遂げた、席上勝先生は徳川氏謝罪の條款書を提出して明日の江戸進撃中止を乞ふたので南洲先生はこれを諾して即日中村半次郎(後の桐野利秋)をして進撃中止の命令を東海、東山兩道の先鋒總督に傳へしめた、十五日先生は江戸を發して十六日駿府に至り大總督府有栖川宮幟仁親王殿下に拜謁した、それより京都に上り、朝裁を仰いで同二十九日江戸の高輪薩藩邸に歸着した、復古大日本の黎明の光明を見出だした明治維新の活舞台に身は東征總督府參謀の重要な職に在る南州西郷隆盛は四月四日に橋本先鋒總督、柳原副總督に従つて江戸城に入り勅旨を田安慶頼に傳へた、これより同日勝先生と再び會見して圓滿なる江戸城地授受の重要事項を議して十一日無事江戸城を修めた、次いで、十五日有栖川大總督宮には恙なく江戸に入らせられ芝増上寺に

次せられた廿八日南洲先生は一先づ江戸を出發、潤四月五日京都に着して、六日大久保廣澤等と岩倉公邸に會し、徳川氏の封土及關東鎮撫の策を擬議して十一日三條公に従ひ京都を發つて二十三日江戸に着いた、越へて五月十五日上野彰義隊攻撃の部署を定め湯島天神境内に自ら出張つて官軍を督した、同月下旬西上、六月五日入洛して藩主忠義公に謁し十一日忠義公に従つて歸國、久しぶりに上ノ園町の自邸に戦塵を拂つた、七月二十三日滯魔五旬餘にして南洲先生は北越出征軍の總司令を命せられて慶府を出發した途中八月二日先生は愛弟なる藩兵二番隊監軍西郷吉二郎(諱隆廣)が越後に陣、曲淵村五十嵐川の戦ひに於て奮戦名譽の負傷を受け七月十四日柏崎病院で戦傷癒へず三十六才を以て遂に瞑目したとの報を受取つた時は流石の英雄も潜然として愛弟吉二郎の戦死を哀悼した、遺憾は越後の高田に葬り法命を義勇軒猛道居士と諡つた肉親の情愛とはいへ考妣を失ふが如くに南洲先生を哀惜せしめた愛弟吉二郎には次の如き一秘話がある、南洲先生が安政元年正月小庭役となり初めて藩主齊彬公の東上に扈從して慶府を出發せられた當時の西郷家の家計は頗る不如意で家長たる先生の出發後は一層困難を加へるものがあ

つた其處で先生は夫人伊集院氏に向ひ「俺が出發後は家計も苦しからうが家政は萬事よろしく頼む……」と後事を託された時、夫人は家庭には眷族多きため家計の遣り繰りはトテモ私の如き身には容易ならんとあつて離別を乞ひ遂に西郷家を去られた、南洲先生も之には非常に困却されたが斯くなれば萬事は弟吉二郎より外なしと後事を託すると吉二郎は「引受けました、心配には及びません」と易々として快諾し兄南洲の晴れの首途を送つたのである先生發後の留守中の貧しい家計は一にこの吉二郎の苦心慘憺によつて保たれてゐた爾來南洲先生が國事に盡瘁の間の留守邸も無論吉二郎の差しがねによつて一家の生計が支持されてゐたので先生は愛弟吉二郎の留守中の心勞を何時も感謝して「予をして後顧の憂なく今日あらしめたは一ツに吉二郎のおかげである」と深く感謝して居られたといふ吉二郎の戦死には哀悼の餘り、我戰の庭に出でて弟吉二郎の弔合戦をなし其の靈を慰めんと紫紺の絲襪で髪を束ねた茶筌風の理髪を斬り落し青入道とならた、右につき本文の執筆者は數年前鹿兒島市内南林寺町の丸瓦羅橋畔の屑屋において反古紙中より購求した當年の陣中戦記史料を發見したが其中に九月五日附戦地より吉井幸輔が岩

下佐次右衛門にあつた南洲先生の來着を報つた手簡がある、其文狀中に「西郷坊主三小隊、島津登殿五中隊」これは羽洲へ援兵「島津隼人殿五中隊、大砲一座」右着陣それ〴〵出張り相成り申し候外に佐土原軍等着相成り申し候右幸便に任せ荒々お知らせ申候、とある、南洲先生の親友なる吉井が薩藩兵を率ひて着された南洲先生の青坊主姿を見て西郷均三小隊と書かれたのは南洲先生の坊主の事實を證據立てる史料であつて吉井の此西郷坊主三小隊云々の文句は陣中の諧謔何等の妙文ぢやといひたい斯うして坊主頭の南洲先生は八月六日愈々北越征討に上り十一日新潟に上陸した際は既に長岡城も落ち北越一帯の地は略々平定し九月廿四日には會津城陥落廿六日には庄内も降参してこゝに奥羽地方も全く平定したのである出羽城が陥落した直後に城主酒井忠篤公と南洲先生との對面の際、先づ酒井公から挨拶があつて坊主頭の南洲先生は徐ろに「某は薩藩の西郷一梅と申す者でござる……」と名乗られた時に酒井公は日頃、官軍に薩州の西郷吉之助といふ大人物あることを知つて居られたので如何にも不審氣な顔をして「貴方は西郷一梅と申されるか……」と酒井公は問はれると「如何にも西郷一梅でござる……」と返答した南

洲先生が青入道となつて名を一梅と名乗られたのは上ノ園町先生居宅の近所に梅一といふ按摩とりが住まつてゐた先生の肩を揉んだこともあり其梅一の名を逆に一梅とつけて西郷一梅とは名乗られたのである

一一一 先生の信念と敬天愛人

戊辰役後薩藩戦死者の遺骸は各遺族に於て夫々各地の墓所より多くは故郷の地に改葬を行つたが南洲先生には一向愛弟吉二郎の墓所改葬のこともなかつたので心友の吉井幸輔は吉二郎の死を彼れ程悼んだ吉之助(南洲)が何故に古郷に愛弟の遺骸を移葬せざるやと思ひこれを南洲先生に訊した所、先生は肅然として威儀を正し愛弟は國事のために戦死を遂げた其場所に魂魄は安らかに鎮魂してゐるのであるから其地に永遠に弟の英靈を祀ることが正しき道であるといはれた、大正八年のことであつた鹿兒島市が島津氏第八代中納言家久卿以來の南林寺墓地を廢した際西郷家累代の墓所も同所墓地内にあつて

他に改葬せねばならなかつた、其處で西郷菊次郎氏は西郷寅太郎侯と協議して累代墓所の改葬の祭典を執行さるゝに當り累代の墓所を他所に改葬するのは南洲先生の素懷でなかつた理由で特に當日の齊主たる松原神社々司加世田徳之助をして其祭文中に南林寺墓地の西郷墓所を移すは西郷家が私に營むものでない鹿兒島市の當墓地廢止によるもので公衝の命ずる所萬己むを得ず此處に新墓所を永吉町千眼寺墓所に奠めて移葬する次第である累代の諸靈安んじ給へ……との主旨を其祭文中に強く起草せしめ奏上の上南林寺墓地から今の千眼寺墓所に改葬を行つたのである、尙ほ南洲先生には一學僕の遺骸を鄭重に處理して立派なる墓石を建立されたこともある、恰度先生が維新前京都相國寺畔に僑居時代であつた、徳ノ島生れの仲祐といふ忠實の學僕を抱へられたがよく朝夕先生に事へてゐた不幸にして其の仲祐が慶應二年十二月二十六日病をもつて歿した先生はこれを哀悼して懇ろに其遺骸を相國寺墓地に葬つて墓碑を建て自ら筆を揮はれた墓誌に（西郷吉之助家來徳ノ島仲祐之墓、慶應二年丙寅十二月十六日）とあつて其墓碑の左側面に「寺納金參千疋」

と刻してあり、而して先生には島の仲祐の双親の許へも遺髪を送つて添ゆるに慇々懇々の弔問の書状をもつてされた、そののみならず鹿兒島市南林寺墓地の西郷家累代の墓地へも京都のものと同一なる仲祐の墓を建立された仲祐は東西の地に西郷家より豊紀を享くることになつて靈魂安けく眠つてゐたが其後大正八年に仲祐の墓石も西郷家累代の墓石と共に永吉町千眼寺墓所に改葬されて今日でも西郷家が仲祐の墓前に時花を手向けられてゐる此の南洲先生の一行事をもつてしても先生の敬天愛人の信念の熾烈さが窺はれる前述の如く九月二十四日會津城も陥落、二十六日には庄内も降参して此處に奥羽も全く平定を告げたので南洲先生は十月中旬京都に凱旋、次いで東京に至つて参朝の上、東北平定を復命した、同二十八日特に御太刀料金三百料を費賜せられ十一月三日に大總督府參謀を解かれお暇を乞ひ二十三日鹿兒島に歸り上ノ園町の邸に入つた、南船北馬して久しぶり故山に歸つた南洲先生は暫時してから日常山温泉に湯治に行つて數日間靜養して戦塵を洗はれた、

十二、藩政改革に參與

翌くれば明治二年南洲先生四十三歳此の二年の二月朝廷では天下の諸侯を集め公論を以て政府の基礎を定め國是を議定するに決し藩主及び其重臣等を東京に集會せしむることとなつた殊に維新の元勳たる薩長の兩藩主及南洲先生を起して此の集會に列せしむることとなり勅使を兩藩に派遣された、我が鹿兒島には二月十七日柳原前光卿勅使として來臨久光公に積年の勤王を賞し大政を贊襄せしむる旨の宸翰を賜ひ南洲先生も亦出京すべしとの御沙汰を拜した此時薩藩では、王政復古のために盡力した藩士の運動に依つて藩政改革が叫ばられ、遂に藩政の大改革が斷行された、即ち從來の門閥を廢し人材登用の方針を採りて藩未曾有の斷行になつて即ち藩治職制を定め家老以下の職を廢し新職制を施行したものであつたが薩藩の形勢は南洲先生をして他に去らしむる事能はざる實情にあつて先生は上京の朝旨を固辭した、此の時先生は再び日當山温泉に赴いて朝に山に狩り夕べに川に漁つて悠々自適の日を送つて居る、と藩主忠義公にはこのたびの藩政改

革には先生を起用せねば所期の目的を遂行し能はずとなし二月二十三日午下がり村田新八を従へて日當山温泉宿に南洲先生を訪問し先生へ殷懃に藩政に參與すべき命を傳へられ且つ先生の奮起を促かさるゝ處があつた、これに就て上原復如將軍（陸軍大將上原元帥上原勇作）の實話に恰度藩主忠義公が村田を従へて日當山に參られた時はすでに夜に入つて陰曆二十三夜のくらやみである、新八が提灯を持ちて藩公に先行して南洲先生を宿所に音なうたとあつたことは復如將軍が當時藩政改革側の大山赫山公（大山巖公）や岳父の野津日東將軍（元帥野津道貫）から藩政改革の歴史を聞た其話中の一節だどあつた、さて南洲先生には藩主忠義公の枉駕を恐縮し且つ公の殊遇に感激して直に受命し翌廿四日公に扈從して鹿兒島に歸り上ノ園町の邸に入り翌廿五日參政を命せられ藩政に參與することとなつた即ち先生は薩藩に於ける參政中の筆頭參政として事實上の首相となられたものであつた、此の時先生が去年愛弟吉二郎の弔合戦のために青入道となられた坊主頭はをつくり其儘で、頗る異彩を放つてゐたが其頃伊地知正治が大久保甲東（利通）へ送つた手簡の中にも「西郷入道先生も既に四、五日日當山に犬四、五匹、壯士三四人同道

に候」とあるによつても參政拜命當時の南洲先生の坊主頭で異彩を放つて居たことが雄辯に物語られてゐる

一四、榎本武揚等の反逆軍の征路に

就かれた

明治二年四月南洲先生には賞典調査について參謀在勤中管轄諸部隊兵の戦功調査を命ぜられた而して其五月榎本武揚等の舊幕臣の脱兵等が函館に據り勢ひ猖獗を極め官軍に抵抗するとの羽書が到つたので先生は深くこれを憂慮され官軍應援のために同月薩兵を率ひて再び征旅に上られた、其首途に當つて鹿兒島の若き壯士連が先生を上ノ園町の邸に訪ふて心許りの首途の小宴を催はした、先生も非常に喜び酒肴を出して饗應され後はお極りの箸戦となつて先生もこの若い連中と箸戦を試みられたが先生は惨々の敗北に丁つたがこの箸戦には何と先生の背後より先生の手に持つ箸玉を若い同友が盗み見して先

方に目配りしたため先生が敗けた譯で先生は不思議にも今晚は敗北ぢや兜を若い連中の前に脱かねばならぬと「お主等は若い丈け強いのか……」と呵々大笑されたとは故陸軍中將吉田清一の實話である即ち先生には藩兵を提げて五月慶府を出發し同二十日函館に着かれた、當年從軍者の一人であつた和田十郎左衛門の實話に藩兵の函館應援隊は左右の半隊を以て編制され南洲先生は右半隊の三邦丸に搭乗し左半隊は豊瑞丸に乗組み中村半次郎これを指揮され俺等は山本権兵衛君等と遊學生といふ名目で南洲先生の本營付で三邦丸に乗つてゐたが海上で時化に遭ひ船體が動搖して木ノ葉の如く翻弄され漸くにして函館の港に着いた折は全員は船酔のためへト／＼になつてしまつた、これを見た南洲先生は「皆んな非道からう、斯んな時は酔味噌を喰べると元氣が恢復する……」といつて酔味噌をふりまはれた、其時はモウ函館も降參してゐたのであるが酔味噌で元氣づいた藩兵は空しく上陸を許されなかつた……云々、とあつた斯くして南洲先生一行は函館港を抜錨して六月一日東京に入り 聖上より金圓、文庫等を賜ふて先生の勤勞を嘉賞された、同十五日退京して二十四日慶府に歸り上ノ園町の邸に長途の疲れを休め暫くして吉田温

泉に湯治に行いて戦塵を落された、越へて九月二十六日維新の戦功によつて賞典録永世二千石を賜はり特に正三位に叙せられた、先生はこの賞典録位階を拜辭されたか御允許がなかつた

一五、薩藩有爲の青年子弟を京都春日

潜庵の塾門に入らしめた

明治二年に南洲先生か末弟小兵衛(諱隆雄)を初め薩藩有爲の青年子弟を京都の春日潜庵の塾門に入らしめたことがある、南洲先生は平素から春日潜庵の王陽明の學風を慕はれて其學識と人物とは推服されてゐた、そこで先生は藩の知政所の名義を以て末弟小兵衛及び餅原正之進、奥良之丞、伊瀬知正左衛門(後の陸軍中將伊瀬知好成)平田伊藏、高城精之丞、柴山四郎兵衛、肥後平八といふ前途有爲の青年を潜庵先生の許に入學を命じた勿論潜庵先生への入門には南洲先生が極力斡旋した、さて一行の鹿兒島出發に當つて

先生は京都の梅田源次郎先生の末亡人に薩摩産物の花染の手拔及鯉節を贈るべく一行に託されての訓戒に曰く「貴殿達が此の品物を梅田家へ持参した時に未亡人に面謁を求むるが如きは不躰の沙汰だ、玄關に向ふものに西郷よりの贈り物持参と傳へ此品を置けばよろしい……」とあつたのち一行は京都に着いてから梅田家を訪問すると白髪高齡の老人が玄關に現れて來意を問ふたので小兵衛一行は薩州の西郷吉之助よりとあつて件の贈り物を渡し未亡人殿の起居を尋ねた、老人は暫時控へ召され後室殿に申傳へると奥へ行つたので一行は南洲先生はあゝいはれたが先生が心をこめた贈り物に對しては屹度未亡人も挨拶のために吾等を引見すること必定と囁き合つて待つ間程なく前の老人が出て來て曰く、御後室より貴殿方へ御目にかかりたいが妾の身にをいてはこれが叶いません南洲先生の御好意は非常に有難くお受け致しました、感涙に堪へません、貴殿方に面會が出来ないのは不悪お許し下さい……」とあつたので一行は成程先生の仰しやつた通りだ……と今更ながら先生の先見の明に敬服したといふ、これより一行は春日潜庵先生の塾に入り陽明學を聽講したがその塾則の嚴重さによつて一行は非常に心膽を練ることが

出来た中にも小兵衛は潜庵先生から一段の厳格な鞭撻を受けて螢雪の苦しい場合もあつた、潜庵先生は二階で講義されてその借下が一行の部屋になつてゐた、朝夕二階の梯子段を昇り降り小兵衛の洒落歌に

トントンと上る梯子の真ん中で辛棒しやんせ眼に涙

といふ程身心を鍛練して學んだものだ、前記小兵衛一行が京都春日潜庵先生の塾に入るため慶府を出發するに當つて南洲先生には

孤遊何必用咨嗟、勉學須追前路跡、一別片言能體認、幾人拭目待歸家、

と一詩を贈つてゐられる

一六、戊辰役の東征亡碑を建立さる

恰度此小兵衛一行が潜庵先生の塾舎で勉學修養中のことである薩藩では京都の東福寺山墓所内に薩藩戊辰役の東征戦亡碑を建立することになり其事業は南洲先生の總指揮の下に運ばれることになつて而して其撰文は薩藩の文學今藤宏(悔堂)に起草せしめ題字は南洲先生揮毫の「東征戦亡碑」の文字を刻み京都東福寺山の墓所に建立され有名なものなり、此碑銘が石刷となつて世上一般に流布された而して入塾中の小兵衛が一日前記の石刷を潜庵先生に示すと碑銘の撰文中に戦死者の數位を餘と書いてゐる等妥當を缺ぐものあると潜庵先生はいはれたのである小兵衛はこれを阿兄の南洲先生に報したところ……成程潜庵先生の言の如くであるといつてこの碑を建て替へることになり南洲先生は今度は撰文を潜庵先生に依頼して早速草稿が出来上つた、堂々たる名文である、而して潜庵先生曰く「撰文には自己の氏名を刻むことは絶対に御断はり申す最初の撰文起稿者たる今藤悔堂先生の撰文と刻まれよ……」とあつて該碑は潜庵先生の撰文を鏤刻し撰文者

は今藤宏の署名を以て再建完成を告げたのである、世上に此「東征戦亡碑」の石刷り物が撰文に異つたもの二様流布してゐるのは前述の経緯によるものである尙右について京都の前市尹大野盛郁氏が私への實話に南洲先生が更に東福寺山に戊辰役戦亡碑を建てられた際石工家は洛外の修學院村の源三郎といふ名匠で源三郎は大野市長に私は南洲先生の命を承けて第二回東福寺戦亡碑の撰文を刻んだものでありましたが先生は毎日東福寺山に參られて工事の監督をされました、恰度盛夏の炎熱の候で、先生には炎天下に满面から玉つぶの如き汗を瀧の如く流され後には半身裸躰となつて私共を指揮されました、其御熱心な御勉強振りには今も眼のあたりに先生の御風貌が浮び出で來ます……と當時の實狀を追懷して物語つたといふ其又明治二年の交には、先生の舍弟從道侯が朝官を拜して新夫人清子を伴つて上京して同月二日には朝命をもつて普佛二ヶ國の國情視察を命ぜられ洋行の途に上げられ其の翌明治三年は佛國滯在中であつた、南洲先生は舍弟の海外客遊を懷ふの情切々として

兄弟東西千里遠、今宵齋戒客星祈、欲離姑息却姑息、不願多能願早歸

の一詩を賦した今に其詩稿が西郷從德侯家の家寶の一つとなつてゐる又恰度五年前滿洲事變によつて日滿の親善が結ばれた時に明治維新前來南洲先生と最も國事上交渉の多き京都では今更の如く南洲先生の支那經綸の一端が實現されその偉大さを追懷欣慕して先生の英靈を弔意せんため有志が發企となり京都有數のデパート大丸において南洲先生遺物展覽會を開催して一は先生の遺烈を偲び一は世上の風教に資益することとした其時東京及鹿兒島の東西の地より門外不出なる貴重なる南洲の書幅遺品の數々が陳列された京都市民は先生を宛ら慈父の如く敬慕してこの遺物展を參觀するもの多き日には二十五萬人と註されたほど盛觀を極はめ七日間に亘つて最も有効に意義深く閉會を告げたしかして此の七日間の會期中毎日缺かさず會場に來りかの南洲先生が海外客遊の舍弟從道に贈つた、七言絶句を朗吟して參觀中在都の薩摩出身と見れば此詩句中の「今宵齋戒客星祈」の意味がわからない何れば地方郷土行事をいふものであらうけれども誰れに聞いても判らぬといつて偶々參觀中の本文の執筆者に質問した、身軀肥大の翁があつた本文執筆者は鹿兒島郷土では月の十二日夜、二十三日夜には家人で郷里外に在る旅先の幸福と健在

を祈るために此兩夜の内に留守の家族相會し神酒と蔬菜團子等を供へ身心を潔齋して海邊に出で、月の出花を待つて幸福と健康を祈る行事が今も傳來してゐるこれを郷土では十二日の夜は十二夜待ち、廿三日の夜を二十三夜待といふので「ジョンニヤマツ」(十二夜待)のステコン(酢大根)ノコ(殘)ればキガカイ(氣懸り)云々の俗謡もある位で恰度南洲先生は此兩夜の中の夜に會して海外遠遊中の舍弟を懐ひ切々たる情を此一詩の句中に賦されたものである……と説明を爲すと件の老翁は我意を得たと云はんばかりに手を打つて之れある哉／＼今宵云々の一句は實によくわかりました、先生の至情がよく此詩句に描出されてゐます……と歡喜した此老翁こそは誰れあらう京洛でも天下に有名な古書肆の鳩古堂主人であつた

一七、上之園邸より武村二階堂別邸へ轉居

安政元年は正月、廿八歳の身を以て藩主島津齊彬公に扈從して上ノ園町の家を出て江戸に上られ國事に奔走されて以來ここに十六年——多事多難波瀾極りなき世故に遭遇し死生の巷を出入して維新の大旗を樹て遂に維新回天の大業を成就して故山に歸られた南洲先生は明治二年も暮れる師走の月、嘉永五年以來の住家であり、先生に取りて最も思ひ出の深かるべき上ノ園町の屋敷を去つて隣地近郊の武村に居を遷された、この轉居については親友吉井幸輔の勸誘斡旋にまつものが多かつた、明治維新第一の功臣として正三位に叙し二千石の食祿を賜はつた南洲先生の居宅としては上ノ園町の屋敷は餘りに狹隘であり且つ眷族は多く起臥出入にも甚だ不便である所から吉井幸輔が移轉を勸告した南洲先生は否々と謝絶して安如としてゐられたが恰度其の頃藩中の寄合家たる二階堂家の武別邸が入札に附され賣屋敷に出たのであつた、この武村の二階堂家の別荘は當時藩制では『中屋敷』といふ名稱の部分に屬する側の屋敷構で居屋敷構の建築とは間取建具

等に多少異なつた點があつた、翠綠滴たる武岡の山麓には藩公の武のお茶屋あり御一門家の今和泉公父子のお假屋もあつて此の附近一帯は水白く風清き四境閑寂にして莊園地として最も適當な處であつた仍て吉井幸輔が明治維新第一の功臣南洲先生の身を容るゝ居屋敷として相應しい地所なりと認め入札方に世話をなして西郷家の所有地となつた、西郷家居住直前はこの屋敷が隣接地の和田家の屋敷にも亘つて廣き地域であつたため屋敷内では當時の藩兵の英式陸軍の訓練所となつたり又は相撲の土俵場が築かれて肥後の名力士關取駒ヶ嶽等も來て角力したこともあつた、而して戊辰役直後は凱旋兵の祝賀會も度々開かれた個所であり、其處に西郷家が移轉して來たのであつて、敷地凡そ一千五百坪位三反餘もあつたらう老松亭を鬱々として庭中に聳へるは流石に寄合家たる藩の太夫の中屋敷であつたことを思はしめるものがあつた、此際當時の薩藩に於ける宅地所有の制度について一言述べやう、藩政大改革前には門閥家たる一門の御三家、四家、寄合、寄合並等の家格高き諸家はそれ〴〵身分に應じて廣大なる屋敷宅地を有してゐたが明治二年の藩政改革に依つて土地屋敷制度が改正され、ために從來の門閥家の宅地の所有地

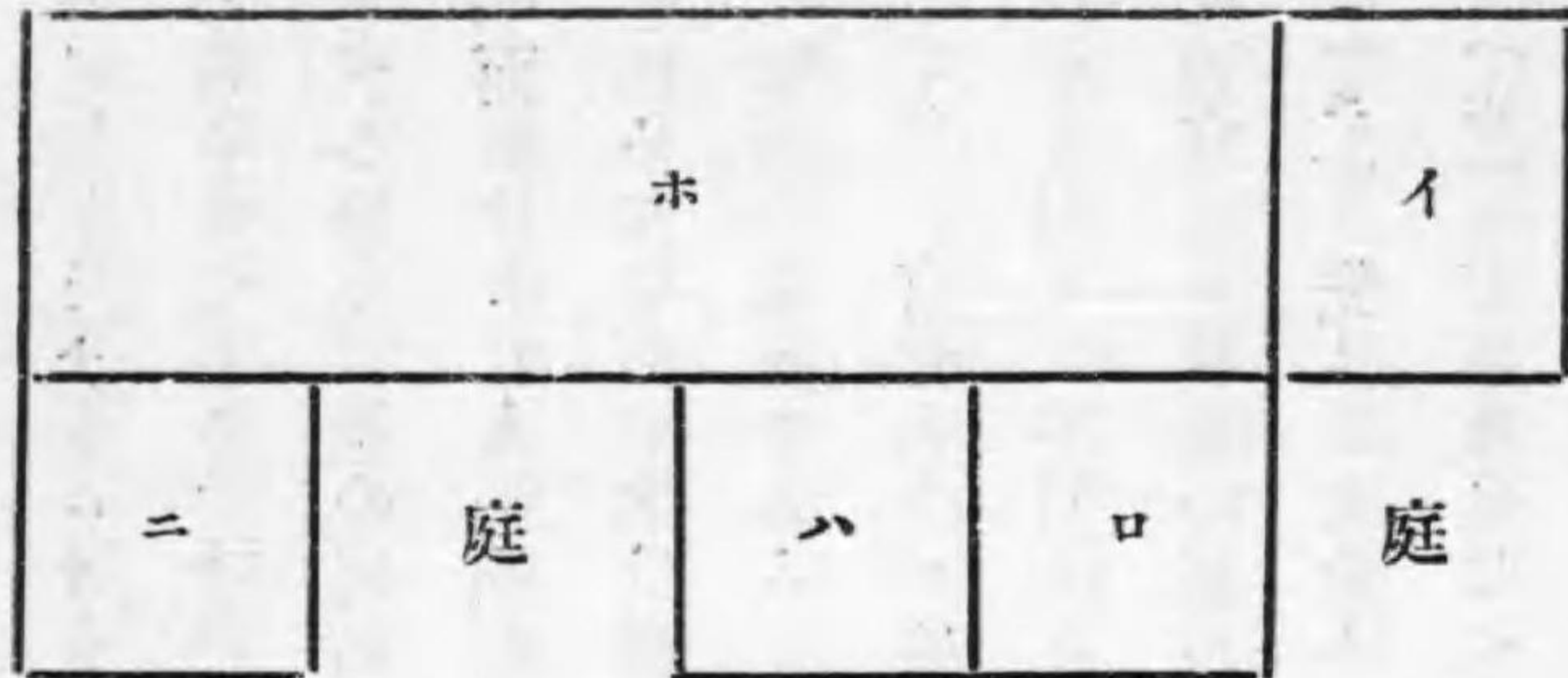
が新法律に由て制限され宅地を削られたもの多くあつた、今現に御三家の一たる重富村鼓川の邸地（上馬場今祁答院家所有地）の北側の石垣に沿ひし民家の地側（多賀神社の所有地）が新制度に依つて削られた地域の遺跡である、明治三年知政所より鹿兒島士族世祿二百石以下は居屋敷の儀一反限り御究められ右畦反餘地の儀一畦一貫値成をもつて當年拾月中間違無く賣り拂ふ可く候、右候て居屋敷に差支りし分は年末まで願出候は拾ヶ年は御免仰せつけらる可く候、以來掛待屋敷又は他人の名前等をもつて相圓め候儀一切相成らず候、但兵器方附侍の儀は五畝仰せつけられ候といふ達示が出てゐる、この屋敷制限の政令が出でた時南洲先生の武屋敷も二階堂家の中屋敷を入札の上先生の所有宅地になつたのであるが南洲先生の武屋敷も又此藩律に抵觸するである所から家長たる先生は新に一家を取り立てられ故吉二郎の遺族隆準並小兵衛遺族小吉、菊次郎等の家族にもそれ〴〵此屋敷を分筆され先生初め一族の居宅地となつたのであつたが昭和十一年度に至つて全部の敷地が當主西郷吉之助侯の所有地に統制されたといふことである南洲先生には家族と一緒に此武村屋敷に起居されることになつて左記述懐の一詩がある

ト居勿道做三遷、蘇子不希見子賢、市利朝名非我志、千金拋去買林泉、
斯うして南洲先生は武村の屋敷に轉居され僅々數日にして明治三年庚午の正月元旦を此
の邸で迎へ身自からは四十四歳の壽を重ねられ左の庚午元旦の七言絶句を賦された
破曉鐘聲歲月更、輕烟帶腹到柴荆、佳辰先祝君公壽、起整朝衣拜鶴城、

句中君公とあるは藩主島津忠義公鶴城は鹿兒島城の別名、南洲先生は安政元年上ノ園町
の屋敷で新年を迎へられたきり十六年振りに藩參政として武村の邸で新年を迎へられた
ので、一入感慨も深かつた越へて正月十八日に先生は藩の參政を辭し一世養米五百俵を
賜はつた先生に左の述懐の詩がある

再三流竄歷酷辛、病骨何曾慕俸緡、今日退休相共賞、團樂情話一家春、
この詩句中「團樂情話一家春」の先生武屋敷の家の部屋々々に似て略圖を掲げこれを語る
であらう

圖中(イ) 小座敷であつて南洲先生の居間凡そ十疊敷で何等の裝飾もないが只床の上に
は——立派な靴が載せてあり、小床の上には生絲で編んだ玉子澁染の投げ網が數張り何



時も載せてあつた其の小床の袋棚には先生愛用の大なる硯石、
落款、琉球渡來の失肉等揮毫の品物が數々格護してあつた、床
柱には何時も洗い捌いた唐筆が五、六本位を一束にして二、三
ヶ所に掛かり、肩間には毛深い犬が雪中の雪倒人を救ふ圖とリ
ンコルン外數名が卓子を圍んで會議する寫眞が掲げてあつたこ
の寫眞を見るとリンコルンがフロックコートを着け悠然と卓子
にもたれ一人は軍服の禮装で容貌最も魁偉、直立して一座を脾
睨して發言する態の場面である、即ち其の場面はベルリン會議
の光景であつて他の二人物はヂスレリー卿とビスマルク公であ
つたと思はれる、これ丈が南洲先生居室の景趣であつた

(ロ) 表の間凡そ十二疊敷位此室は全く先生の子供達の占有
さるる室で肩間が三個所あり、其楣間に掲げてある大形の寫眞
中一ツはナポレオン二世が一隊の兵卒を整列せしめ數多の幕僚

將校と共に馬首を立並べて居る所に敵弾が前面の塊石に命中し石の碎粉が白煙の如くバツと迸しりナポレオンの愛馬が驚き騰つてゐる圖であつて一見最も壯快の感を湧かしてゐるものである、次の一ツはワシントンが二、三の従者と端艇に乗つて自身櫂をとり舟を行る悠々自適の場面、今一ツは網具や兵器が散亂し狼籍を極めた甲板上に病人の如く顔面憔悴した人が側壁にもたれかかり周囲の人々が驚き且つ泣いてゐる悲風慘憺たる状を極めた場面では世界海軍史上有名な「トラファール」の大海戦にネルソンが負傷した緊張の場面である

(ハ) 南洲先生が遠島中罷懇だつた川口景次郎(雪蓬)翁の居間であつた玄關の造作が狭ましく出入に不便であつた此室には數知れぬ和漢洋の書籍が室中一杯山積されてゐた、此西郷家の智識の涵泉たる藏書種目については稿を更めて後章に述べることにしよう

(ニ) 先生の末弟小兵衛さんの居間で

(ホ) が裏座となつてゐた

南洲先生武屋敷の庭園は、流石に藩の士太夫の中屋敷であつた丈林下樹石の布置其宜し

きを得て頗る雅趣ある庭園であつた、所が先生は明治八年の頃庭中の巨樹の下に於てあつた南洲先生の彫刻といふ福壽祿の只一個丈の石造物を残し其他の樹石は悉く取拂つて當時鹿兒島縣のお雇教師であり本學校でフランス語を教へてゐたコツプスへ寄贈されたコツプスの居館は今の鹿兒島郵便局の所在地であつて元は島津登(後九良賀と名乗る)の居屋敷であつた、先生は此所に武屋敷の庭石や樹木を移されてコツプスの離愁を慰められたので、斯うして武屋敷の庭園は全く空虚になつて何等の風趣も添ゆるものもなくなつたので、先生は其後自らこれを畑に拓いて粟を播種させた、南洲先生が萬里離邦の外人居コツプスの離愁を慰められるには誠にかくの如くであるが如何に先生が一視同仁、敬天愛人の信念に生きてゐられたかが知られよう次ぎに前述した南洲先生の居間正面の庭苑の中には、土俵が築かれて其左方には二坪位もある長方形の花園があつた、此花園には唐胡麻や、春季の頃は石竹等の草花が不規則に植へられ他人の眼には誠に没趣味に見受けられた又其屋後の小庭には三、四坪位の苦屋根があり其中に幾段の階段を設け其上には萬年青の鉢が二、三十鉢も配列して、其鉢は大きく葉並も實に見事なもので、其種

類は主に高隈系が多かつたようで先生は此の萬年青の栽培には頗る丹精を凝められた風で先生自ら如露を取つて朝夕に給水された先生が萬年青を愛培されたことは先生一家の外は餘り知るものはなかつた、そして南洲先生はこの萬年青の根元、葉筋の形状、紋脈の龜密等の見分け方に至つては誠に堂に入つたもので専門家も舌をまくほどだつたといふ、又屋敷内には桑の木が所々に植へられてあつた、これは何れも先生の自ら植へつけられたもので鹿兒島在來のものど違つた種類で見ごとなものであつた、これと同ト種類の桑木が二十餘年前迄頃下鍛冶町の村田新八の屋敷内にもあつた今村田家の宅地は大坪岩次郎の居宅となつてゐるが今にこの名木も枯死してないようである、此桑の木について一齣の物語りがある元來我が薩摩藩は、養蠶業の開けなかつた土地柄であつた、偶々領内に蠶を飼養するものはあつても其方法が甚だ拙劣であり且粗略であり良絲を製することが出来なかつた、ために藩内需要絹糸は年々これを藩外から買入れ其輸入費額も頗る莫大なもので、この實狀に島津齊彬公は新に養蠶業獎勵法を設けられ藩内の蠶業者に對して無利息無延期の資本を貸與し其製造したる絹糸は特價をもつて藩廳に買上げる

こととし若し生産増額の際は前年より減少するか或ひは増加せざる場合はこの特典を取消して貸與金を返上せしめるにあつた此處に於て藩内の蠶業者は競ふて蠶を飼養し其産額も非常に増加して藩内の需用を充たす許りでなく數多の剩餘も生じ、これを藩外に輸出するの勢を呈したのであつた

一八、齊彬公の養蠶獎勵法に盡瘁し多大の好成績を舉げらる

齊彬公の養蠶獎勵法はもとより南洲先生も熟知される所であつて先生が明治維新後藩政に與かられることになつて以來先づこの養蠶獎勵法に着眼されこれを縣令大山綱良に計つて養蠶獎勵法を講せられ東北の養蠶地方より優良の蠶卵紙を取寄せてこれを養蠶家に配布された當時世人これを西郷蠶卵紙と稱へたなほ又桑木も外國より標本を取寄せたり、東北地方より桑苗を購入して領内に配布された、又この養蠶獎勵には適當な指導者を

必要とするので大山縣令は岡山地方より安田熊七といふ仁を縣廳に招聘して桑樹栽培のことを司とらしめてからは領内の養蠶家は盛大となり當時慶府天神馬場の富豪にして八田知紀先生門下の歌人川畑梓の如きも此養蠶業を營んで好成绩を擧げたが和文家ではあり「養蠶手引」といふ一書を著して弘く斯業者に配布してゐる、此の如く養蠶業が奨励されて立派なる成績を擧げるやうになつたのは全く名君齊彬公の御遺志を南洲先生が繼承され大山綱良縣令と共に協力盡瘁した賜に外ならぬ前述鹿兒島縣に招聘された安田熊七氏は大山縣令に其人となり知られて其知遇を感激して黽勉その任務に従事してゐたが明治西南役となつて縣令大山綱良は私學校黨一薩軍と氣脈を通し密かに援助を與へるものとして東京に護送されついで長崎に移送の上、明治十年九月三十日九州臨時裁判所に於て斬首の刑に處せられたこれより先鹿兒島縣廳に於ては長官たる大山縣令の消息全く絶へたので其近状を探知せんため縣廳で主腦部が參集して協議した長官綱良を失つた鹿兒島縣廳では大書記官の田畑常秋が代理となつて一切の事務を處理してゐた其の幹部級なる中屬の縣吏が機密に參與してゐた、之等中屬の縣吏は人物といひ學識といひ識見と

いひ何れも相應の人材揃ひであつた、讀書家であり文章をよくし書も見事であり御維新前來國事に盡瘁した松元武雄、薩藩三學者の一人なる今藤宏桂門派屈指の歌人澁谷國安四條派、畫家の平山季雄その他の逸材であつて之等の人々が縣令大山の消息を知るため協議を凝らしたが松元武雄が廳内の縣吏中安田熊七は俠骨其よく任に堪ゆる人物と認むるが此安田をして大山縣令の動靜を探らしむべしと提議し其議に一決したかくして重大なる使命を帯びた安田熊七は變装し速刻慶府を發つて長崎に向つた、長崎に着いて見れば大山縣令は同地の鐵窓下にながれてゐてトテモ外部から綱良の消息を知られよう等といふことは不可能で其處で安田はこれは尋常な手段では目的を達することは出来ないど苦心の結果獄舎の肥糞汲人夫に化けこんでマンマと獄舎に侵入して縣令の動作を探查してゐる所を遂に發見されて捕縛されてしまつた、安田はこの使命を受けた直後より死を決し一死もつて平素の知遇に報ひんと決意してゐたが其後放免になつて慶府に送還された、其後は籍を鹿兒島に移し内室も鹿兒島人を迎へて餘生をおくつた、この俠骨義氣に富める安田熊七の一子が當今の國手であつて意氣豪爽の安田清三其人である、清三の父

安田熊七翁は實に俠氣肌の傑物であつて鹿兒島の豪傑人物傳を編纂するに當つては逸す可からざる人物の一人である

一九、武屋敷と南洲先生の御家族

武屋敷に居住の南洲先生家族は絲子夫人を初めとして先生の末弟たる小兵衛夫人松子夫人一子小吉(青年時代夭折)先生の長男寅太郎、次男午次郎(明治三年三月三日武邸で生る)三男酉三(明治六年武邸にて生誕)先生の甥勇暎(先生の愛弟吉二郎の未亡人園子妹の遺兒で後の宮内省式部官隆準)及び姉のみつ子、大島で生れた菊次郎、其の妹キク子等の大家族それに居候の河口雪逢翁であつた、此内菊次郎さんは十三才の時、牧野伸顯伯とアメリカに留學して十五、六才の頃アメリカから歸朝して武屋敷に入つてゐる、其時菊次郎さんが米國から持つて歸つた品の内西洋玩具の護謨毬があつた、この護謨毬で菊次郎さんは遊んでゐたが初めて見る西洋玩具の遊戲には周圍の人達をして聳目せしめ

たもので菊次郎さんは歸朝當時邦語が不充分であつたので縣下知覽村に醫者を開業してゐた中馬泰助が英語が出来る所から一時この人が武屋敷に起居して菊次郎さんの通譯をした、此泰助なる仁は明治戊辰役中會津城陥落の際城下の兵火の巷に逃げ場を失ひ迷ひ兒となつて彷徨してゐるのを我が藩摩兵の中馬といふ兵士に救助され戦ひやんで鹿兒島に連れ歸り成人した人である、で又外交官として派へた腕を持つてゐた林權助男も元會津松平侯の御家老の子息で明治戊辰役の會津陥落の後東京に出で流寓してゐたが不思議な縁故を以て鹿兒島出身の陸軍中佐兒玉四郎太に救はれて同家に入つた後ち明治八年四郎太が病のために鹿兒島に歸り武村の屋敷に歸つた時少年の權助男も伴はれ鹿兒島に来て武の兒玉邸で成人した當時權助男の名を警人といつた警人は將來屹度大成する人物なりと認め、鹿兒島本學校に入學せしめたが才氣雄を脱して成績優等で夫より更に大阪の醫學校に入らしめつゝいて東京帝國大學の前身たる開成校に學ばしめて法律學科を専攻させた卒業後外務省に出仕したのが出世の振り出しで今日の大を成したのである儘か大正六、七頃だつたと思ふが林權助男は恩師兒玉家の展墓のため令嬢を同伴して

來覽した當時武村には權助男の友垣も數人健在してゐたが兒玉さんの磐人さんが殿さんに出世して兒玉さんの墓詣りに來た——といつて目を聳やかしめさゝやき合た武村にはかくの如き數奇な行藏ある林權助男が薩摩氣風の洗禮を浴びた人であつたことを附言するものである扱て餘談に入つたが武屋敷の西郷家では家長が南洲先生、舍弟の小兵衛さんが其の次位にあつて家事を輔佐してゐた、此小兵衛さんは身軀魁偉にして巨眼爛々甚だ南洲先生の巨眼に相肖た眼光を持つてゐた、元來西郷家は、眼の大きいのが、特色で從道侯も又巨眼の持主であつた、私が昭和十年の冬事を以つて從道家の令嗣從德侯を目黒山の西郷邸を訪ねた時の話中の一説に……回侯は父(從道侯)は一生お湯で洗面したことにはなかつた、何んな場合でもお湯を使用しなかつた、何時も冷水をもつて双の臉を拭く丈だつた、私(從德侯)は父に何故お湯で洗面しませんかと尋ねた所が父は……男子が不慮の死を遂げた際に平素お湯をもつて洗顔する人は其死顔が變化して見苦しきものであるがお湯で洗面しない人は不慮の死の場合でも顔面宛ら生きてゐる如く異狀なしと云ふことである俺れも一個の武士だ、何時何處で不慮の死を遂げるか知れない、其場合顔色

が變つてゐては武士として平素の覺悟ではないから俺れは一生お湯で洗面しないことにしてゐると懇々として訓へられた……と從德侯は語られたが私は此の話聞いて昔の古武士が戰死或ひは不慮の死を遂げても其顔色が變らないといふことを言ひ傳へてゐるの何かこれには記録でもあるものと文献を漁つて見た、所が奥羽仙台的伊達侯の臣で有名なる文學者であつた那珂柯樓の書いた本の中に「湯もて顔洗へば討死せし時其色變りて見苦しきとて寒き朝にも水もて顔洗ふが武士の家庭の作法なり、武家の母たるものはこれを心得て幼少の小供の寒中でもお湯を使はしめず云々」とある家庭訓を讀んで成程從道侯の天ツ晴れな心掛けは此處だと私は非常に感服し、從道侯のこの心掛けは西郷家の庭訓に教られたものと私は思ふが同侯が若い時代に學ばれた薩藩合傳流の兵學者の伊地知正治伯の薰陶にも因るものがあるう、小兵衛さんは時に馬に乗つたり或ひは銃獵と肩にして山野を馳驅又は甲突川に投網を試むなど山阪水泳に達者な人であつた、此武時代には小兵衛さんの友人に餅原正之進といふ士がゐた、先年共に春日潜庵の門に學んで其寡言沈黙は小兵衛さんの性格と合致してゐる所から金蘭の親父があつた餅原家は涙橋際

で家庭の生計は餘り豊かになかつた、親友の生活苦に同情してゐた小兵衛さんは吉田清一等二、三の友人と相計りこれを南洲先生に乞ひ西郷家の庫米を餅原氏に贈つた、南洲先生……それは結構なことだ、友情は左こそなければならぬ……と満悦至極で鶏の汁を馳走された後で先生は餅原の贈り物は直に持つて行つたらうネ……と問はれて小兵衛さんは下僕が持つて行つたと答へた、先生は不機嫌の面色で……それは不可ん自ら持つて行くこそ友情の通りぢやと申されたど、小兵衛さんは沈毅の中にも和かで南洲先生の末子酉三を我兒の如く脊に負ひ可愛がつてゐた、此武邸には居候がゐた、それは居候なれども家人から先生々々と呼ばれてゐた其人は河口量次郎(雪逢)である河口の身分、素性については種々の説があるが本文の執筆者が菊次郎の生前に聞く所では雪逢は江戸定府で其の考といふが江戸の島津家屋敷に事へてゐた、其時代は雪逢も年若くして江戸の父の許にあつたが當時江戸の書家山内春雪について書道を學んだ、そして成人してから鹿兒島に歸つたが偶々或事故の爲に大島に配流されたもので、丁度南洲先生が再度大島配流の時で雪逢と昵懇となつたものだ二人は配所無聊に堪へず臨池を事として消閑した

も之等の縁故で雪逢は先生の家に寄食したものだといふ、尙ほ本文執筆者が河口家の家譜符牒について調べた所によれば島津氏第二十五代の藩主重豪公(榮翁又は南田と號す)は徳川將軍家齊公の御台所の養父様で一橋穆翁(治濟)池田一心齋(治政)と我儘御隠居の三幅對と綽名され随分我儘を通した御隠居であつたを以て榮翁公は夙くから開國主義を唱道し和蘭文字を書いたり、蘭語を使つたり、殊に支那語を旨まく使はれ「南山俗語考」といふ日清會話の一書を著したはと清語通であつた、又非常に禽僻があつて和蘭支那方面の珍禽を買入れて江戸芝高輪屋敷に飼養されたこの鳥飼係を命せられたのが江戸定府の河口轉といふ仁で、この人は通稱を清助、又常彬と云ひ後に轉と改名した轉が朝夕榮翁公に近侍して内外羽族の飼養支配をなした元より河口家は江戸定府であつて鹿兒島では城西西田に屋敷を持つてゐた雪逢はこの河口家から出た一族であつて雪逢が江戸で成人して慶府下に歸つた時は西田に住んで、寺子屋に街の子弟に書道を授けたともいふ、のち罪に問はれて大島に配流された時も此西田の居宅から送りたものだど、因みに河口轉の六代の孫に河口清吉といふが今現に鹿兒島市役所の書記を奉職してゐる

二〇、先祖代々愛書古諸書卷

茲に河口雪蓬の居間一杯に山積してあつた南洲先生の藏書について述べよう同家に藏書の目録「先祖代々愛書古諸書卷」と題する一卷に藏書目が列記してあるが即其書名は左の通りである

- | | | | |
|------------|-------|----------|-----|
| 一、明君家訓 | 一卷 | 一、逸史 | 十三冊 |
| 一、楠諸士教 | 一卷 | 一、梅教詩鈔 | 十二冊 |
| 一、外財根元略記 | 一卷 | 一、國語 | 五冊 |
| 一、實語教童子教一卷 | 同上 | 一、國語定本 | 六冊 |
| 一、南無阿彌陀佛 | 一幅 | 一、左傳觴 | 五冊 |
| (鎮西本山善導寺) | | | |
| 一、考禮之始也 | 法然如螻書 | 一、補義莊子因 | 六冊 |
| 一、論語徵集覽 | 廿冊 | 一、劉向說苑纂註 | 十冊 |
| | | 一、令書 | 二冊 |

- | | | | |
|--------------|----|------------|-----|
| 一、那波列翁傳 | 四冊 | 一、春秋左傳國字辨 | 十五冊 |
| 一、古文考經正文 | 一冊 | 一、春秋左傳校本 | 十五冊 |
| 一、梧披教諭 | 二冊 | 一、陸放翁詩鈔 | 四冊 |
| 一、言志晚錄 | 一冊 | 一、中庸解 | 二冊 |
| 一、言志耄錄 | 一冊 | 一、大學或問 | 一冊 |
| 一、言志錄 | 一冊 | 一、常山紀談 | 廿九冊 |
| 一、言志從錄 | 一冊 | 一、劉向說苑 | 十冊 |
| 一、江戸名所圖繪天機の卷 | 一冊 | 一、歷代名臣奏議 | 廿冊 |
| 一、忠孝書傳 | 一冊 | 一、中庸輯略 | 三冊 |
| 一、泰清公遺事 | 一冊 | 一、大學中庸 | 一冊 |
| 一、慈徳公遺事 | 一冊 | 一、大學解 | 一冊 |
| 一、古本大學 | 一冊 | 一、標註校正小學台壁 | 四冊 |
| 一、草露貫珠 | 三冊 | 一、晴猷遺言 | 全 |

一、世範校本	全	一、儒門語要	四冊
一、春秋左傳凡例並愛例	全	一、內國史略	四冊
一、孫子副註	全	一、洗心洞詩文	二冊
一、赤穗義人錄補正	二冊	一、鶴梁文鈔讀篇	二冊
一、東京繪圖	一冊	一、四書完本	一冊
一、新撰日本全圖	全	一、大學或門	二冊
一、十八史略校本	七冊	一、王注老子道德經	二冊
一、評註正文童輕範	三冊	一、增補元明史略	四冊
一、大統歌訓蒙	五冊	一、內國史略	四冊
一、十八史略注釋	七冊	一、國史略	七冊
一、評註正文文章軌範	三冊	一、王陽明生先文鈔錄	四冊
一、小學全部	二冊	一、孫子十家註	四冊
一、唐床八家文	六冊	一、心學文集	二冊

一、翁問答	四冊	一、逝西六家詩鈔	三冊
一、女四書	八冊	一、岳忠武王集	全
一、鶴梁文鈔	四冊	一、全躰穎才文鈔	三冊
一、經濟說略	二冊	一、初學作文指掌一扁	全
一、雜字類編	二冊	一、和漢作文大成	二冊
一、名賢言行略	全	一、大學章句新疏	二冊
一、王學提綱	全	一、論迷物語	全
一、行書類纂	四冊	一、興風集	一冊
一、曾我物語	十二冊	一、興風後集	一冊
一、孫子副註	全	一、忠經	一冊
一、名節錄	全	一、女學讀本	二冊
一、十八史略訓蒙	五冊	一、唐鑑音註	三冊
一、義士銘々傳	全	一、資拾通鑑綱目全書	六七冊

- 一、資治通鑑
- 一、元明史略
- 一、左傳輯釋
- 一、後漢書
- 一、小學
- 一、標註校正小學完
- 一、胡椒山全集
- 一、補義莊子因
- 一、曾文正公文鈔
- 一、繪本孫子童觀抄
- 一、漢書評林
- 一、小學句讀口義詳解
- 一、中國文證大全

五〇冊
五冊
二一冊
六〇冊
二冊
四冊
四冊
六冊
二冊
十四冊
五〇冊
七冊
二冊

- 一、古事記傳
- 一、增評讀文童軌範
- 一、小學示蒙句解
- 一、訓蒙四書輯疏
- 一、十八史略譯解
- 一、四書略解
- 一、元明史略
- 一、弟子職
- 一、三字經
- 一、古文孝經
- 一、童蒙須知
- 一、菅家後集
- 一、靖獻遺言

四八冊
三冊
七冊
卅冊
十冊
十冊
二十冊
一冊
一冊
四冊
一冊
一冊
三冊

- 一、小學
- 一、自鹿洞書院提示
- 一、如不及齊文鈔
- 一、桂園一枝
- 一、聖學問答
- 一、近思錄
- 一、近思錄二蒙句解
- 一、日本政記
- 一、歸震川文粹
- 一、御家兵法純粹
- 一、山陽遺稿
- 一、王陽明先生正心教
- 一、小學

四冊
一冊
三冊
二冊
一冊
二冊
十冊
八冊
五冊
五冊
六冊
一冊
二冊

- 一、赤穗四十七士傳
- 一、古今集遠鏡
- 一、東藩日記
- 一、十八史略
- 一、陶淵明全集
- 一、小蘭陵詩集
- 一、靖獻遺言字類
- 一、詩韻合英異同辨
- 一、內國史略
- 一、牧民心鑑解
- 一、國史略
- 一、誠忠武鑑
- 一、道中記

一冊
六冊
一冊
七冊
四冊
四冊
四冊
二冊
四冊
一冊
七冊
五冊
一冊

一、博物字類	一冊	一、舊本大學騰議	一冊
一、十八史略校本	八冊	一、新刻童蒙須知	一冊
一、帝國文證大全	二冊	一、七書	一冊
一、易道初學	一冊	一、唐熙字典	四〇冊
一、孝經	二冊	一、東京玉篇	十二冊
一、桂園一枝	三冊	一、四聲通考	一冊
一、詩韻精英	二冊	一、俳誹玉藻集	二冊
一、山陽先生書牘	四冊	一、日本外史古戰城槩圖	一冊
一、誹諧寂菴	三冊	一、倭采擇錄	一冊
一、幼學詩韻續	一冊	一、智環啓蒙	一冊
一、清名宗文鈔	四冊	一、東北遊日記	二冊
一、愛日樓文	四冊	一、七書	二冊
一、十八史略校本附錄	一冊	一、女大學	一冊

一、春秋左傳譯語	二冊	一、赤穗義臣傳	五冊
一、陽明先生全集	一六冊	一、詩工新材	二冊
一、譯文須知	五冊	一、尺牘階梯	四冊
一、兩窓記聞	二冊	一、慶案小史	一冊
一、漢譯伊蘇普譚	一冊	一、隔韓論	一冊
一、真山民詩集	一冊	一、錦城文錄	一冊
一、愛日樓文	四冊	一、令書	二冊
一、讀文章軌範講解	七冊	一、國語	一冊
一、萬國地誌略便解	一冊	一、評註春秋左氏傳校本	十五冊
一、韓文	廿六冊	一、唐詩選	二冊
一、柳文	廿四冊	一、新學愚見	一冊
一、回太詩史	二冊	一、老子幅注	二冊
一、保健大記打開	三冊	一、童蒙須知解	一冊

一、大統歌
 一、寶永お江戸繪圖
 一、元明史略
 一、山陽詩註
 一、靖獻遺言
 一、點註唐宋八家文
 一、左傳國字解
 一、文語節用
 一、增補發字便蒙解
 一、經典餘師
 一、悖佛載記
 一、新撰墨場必携
 一、十八史略字引大全

二冊
 一冊
 四冊
 二冊
 三冊
 十六冊
 三冊
 一冊
 一冊
 一冊
 一冊
 三冊
 三冊
 二冊

一、政治論略
 一、日本外史字解
 一、小學字典
 一、日本外史稱呼訓
 一、忠孝類說
 一、古文前集
 一、上等小學漢文軌範
 一、七書
 一、童子通
 一、外史譯名
 一、易經
 一、日本略史字引
 一、銅錫和漢洋年契

一冊
 一冊
 一冊
 一冊
 一冊
 一冊
 二冊
 二冊
 一冊
 二冊
 一冊
 一冊
 一冊
 一冊

一、國史名稱讀例
 一、詩工錐鑿
 一、皇朝史略
 一、續皇朝史略
 一、續皇朝史略
 一、日新公いろは御歌
 一、近思錄
 一、八家文字解
 一、新選詩學精選
 一、續詩學精選
 一、訓蒙雜字類篇
 一、書引漢語字典
 一、史記啓辨

一冊
 二冊
 四冊
 四冊
 七冊
 一冊
 四冊
 五冊
 五冊
 五冊
 六冊
 四冊
 一冊
 一冊

一、日本外史字類
 一、小學字引
 一、必携熟字集
 一、復文捷經並付錄
 一、墨場必携
 一、文明いろは字引
 一、佛蘭西法律書
 一、亞西亞東部輿地圖
 一、大統歌
 一、孝經
 一、續史論略
 一、新撰漢語字引大全
 一、小學全書字引

三冊
 一冊
 二冊
 二冊
 三冊
 一冊
 一冊
 一冊
 一冊
 一冊
 一冊
 一冊
 一冊

一、文章軌範便蒙	二冊	一、野史纂略	七冊
一、靖献遺言	三冊	一、四書	四十冊
一、十八史略字引	一冊	一、四書	五冊
一、記事簡牘文例	二冊	一、十八史略	七冊
一、小品文鈔講義	三冊	一、五經	二十二冊
一、國史通解	二冊	一、四書	一冊
一、隸法彙纂	四冊		

堂々一千三百余卷にわたる前掲の和漢の書籍中には、古書越味家の垂涎措かざる珍籍奇書も多く其題目に「先祖代々愛着の諸書」云云とあれば同家の藏書は先祖傳來もどより先生の手澤本である先生の手澤本といふ意義に於て此の藏書が古釘本なると新装本なるは問はず又珍籍奇書なるとを云はず貴重なる價值を有するものであるなは藏書中王陽明關係の部類が多くあるは先生は年若かく寛府下撻鞞の伊藤茂右衛門先生に就て陽明學を學ばれ又京都の陽明學者春日潜庵の人物を推稱し其學問を尊重せられし等王陽明の學

を奉せられたのであるから其藏書中に陽明關係の書籍が多いわけである尙ほ世上流布の南洲先生傳記には先生の師匠伊東茂右衛門を鍛冶郷中の人の如くに記してあるが茂右衛門先生はもと撻鞞に生れこの地に成人し後年鍛冶町に轉居したものだ私は昭和九年茂右衛門の曾孫なる諏訪小熊(工學士海軍造船少將)と共に撻鞞なる茂右衛門先生の生誕地即舊宅址を確實に踏査を遂げたのである茂右衛門先生の著書に「餘姚學苑」あり明治元年五十三歳にて歸幽した薩藩唯一の王陽明學者であつた

二二、南洲先生の容姿と居常

南洲先生の容姿と居常にて就て述べよう、先生の身長は五尺九寸、體重二十九貫、洋服のカラが十九、全盛時代の東京力士朽木山横綱關と同一の身長、體重であつた先生の身體の肉附や、肌の色は東京名力士の國見山大關（後ち友綱部屋に籍を掛けり）そつくりで先生の真正の寫真といふのは、絶体にないのである、然かし各種の先生の肖像畫では西郷從徳侯家珍製版のものにて、もと印刷局お雇技師のキヨツネの揮毫した詰め襟の洋服を着し横を向ひて居らるゝ肖像油畫が、ちぢれた頭髮、太い眼、膨れた頬、隆々たる双肩とが、尤も先生の容姿を描寫して違はぬ様であると、先生に近侍した諸先輩の一致した月旦であつた、先生の銅像を製作した彫塑家安藤照氏もこのキヨツネの描出した先生の肖像を多量に取り入れて刻んだと聞いて居る、先生の肖像畫に就て次ぎの如き珍話も傳はつてゐる、恰度先生が武村に轉居し來られてからの出來ごとであつた、先生一家を擧げて、日常山温泉に湯治にゆかれ、數日滞在さるゝと、其宿舍の離牆の竹を掻き分

けて室内をのぞく一人の壯漢が、日に二、三度も來るのである、西郷家の家族もこれを氣付いて、胡亂な曲者ぢやと件の壯漢を捕へ詰問に及ぶと決して某事は曲者ではござりませぬ國分郷の生れで服部英龍と申す技工未熟の畫家であります、このたび大西郷先生様が此處の温泉に御光臨を又どなき好機會として先生の御風貌を描出したい念願を起しました、なれど大先生様は天下一の御人物故、めつたに御風貌に近寄ることも御遠慮せねばならぬ、詮方なくも籬を掻き分けて先生の御容姿を見取りて寫生に及びし儀にて候不躰の段幾重にも御容赦を請ひ奉つると低頭平身謝罪した、度量河海の如き南洲先生は構はぬと微笑されただけであつた、これが縁となり以後英龍は西郷家に入入して先生の令息や吉次郎の令息、令嬢、小兵衛の令息達のために武者畫や、お雛の繪などを描いた而して英龍の畫いた南洲先生の肖像畫は一疋の愛犬を曳かれた姿を描出したものである目前に先生の容姿を寫生した畫だけ幾分先生の風神を描出して居ると南洲先生昵近の人の月旦であつた次に南洲先生の日常は二、三日毎に短かく頭髮を刈られ髯髪はいつも月代の痕青々たるもので音聲は低かつたけれど頗る重々しく底力ある語音があつた先生居

間の中央には二疊敷許の熊の皮を敷かれ、傍らに大火鉢が置かれ、京都で購はれたといふ鐵瓶が斷へず松濤を起してゐた先生は朝な夕なに胡座をかいて、默然として、双眸を眼下の武田圃の光景や、遠近の山容に放たれるが冬の季節の武田圃には鶴がたへず田面に數十羽宛づゝ降りて餌を獵さり、櫻峰の秀嶺が仰がれたり其風色は一幅の繪卷物を見るが如くで油然として詩興の湧かざるを得ないのでこの田園環境の先生には幾多の即興の詩作がある明治七年頃先生が邸に於て賦された七言絶句には左記の如きものもあつた

△村居即日

十里坡塘引興長、西郊歸犢對斜陽、
邨翁鼓腹欣豐歲、萬頃余花笑語香、

△偶 成

早起開扉望櫻峰、雲間白雪與應冬、
再三詩客訪茅屋、波水喫茶共忘庸、

△偶 成

半生行路喚吾非、瀟酒清風入曉禪、
請看疎烟短牆處、紅塵離去少炎威、

武田圃の風光は此の詩句中に描寫され全く一幅の武村の風景畫を見るが如くであらう、

夏のころの南洲先生は主に白布の筒袖を着、寛濶の姿勢で腕を捲くられると其昔、少年時代甲突川の中流で某と喧嘩して右腕に負はれた刀傷の幅二分位長さ三寸位腕の廻りに亘つて頗る大きな疵がわり體質と同様に白色に同化してゐた、又、雨天の日で屋外に於ける行動が取れない時には、先生は家に籠つて自ら獵具を造つたり、其の他家具を拵へたりして消閑された、元來先生は頗る器用の質で手藝細工に堪能で其の細工に使用さるべき鑿、鉋、小刀等の刃物類は専門、大工同様に一通りを備へて居られた、今現に西郷家庭中老樹の下に置いてある石刻の福祿壽の如き又南洲翁記念館に陳列してある草履付下駄即ち鹿兒島の用語ではヒラデ下駄(平台下駄)の如きは先生製作品中の遺品である、而して暮雨肅々の日に先生は甲突川下流に、田上の新川の中流に谷山生れの竹内矢太郎といふ實直にして毫も飾り氣のなき年若い従僕を従へて投網を試みられ先生が肥大の身軀に護謨引の雨具を着、頭に饅頭笠を冠られて、のそり／＼と川岸を傳つて歩行さるゝ姿は、宛ら大の仁王様が歩かると傍人をしてアレ／＼先生がと指さしたものであつた、又先生が家居して揮毫されることは稀なもので然し一度び先生が筆を染められるれば

同時に十數枚を書かれるが例であつて、運筆は緩やかに腕から筆を揮ひ廻されるが、最も面白いのは先生の點うちで先づ先生は絹紙に向ひ筆を眞直に立て、筆尖を三回程も廻して點を打たれる、其點は必ず「」斯様な風に眞ん丸な形のもものが生れ出づるのであつた、其揮毫の用紙は總て自家格納の白の大鷲紙で、なほ多數の人から揮毫依頼の普通淡黄色の唐紙などは何十巻となく架上に堆高く積まれてゐた、先生が筆を揮はれると墨痕の乾くを待ち其の五、六枚を緩やかに太く捲き居候の雪蓬翁の室に持ちゆかれ、イヤアイヤ即ち出來はいかにと投げ出して雪蓬老の批評を求めらるゝが例であり先生の家庭は居候の河口雪蓬老が家庭教師格で年中孜孜として寫本に従事し朝夕は先生の兒童達に漢書を教授し十歳前後の兒童達には三字經の素讀を教へて三字經の經の字をケツと讀むは吳音で佛典と間違ふから宜しくケイと讀むべしなどと鄭寧に教授された、なほ南洲先生は兒童達の正科教科書以外の讀物として日本百將傳を一部宛與へられ、其の給與本が混雜せぬ様に先生の肉太い自筆で其本の表紙に寅太郎の寅、午次郎の午、酉三の酉の字がそれ／＼銘記してあつた、又其室内には挿繪のある普佛戰記や、角力の四十八手

繪入の古本が兒童達の展覽に供へてあつた兒童達の衣服は當時世上一般の風習に先立ちて筒袖を着用せしめ又兒童達の遊技は五目並べ、カルタ取りなどで其他勝負事は禁止して、時間を尊重すべき事と晝食、夜食を嚴重にさる事は西郷家々訓中の家訓であつた先生晩餐後の雨夜などには家族一同を居室に延いて四角の木造煙草盆を逆に立て其底を叩いて評子を取り忠臣義士の事蹟を講釋して家族達に多大の感銘を與へられたもので先生は國事に奔走の際京や、江戸の街で、屋次講談師の講釋を聞かれよく其音節を解しそれを雨夜の家庭に眞似られて家訓に資し、忠孝仁義の道を解かれたものであつたこれが西郷家の家風であり西郷家に居候して家族よりおぢいさん又は先生を以て敬はれる河口雪蓬老は明治丁丑役後東京の新開紙や、世上では翁を以て陽明學者の大坂町奉行大鹽平八郎の倅の大鹽格之助の後身なりとあやまれる宣傳をなし所謂一犬虛を吠へて萬犬實を傳へ市に三虎を走らすの譬へにもれす鹿兒島縣外の客で西郷家を訪問した人の中には翁に内密に承りをきたいが先生は大鹽格之助の御後身でござるかなどと眞面目に訊問に及んだものであつた、後ち十年役後雪蓬老は一時武の西郷邸を出で市均に流寓し室を迎へて

一女を擧げ明治廿三年病を發して西郷邸に引取られ家族一同より懇々切々なる介抱を受けしかど、天命は如何ともする能はず其年の夏七十三歳を以て歸幽した、尙翁の一女は伊作郷の人に嫁して翁の墓も鹿兒島より同地に改葬された

一三二、先生の狩獵と愛犬

明治維新第一の功臣陸軍大將正三位西郷公の身邊に、獵犬は善き附隨物であつた、この犬あるため、南洲先生を詩化し、劇化して、先生對獵犬との取材は頗る豊富であつたかの東台の銅像には狗を曳いて、永久に魂魄を留め皇城を護られる薩南の一畫人服部英龍の描いた先生の繪像にも犬がお供してゐる、英龍は先生が度々日當山温泉に湯浴し、其附近の山々を狩り立てらるゝを目撃した畫人である其描く處幾分先生の風神を寫し得たであらう、先生の獵犬は克く先生の驅使に耐へて其任務を果して奉公二なき家の子でもあつた、明治丁丑役直前、先生の知己勝海舟翁は先生の愛犬を取材として左の如き警

句がある、今にもね、鹿兒島の武村吉が、愛犬一疋をお供に具し横濱に上陸したらいかん、即時廟堂の諸公達は吉が犬の足下に政權を譲り渡さねばなるまい、嗚……、と先生の愛犬は、政治上の背景にまでも取材されてゐる犬も偉大なる使命を佩でたものだ、先生が明治戊辰役直前の頃には二頭の獵犬を伴はれた一頭を「ソノ」いふ名で川邊産の素黒の雄、又一頭を「トラ」と名を呼んだ、この犬は加治木西郷の稱ある小濱半之丞（後の小濱氏興）が溝邊より曳いて來て南洲先生に献上した其毛色が虎班である所から「トラ」の名を附けられた、而して戊辰役前先生は遠くこの二頭の獵犬を京都の地まで曳かれ、度々洛外の山奥を狩り立てられた祇園花街の名妓君尾は次の如く語つてゐる、明治の御一新前、京都は諸藩の勤王志士が屯して、夜なく紅燈花街の巷に出入し、銳氣を養はれました、多數の粹人も居られ、中にも木戸様（木戸孝允）の御愛妓は有名なお松さんで、後には夫人にご出世なさいました、大久保様（利通）にも御愛妓がゐました、西郷様（南洲先生）の愛妓は風變はりのお愛犬二疋でした、西郷様はよく愛犬とともに御入來になつて、鰻の蒲焼を犬の分まで御注文をして愉快相に愛犬とご一所にこれを喰はれ、犬の

頭を撫でられたりして、四方山のお話に興じて歸られました、妾しは西郷様こそ、粹人中の粹人様と思ひました、色や戀など、いふ方は、ほんとよの粹人ではありませぬと……流石は京都の名老妓の眞粹を解した哲言ではある此愛犬は南洲先生が明治六年陸軍大將の官銜を帯びて東京在勤中に武村の留守邸に寄る年波に病を得て、主人待遠げに天年を終へた、明治六年築地(東京)海軍兵學寮(海軍兵學校の前身)の海軍生徒であつた後の海軍大將上村彦之丞男の一夕話に明治六年は眞夏の時であつた築地海軍兵學寮の一生徒だつた俺は身體少恙を申出で、校門を出たのである、當時兵學寮では身體に故障あり少恙ある生徒には一日金五十錢を給して校外で靜養せしめたものだ、即ち俺は少恙を申出で金五十錢を給され、校門を出て芝高輪八ツ山下の些かなる天扶羅屋の樓上に登り、酒と天扶羅を命ト、校服の上衣と襯衣を脱いで手檻に靠れ下俯けに高輪本道を見卸し盃を傾け居ると其直下に南洲先生が一頭の愛犬を曳かれ面上の流汗を拭ひつゝゆかれる、ハッと先生ちやと眈をさしなげた其刹那、南洲先生は眼光一閃手檻に靠れる俺を見上げられた其瞬間俺は恰も電氣に打たれし如く覺へず頭首を縮こめた暫くして頭首を上げて

眞率なる先先はと見れば悠々乎として芝三田に向つて行かれるのであつた、俺は假病を申し出てかかる愚癡に及んだことを悔悟して天扶羅屋を辭し先生の後塵を拜しそこゝに築地の兵學寮の寮舎へ歸つて行つた、當時俺に指しなげられた先生の炬の如き眼光は今に眼前に彷彿たるものがある云々……先生には明治六年朝鮮道使問題の議容れられず冠を枉げて十一月十日鹿兒島に着し、武郡に歸臥されて以來は琴書に親しみ朝に野に耕し、夕べに川に漁り、而して狩倉は最も先生適意の行事であつた、十年の西南戦役の勃發當時まで武邸に飼養された獵犬は十二頭を計上した、其全部が純日本犬種に屬したもののばかりで佐志産の黒斑と「チゴ」郡山産の茅毛を「カヤ」川邊産の頸に白筋ある黒毛を「ゴジャ」と云つていづれも其毛色に因んで名を附けた「ゴジャ」は洋装人と見れば忽ち怒吼して其人に咬みつくといふ猛烈なる犬であつた、先生はこれに攘夷家と名を附け攘夷家と呼ばれると「ゴジャ」も我が身のことなりと心得耳を垂れ尾を振り欣々如として先生の許に驅けつけ命令の下るを俟つといふ一種の特異性を持つてゐた、十年の役陣中に先生が曳かれた獵犬は前記の「カヤ」「チゴ」其他に黒斑の一頭と都合三頭であつた、か

の西南役戦史上有名なる薩軍日州可愛嶽突破の前夜先生は手から三頭の轡を解いて放たれたが先生の双の巨眼には涙の露が光つてゐた、放たれた佐志産の黒班「チゴ」は生家なる押川甚五左衛門方に歸來し郡山産の茅毛「カヤ」は永井村で警視隊の巡查に捕はれ他の黒班の一頭は全く踪跡を失つたと南洲先生の犬に就ては、大略前述の如くであるが、更に先生の狩装束や、山々の狩倉地を述べよう、先生には冬季の狩獵には紋羽の下着に小倉の野袴、霜降り羅紗の羽織に、鼻緒の山草履を履き、腰に山太郎刀を佩ばれる、又夏孝の狩獵には木綿の白袴袴に布の帷子、白縞小倉の野袴に腰に山太郎刀の一本指し、頭には、四季を通つて今の中折形の帽子を冠つて其多くの場合には「カツ」を冠られる、「カツ」とは古來獵士が冠つた帽子で、往時^{（註）}の將軍や、大名、小名の鷹狩や、鎌倉幕府の源頼朝公の富士の牧狩の繪巻物に描かれた獵士の冠帽がそれである、又先生の狩倉は薩隅の山々でその數が多かつた、鹿兒島近在の地では、先生の拘地なる西別府山が中心で夜行を曳かれた、地方では、川邊の山寺の山、伊作、山川高城其他南薩西薩の山山々であつた、次に隅州では新城の山、新城の狩倉は牛根境界にある山で、今にも土地の人が

西郷ドンの山と稱へてゐる、高山、内の浦、大根占、小根占、佐多、高須、栗野、安樂日當山の各地到る處先生の足跡を印せざるはない、其内の高須の狩倉は、鹿の屋の名族平田禎の別墅の翠緑の後山がそれである、而して所有者たる平田は先生の遺蹟が永久に湮滅に歸せざらんよう充分に保存法を設定してある、尙ほ同別莊地は英主島津齊彬公時代に米倉庫を置かれ、肝屬地方の米穀は一旦同所に收納集結し以て其處の海岸より鹿兒島表へ廻送した所であつて薩藩農政史上の一遺蹟でもある、なほ先生の狩獵に就て次ぎの如き物語りがある、明治七、八年頃から、鹿兒島は五社の一つなる清水町精木川（俗稱稻荷川）河口の祇園神社（八坂神社）の苑内、左岸に、家號を「江戸前」と云ひ、主人を「元吉」といふ黒塀二階建の鰻の蒲焼屋があつた、主人元吉はもと江戸生れのもので江戸風の蒲焼に腕を揮ひ、江戸前の名を以て盛んに賣り出し千客萬來の繁昌を極はめてゐた、明治九年は秋も更けて祇園祠畔暮色蒼然たる頃、獵犬を曳ける紋羽織に小倉の野袴を着け、腰に一本指しの身體肥大の獵人が突如江戸前の暖簾を潜りて入り來り椽に靠れて鰻の蒲焼をと命じた主人元吉は、この肥大漢を柚山歸りなる田舎の獵夫と見て取つ

て小形の皿に蒲焼の尾端を盛つて出した、直に獵人は之を受け右手に曳ける二頭の犬に與へ犬が欣々如として尾を振つて喰べる姿をさも愉快げにながめ、腰帶の燈石袋より金子を手探ぐり慇懃に紙に包みて皿の中に置いて暖簾を出て去つたのである、やがて主人元吉は軽く其紙包を開き見て見れば意外や五圓の紙幣なのである、當時の五圓は今の卅圓以上の價值を有するもので、主人元吉は意外の金子に宛ら狐につままれた如き思ひをなし、祇園神社の社司佐藤要に一伍一什を話したところ先刻西郷隆盛先生が愛犬二頭を曳かれて悠然と永安橋を渡橋さるる雄姿を瞥見した、鰻の尾端代金五圓を包みた獵夫こそは即ち大西郷様トやと社司の説話に元吉は吃驚仰天、恐縮して佐藤社司の指圖を以て直に武の西郷邸に駈せ着け家人に謁を請ひ、叩頭三拜陳謝するところがあつた當日、南洲先生は大隅山の狩倉よりの歸途飢腸を饜やさんため、江戸前の鰻屋に入られた次第であつた、而して其翌明治十年は西南戦役となつて南洲先生の出陣あり、去年先生に鰻の尾端を振舞つて何の咎もなかりし恩誼を謝するは此の時ありとて従軍を出願し許され先生陣中の料理役を承つて克く其任をつくしたと

一三三 薩軍の陣中に先生の官位褫奪の

辭令書を手交して勇者上村直翁

慶府下高見馬場郷中の上村直翁は、明治四年の廢藩置縣後鹿兒島縣廳に出仕し、明治十年の役初期戦の最中に、縣の使番として、南洲先生の官位褫奪の辭令書を薩軍の陣中に齎らし、身自からこれを南洲先生に手交した勇者であつた、而してこの歴史的感激の場面に、先生の愛犬が登場して一つの配役を承つてゐる、直翁の直話明治十年の役、薩軍鹿兒島を進發して熊本に至り、銀杏城を包圍し二月二十一日に前軍銀杏城々兵と始めて銃火を交換した越へて二十五日に西郷隆盛、桐野利秋、篠原國幹、村田新八、桂久武以下將士に對する官位褫奪の詔が降下した、而して僅々數日にして、南洲先生の陸軍大將の官銜、正三位の位褫奪の辭令が當該縣廳に到着したのである、縣當局者に於てはこれを陣中の南洲先生に交附せねばならぬ、これは大役にして且つ難役、下僚吏員に委ぬべき性質のものではない、上級の吏員が其任に衝らねばならぬが、主なる當事者がいづ

れも恐怖して、この役を引受くるものがない、乃ち千萬人と雖もわれ獨り往かんかなの意氣のある縣吏がゐないのであつた、結局は某課長級が平素の執務上から、この大役、難役を承はらねばならぬが某頗る躊躇して、敢て身を起すともしない、其處で其次席格たる不肖の拙者が決心してこれを引受くることを申出たのである、而して即時戦地の熊本出張を仰付けられた、其處で拙者は南洲先生の官位褫奪の辭令書を携帶して、肥後の先生の本營を指して鹿兒島縣廳を發足した其途上に、竊かに心中に書くようには、この大役難役を果すに就て、大人格の南洲先生からは何とも仰せもあるまいが、舊交のある中村半(桐野利秋)からは、屹度嚴しき叱責を頂戴するであらう、半とは二歳時代からの交友で其昔半が鹿兒島近郊吉野の實方から、朝な夕べに韃撻鞑靼を往來して、鹿兒島城下同志二才衆と輯睦した時に、自分は半と袂をつらね我が郷中の益滿等と共に高麗町郷中の勇者岩見半兵衛等を訪問し互ひに胸中を語らつたもので半の氣質は飽迄解してゐる、今度、拙者が大役難役を帯びて薩軍の陣營に到るには、半として屹度拙者へ一言がある、其一言が恐い、眞に怖い、と懸がては肥後川尻なる薩軍の本營に到着して、玄

關から頼まうと呼ばつた其刹那、中村半が奥の間より玄關に出て來るのに會つた、半は拙者を一瞥して、やあー遠來のお客トや、先生(南洲先生)へ用向で來たろう、先生は今日は都合よくも在營中ぢや、一寸拙者(桐野)は出る、緩くりせよと、遠來をねぎらう眞心からの挨拶を受けたには、全く事意料に出て拙者は舊友の情誼はかくも厚きかと胸中の感慨云ふべからざるものがあつた、而して拙者は導かれて表座敷に入つて俟つ程なく南洲先生には悠然として席敷に來られた、拙者は寒暄を叙したのち、其事今日の參上は鹿兒島縣廳のお使者として云ふも果てざるに、先生は一寸お待ちなさいよと云ふて、座を立たれ、しばらくして先生は身を禮装に改めて來られ座に着き姿勢を正された――其處で拙者は今回東京表より御身邊に係る辭令書の到着したに付きこれを御交附のために參上しましたと全く我を忘れ滿身緊張し切つて先生へ絹の服紗包みの辭令書を手交した而して先生はこれを頭上に戴いて、辭令を默讀し次で東方に向つて容を改ため敬禮を爲された何の爲の敬禮であつたらうか其間の先生の敬虔なる態度、緊張し切つた場面は容易に口で述べがたく筆でもつくすことが出來ない暫くして先生は忝しく辭令包みを收め

られ、拙者に向つて遠路御苦勞でござつた、軍旅陣中のことではあり、何等の風情やど馳走も出来兼ねるが、今晚は此處の兵營に緩くり泊りなさい、兎の汁でも拵へよう、これから附近の山を狩り立てるから、同行しなさいと勸められて拙者は先生の後に附いて本營は附近の山の狩倉に赴いた、當日、先生は武の邸から陣中につれられて來た「カヤ」
「ツメ」の二頭の獵犬を曳いて、狩り立てられ二頭の兎の獲物があつた、當夜、本營で兎の汁ので馳走にあづかつて翌日鹿兒島への歸路に就いた云々と先生の本營に使ひせねば身首處を異にせんかと恐怖して誰れもこの大役、難役を引請けなかつたを上村翁一人、其衝に當りて無事其使命を果たして鹿兒島縣へ歸廳した其事は翁の日記に巨細に記されてあるが、從來の流布本の西郷傳記にはこれらの史實が全く傳へられてゐないのである南洲先生の狩獵の作詩は其數鮮しとしない、先生最後の出獵は明治十年一月の大隅山の根占、田代方面の狩倉であつた、其時即興の作あり

驅兎穿林忘苦辛、平生分食犬能馴、昔時田獵有三義、勿道荒耽第一人、

又此の一詩が先生最後の詩賦でもあつたらう、先生は一生を通し狗を畜ひて山に獵され

たのである、先生の狩獵は娛樂であつた乎、將た道樂であつた乎、それは先生自身の詩賦が雄辯に之を語つてゐる其詩に

山行全將樂、連日與晴期、追兎披柄伏、驅熬忘嶮夷、歸來常節食、浴後不知疲、
休道獵遊事、只宜少壯時、

先生の狩獵は身軀の鍛練にあつたことです

一四、南州先生と相撲

南洲先生は狩獵を好み、又角力を好まれた、即ち狩獵と相撲は先生の居常最も適意のものであつた、先生より三代の祖吉兵衛翁は劍術の名人大山角四郎の門人で武藝を善くし、怪力を以て角力で藩中に知られた武士であつた、其曾孫南洲先生ありて、豊かな體驅を持ち、夙に壯時より角力を好んで曾祖考其人の面影を髣髴たらしむるものがあつた我が薩隅日三州に於ける相撲道の歴史は實に古い、人皇第四十代天武天皇の御宇十一年秋七月壬辰朔大隅隼人が阿多隼人と朝廷に角力して大隅隼人が力強く之に勝つた、又天武天皇の次の持統天皇の御即位の九年五月丁卯に大隅隼人の角力を皇庭の槻の下に於て天覽を賜ふたとあり、鹿兒島郡上伊敷村に鎮座の縣社伊邇色神社一名年の宮様は薩摩の相撲の神様と申し上げてゐる、御祭神は人皇第十一代垂仁天皇の第二皇子伊邇色入彦命にて、命は天皇の詔を奉り諸國に池を鑿り、溝を拵へ、田野に灌いて、以て縣民に新墾を勧め賜ひしが、伊敷の開墾も又其一にて、土民其恩を謝するため、此の地に一神

祠を建て邑名を伊邇色村と稱へた、而して祭神には弓矢と角力を好まれたれば、土民流鏑馬と角力を執行し以て神靈を慰め奉つるを年中の神事とした、この奉納相撲には近在近郷を始め三州の遠村より多數の力士が馳せ來て角力し、三州中の鎮守の祭禮角力として最も盛大を極はめたものである、これらの由緒に依つて相撲の神と呼び做したもので同社の祭禮相撲は今日も傳統し一村中の最も賑かな年中行事の一つとなつて居り、往時の流鏑馬場の馬場跡も歴然として現在してゐる、又鹿兒島神社五社の首位たる南方神社（清水町鎮座の諏訪大明神）の七月の大祭、頭殿の行事の一つなる相撲は「諏訪會の氣色ばかり」といふ唱へられ、双方の力士が面白き立台、手様を以て角力した、これも薩州角力の有名なものであつた、かくの如く角力は薩摩に於ては古き時代から行はれ、次ぎ次ぎに薩摩の地より天下の剛力士を出し大に斯道を振興した、即ち人皇五十八代光季天皇の御宇仁和二年の時に左近衛の阿力根繼、右近衛の伴氏長といふ兩士がゐた、氏長は我が薩摩が生んだ力士で相撲の最手（最手は關手、大關横綱といふ格を云ふなり）の位に据はり天下無雙の膂力を持つてゐた「職人歌合」に「我戀は薩摩の氏の長なれや、片手だ

にも、あふ人のなき」と云ふ和歌が載つてゐるが、即ち氏長の膂力を絶讃した和歌である、氏長は其和歌の如く角力の手が天下一の上乗者であつて、これに對抗する敵手がなかつた有名なる太平記にも「播磨國の住人妻鹿孫三郎長宗は薩摩氏長(右近衛伴氏長)が末にて力人に勝ぐれ器量世に起へたり、生年十二の頃より相撲を受けるに日本六十餘州の中には遂に片手にも懸る者なかりけり」とあり又同ト太平記にも「畑六郎左衛門尉と申すは歳十六歳の時より相撲を好んで取りけるが板東八ヶ國に更に勝るものなかりけり彼の薩摩の氏長もかくやと覺へて夥し實にや古の武士は専らかかる力業して身を堅めける」となり「新猿樂記」と云ふ本に「六君の夫は高名の相撲取なり薩摩氏長が曾孫なり」とあり我が薩隅日三州の相撲は前述の如く往古の集人種族より傳統し、島津氏三州の地を領知された以來相撲を武士教戰中に取り入れられ御關符、馬追取駒、甲突川尻の水泳船漕の諸行事と共にこれを重なる戰術として武士に奨励されたものであつた、南洲先生は相撲嗜好は相撲を武士の戰術として重視し其れを學ばれたものであり且つこれに他にも及びして奨励し國家の大事に耐ゆる心胆體力を鍛鍊するにあつた、以下先生の相撲史實に

就て述べよう、南洲先生は安政元年一月二十一日に島津照國公に召され中小姓の班に列なり公に扈從して江戸にゆかれ御庭方役を拜した時に先生二十八歳、三田おやしきの庭中に土俵を設けて盛んに若きものどもと角力された而して其本職たる御庭掛の任務は全く知らざるものゝようであつた、慶應四年は四月十二日、國父島津久光公は朝廷の御召に依り上京し松平越前侯(慶永)山内土佐侯(豊信)伊達宇和島侯(宗城)の大諸藩侯と共に朝廷に人材登庸、兵庫開港、長州處分問題に就て建言あり次て六月十六日には久光長藩士山縣狂介(有朋)品川彌次郎を引見して王政復古の意中を告げられ兩長士をして歸藩して其主毛利敬親父子に報せしめられた越へて六月廿二日に藩老の小松帶刀軍賦役たる南洲先生(當時大島吉之助)大久保市藏等土藩の後藤象次郎等と會見し王政復古の盟約を協定し八月には大久保市藏等藝州藩の家老辻維嶽を説いて王政復古の舉に加盟せしめた、此の時薩、長、土、藝藩の士氣は昂つたが中にも薩摩藩兵の京洛に屯して士氣旺盛を極めたが、國父久光公は、一日、相國寺に於て本相撲を興行し松平春嶽、伊達宗城、山内容堂等の諸侯及其片下、在京薩藩の士太夫、京都に屯する薩藩の陸軍一番隊より七番隊

及海軍七百人を招待された、勸進元は久光公である、時に公五十一歳、世話人は大島吉之助(南洲先生)である時に四十一歳、躰軀肥大の南洲先生が相撲世話人として、相撲の打出しまで土俵溜に居て何にかと周旋さるゝ風景は、大關か、年寄かど見へて觀衆をして目を聳たせしめた國父久光公を勸進元とし、軍賦役大島吉之助の南洲先生を世話方とした京洛相國寺畔の本相撲は本中より段々と進んで日の下開山横綱陣幕の愛弟子梅ヶ枝の取組に及んだ、其敵手は當日招待を受け見物に来て居た薩藩一小隊小頭の伊集院金次郎其人だつた、金次郎は慶府下上鍛冶町郷中の出身、諱を正雄と云ひ、少年時代より友人と角力し少年關取の名を博した好角家だ、先年は京都薩摩お屋敷の糾合方取締役を勤め長藩の山縣狂介等とは、深き交を結びて學問あり、識見ある人物であつた此の日熱心に東西力士の角力振りを見てゐたが、枝簾に堪へざりけん、世話方の南洲先生に飛込み角力を申込みて梅ヶ枝關と取り結んだ、梅ヶ枝關は横綱陣幕部屋中の角力巧者を以て知られた名力士であつた而して角力巧者の梅ヶ枝と素人相撲の金次郎との取組に就ては未だ一戦を交へざる前より早や觀衆は一齊に梅ヶ枝の二番勝ちなりと首肯く處であつた、圖

らざりき、二番勝負とも金次郎に團扇が揚つて、相撲場は兵隊側から金次郎さんく勝つたくの歡呼の聲なりもやまざりし風景を呈した、一説には當日の勝負は梅ヶ枝が特に金次郎に花を持たしたとも傳へられてゐる、金次郎は其翌年の慶應四年正月三日の伏見鳥羽の戦ひに出軍し健闘善戦卅二歳を一期として立派な戦死を遂げ明治戊辰戦史に芳名を留めたのであるさて當日の相撲番組は進み進んで大關との番組に入つた即ち東は日の下開山横綱陣幕西は逆鉾大關の取組であつた、逆鉾は薩州川内生れで相撲の初名を千鳥川と呼び後ち逆鉾と改名し江戸相撲に入り腕を鍛つた名力士で、今度、横綱陣幕と共に江戸から入洛したもので當日の勝負は二番角力で、第一番角力は陣幕がもろくも負け、次で二番角力となつて、陣幕が勝ち、三番角力には、横綱陣幕の大様な得意の手が見事に極まつて、逆鉾關は土俵の外に投げつけられてしまつた場所は割るゝばかりの大喝采であつた、幔幕を打廻はした棧敷に威儀を整へられてゐた勸進元の國父久光公は、御當座の引出物とあつて、横綱陣幕に黄金作の太刀一振を賜ふた陣幕は天下の大諸侯と其重臣と薩藩兵との見物の中に太刀を戴いて得意満面で、右大關の大角力の勝負あつて、千

秋樂の弓取の式が嚴かに執行され東西力士は陣幕逆鋒の兩關を胴上げを行ひ夫れど退場となつた、王政復右の大業を目前にして國父久光公には、かくの如き豪華版の大相撲を舉行し、一は以て大諸侯と握手輯睦し二には以て麾下兵勇を歡喜せしめ、元氣を鼓舞せしめ他日の變に備へられたものであらう、嗚呼、國父公の氣宇の恢宏、規模の雄大はすでに天下を呑まれた概があつたと云はねばならぬ而し明治戊辰役前京都に屯した薩藩兵のために、相國寺内と二本松との兩島津藩邸内に武藝の稽古所が設置され、相撲の土俵も設けられてあつた、相國寺内の土俵には薩藩お抱の陣幕、川内出身の逆鋒櫻島出身の山分の三關取が御師匠役として藩兵に角力の四十八手を教授して、其角力のはづむこと本相撲以上の土俵を見るが如くあつた、當年四十一歳の軍賦役大島吉之助の南洲先生の角力敵手は藩兵中の角力巧者の評高かつた慶府下上の横馬場郷出身の伊東四郎左衛門後の海軍大將元帥伯爵伊東祐享で先生と四郎左衛門との體格は相匹敵して好取組みであつたが、勝負は四郎左衛門に多かつた、南洲先生には毎日相國寺内の土俵に登場し陣幕と取組みて相撲手を教はれた京都の畫家富岡鐵齋が南洲光生と陣幕との角力を描いた場面

のものが、今日東京の鹿城出身の前田男爵家に家寶として傳はつてゐる鐵齋畫伯は、我が藩士と交り其緣故を以て明治維新前鹿兒島に來遊し藩老岩下方平の宅に滯留し、一日霧島嶽に登山し天の逆鋒を寫生した雄渾な畫面の軸が、現在鹿兒島の某家に珍襲されてゐる京都の相國寺の島津藩邸内の土俵にて藩兵の師匠となり善く南洲先生と角力した薩藩お抱の日ノ下開山横綱陣幕は名を久五郎と云ひもと出雲人であつた、初代の横綱たる寛政年間の谷風梶之助より九番目に當つて慶應元年に力士最高の横綱を張り、天下無類の力士の名を博した、然し技は餘り上乘でなく、又豪快な角力振りといふでなく、容易に突進も試みない至極大様な角力振りを發揮した當時、陣幕の權威といふものは實に凄しきものであり、力士連から「陣幕様」を以て崇められてゐた、徳川幕末江戸より川内出身の逆鋒、櫻島出身の山分等の關取と共に京都に來り、籍を大阪相撲に置いて、薩藩將兵のお師匠となり、京都相國寺の土俵に登り、南洲先生を始め薩藩の兵勇に相撲の四十八手を教授した南洲先生は日毎に土俵に來られ陣幕と取組みて稽古を勵まれた、其頃の南洲先生の體量は身長五尺九寸、體重二十九貫、體軀に於ては横綱資格の貫祿は十分であつた、然

し其角力振りは御師匠の陣幕同様技は上乘でなく、豪快なところもなく、大事を取つて突進も試まず大様に押し一本の手であつた勝たんが爲めの角力でなく、斯る力業して身を堅めるといふ古相撲道の精神を汲み分けられた角力振りであつた先生が陣幕や、伊東四郎左衛門等の薩藩將兵と取組まんと化粧立の時に、先生の股間の一物が禪から露出することが往々あつた、敵手の將兵はこれがために覺へず失笑し折角の張り氣もぬけて、敗を取つたものもあつた位である先生の肌の色は雪白の如く頗る美しかつた、ごろ／＼投げを喰はれて土俵の土の上に這はれた時の如きは満身に土砂が一杯附着して、其風情も見物であつた、明治戊辰の役後、王政復古の大業成りて、南洲先生は歸藩凱旋し明治二年の師走上ノ園町の邸より武村に轉居され明けて明治三年の春鹿兒島縣下に於て、勸進大相撲の興行があり時恰も皇政御一新の際と、滿城の士民相撲氣分を唆り立て、人氣湧くが如くであつた、其時天上無類の剛力士の稱あつた日ノ下開山横綱陣幕久五郎も横綱の花粧廻しを解いて年寄格となり他の力士一行と共に來慶した、相撲興行中の一日、陣幕は紋服、着袴、帶刀の禮装に小者二、三名を連れ豊驅堂々四邊を拂つて武村の西郷

邸に伺候し南洲先生に菰被りの四斗樽の酒を献上し畏りて明治維新前以來の恩顧を謝し大男の双眼には感激の露が漂つた、先生の答辭も慇懃なものであつた、又越へて二、三日、年寄陣幕は六人の部屋力士を隨へて鍛冶町の大山彌介(彌介は後の巖公)邸に參候した、彌介の家兄大山彦八は藩中でも有名な角力の達人で素人相撲の大關格の位地にゐた此の日大山家より御馳走の宴は開かれ、南洲先生も武村の邸より來邸あり力士連は巨盃を飲み乾し果ては疊の上にて据はり角力や脛押を行ひ、角力甚句を謠ひ、大山家の家柱も搖らくほどの豪興を極はめ、豊驅、着袴の南洲先生が上席に悠然として座し力士連から盃を指さるゝ其風景は大關か、年寄格に見へて座に侍べる人の目を惹かせしめ鹿兒島では珍らしき風景の宴會であつた、而して南洲先生には明治丁丑西南役の直前まで、武村の邸の小座敷の土俵に於て相撲を取られたので、先生の敵手力士はもと力士の岩舟、國分生れの傳兵衛、舎弟小兵衛、谷山生れの家僕竹内矢太郎の子等で、時に先生五十の老坂を越して居られたが肉少しも落ちず横綱格の躰軀の持主であつた先生の師匠岩舟は四國に生れ江戸力士で先生の恩顧を受けたもので、躰軀は名力士の清瀬川に似て較

々少く電光石火の技を持つてゐた、二年前鹿兒島に來り千石馬場に紺屋を營業し可なり
 の店を張り朝夕先生の武邸に伺候し相手を勤め又た國分の傳兵衛も骨格逞しき剛のもの
 で、先生の獵、漁にも御供したのである、明治戊辰戰役前、京都に於ける薩藩の相撲獎
 勵は、藩廳の訓令も出でた位である、殊に西郷先生が相撲士俵に登り力業の範を示し薩
 兵の士氣を鼓舞するゝところがあつた、爲に藩兵の相撲熱は非常に沸騰し、盛んに角力
 をやり、十分に身軀を堅固に堅め、破竹の勢ひを以て、明治戊辰役に從軍し各地至る處
 善戰健闘して凱歌を奏したのである、相撲の力業が我が薩藩兵の唯一なる武術であつた
 事顯著であり、薩藩戊辰役戰史上の一記録であるから、こゝに聊か藩兵の相撲振りに就
 て述べておかう、慶應四年一月三日以來の伏見鳥羽の戰爭に京都に屯ひした薩藩兵が出
 動し目に餘る大敵を掃蕩した、越へて二月東征大總督有栖川宮熾仁親王殿下には三道よ
 り天兵を進め給ふた此時薩州は南邑なる田布施高江崎の生れの大男の加藤次左衛、田中
 藤太、田中龍五左衛門、中村甚之丞外慶府下兵器方の兩士が薩長護衛隊の外に選ばれて
 總督宮家の子郎黨となり宮様の左右に隨從した、其御馬前に錦の御旗を春風にはためか

して奉持したものは薩藩御抱の力士陣幕久五郎、川内生れの力士千鳥川關後ちの逆鉾關
 櫻島生れの力士山分關であつた、しかして宮様の護衛兵と共に錦の御旗の下に曳々雄の
 喊聲を揚げて進軍したのである、田布施の宮様護衛の六士も陣幕等の力士と交るゝ錦
 旗を奉持したが六士中の一人なる大男の加藤次左衛は八月二十六日の會津城攻撃の日に
 奮戰銃丸に中り右腕に疵を蒙り九月二日遂に死亡した行年四十一歳であつたといふ薩藩
 の將兵は總督府參謀西郷南洲先生を始め黒田了介(後の清隆)隊長の野津七二、樺山十兵
 衛、伊集院金次郎の如き角力取的を始め三千の兵はいづれも相國寺畔の土俵で角力した
 ものであるが、中にも九番隊長の樺山十兵衛は當年二十三歳、佐久間象山の高弟赤松小
 三郎の門に入り英式歩兵操典を究はめ小三郎に拔擢されて野津七次郎(後の陸軍大將元
 帥侯爵野津道貫)と共に塾頭に擧げられた立派なる隊長であつた正月三日以來鳥羽伏見
 の戰ひより東征軍の天兵の進發には我薩藩に於ては第一番隊より順番を追ふて繰り出し
 たが樺山十兵衛の隊は九番隊なる故に出軍が九番目の順にて立ち後れとなつた部下の兵
 は大に之れを遺憾とし不平滿々の極は宿泊所なる相國寺畔の薩州おやしきの長屋を破壊

して英氣をもらしたこれを見て、見らぬ振りせし隊長の十兵衛は本營に出頭し部下の暴状を上訴し謹んで罪を俟つた、本營では協議して其責任に就ては追つて沙汰すべきものなりとあつて早刻同隊に出動の命下り、九番隊は十兵衛指揮のもとに勇躍して進軍した七月十三日の奥州岩城平城の攻撃は天兵猛烈に攻撃したが城兵頑固に防戦した、これを見た十兵衛は挺身城門を乗越へて突進部下を指揮し遂に落城せしめ身も又數創を蒙り横濱病院へ後送され創やといへて藩兵と角力を取り其爲め創口破れて八月廿四日死を遂げた、年廿四先年朝廷戦功を録され從五位を追贈された十兵衛は慶府下内ノ丸の生れにて、香川景樹門の歌人権山資雄の四男幼年時代より角力を好み小庭に相撲土俵を拵らへて、同家へ訪ひくる若者は相手を選ばず角力を所望して取組みしたが其中で互角の相手は奥常次郎氏であつた又京都では、野津七次隊長と互角で花々しき巧みな角力振りを見せ兩者とも化粧廻しを拵へてゐて此の兩隊長の部下兵の相撲が藩兵中尤も盛んであつた、相國寺の薩摩屋敷の相撲土俵は敵前決死の薩士の角力を以て大いに盛んで、中にも野津七次後の野津日東將軍は好敵手の岩切喜次郎と取組みて、克く戦つたが勝星は矢張り七次

に多かつた野津は本相撲の土俵にも出でて角力した、躰軀小兵なれども業は功者であつた、明治戊辰役直後鹿兒島に凱旋の時に行季の中に化粧廻しが格納してあり野津家一族をして七次は一生を相撲精道に進するではないかとまで杞憂せしめたものである、七次の敵手の岩切喜次郎は西田郷中の出身薩藩六番小隊の戦兵に屬し同隊中の戦兵の川北六左衛門ともよく取組んだ、六左衛門は薩藩近世の奇行家川北新九郎の息諱を陽高と云ひ、角力の技も巧者であり、流石の喜次郎も敗北を取つたこと少くなかつた、後ち六左衛門は慶應四年四月二十三日の宇都宮の戦闘に参加し奮戦死を遂げたが時に十七才の若武者であつた、岩切喜次郎は、戊辰役の戦功により祿六石は授かつた、明治四年近衛陸軍歩兵少尉に任じ六年桂冠して歸郷し明治丁丑役には薩軍三番大隊長小隊長となりて出陣し日隅の地に轉戦し八月十七日日州長井村の可愛嶽を突出し九月一日城山に入り夏蔭方面を扼守し二十四日城山陥落して戦死を遂げた享年卅五歳、八月十七日薩軍可愛嶽の嶮を突出した時官軍糧食を遺棄して薩軍の獲得するところとなつた喜次郎酒肉堆積の状を見て垂涎措かず鎌詰の牛肉を好下物とし巨盃を傾けて痛飲淋漓敢へて身を起さうともしな

かつた、隊長の河野主一郎之を見令を下し敵兵前面にあり貴殿之を追撃すべきなりと喜次郎悠然として身を動かさず巨盃を手にして、拙者に命せらるるには宜しくこの酒肉の地を以てせらるべしと尙ほ盃を重ね、酔をつくし漸くにして薩軍に追及した喜次郎勇武人に勝ぐれ、豪膽多くは此の類であつた、其年若かりし頃、郷黨の歌人は枝生胤の門に學びて、又一面風流の士であつた、月前の花を詳々た和歌に

花にのみ、うかれくして此頃の朧月夜を踏まぬ日はなし

といふ名吟は評判高いものゝ一つであつた、喜次郎に家兄あり喜之進と云ひ次弟あり勇之進と云ひ、末弟あり吉藏と云ひ兄弟三人いづれも丁丑役に薩軍より出軍し三人共に枕を並らべて打死と遂げたのである、薩藩四番隊の鮫島四郎は慶府下後迫郷中の出身身長中人に過ぎなかつたけれど身軀肥満膂力あり、立派なる相撲躰軀の持主であつて、よく伊集院金次郎と取組み角力して五分〳〵の勝負表を作つてゐた戊辰役の戦功により祿八石を授かり近衛陸軍權曹長となり明治六年桂冠歸郷し明治丁丑役には薩軍の三番隊九番小隊分隊長となり三月廿五日の木留の戦ひに敵弾に中つて死した、享年三十四、南北朝

時代芳野朝廷派に屬し薩南の地に忠勤を抽た鮫島四郎は其祖先である薩藩四番隊の戦兵に荒田郷出身の本田與四郎といふ角力巧者あり、又同隊の重久嘉右衛門は平郷中の出身氣宇快潤膂力あり相撲を好んだ其敵手は藤井八郎だつた、八郎は薩兵中屈指の好男兒、喜右衛門より年は若かく嘉右衛門は土俵に登る毎に、八郎に取組を所望した、若櫻花手折るには苦はなかつたらう嘉右衛門は明治四年徴されて近衛歩兵中尉に任と六年桂冠歸郷し明治丁丑役には薩軍の四番大隊六番小隊半隊長となり三月十一日の田原坂の激戦に奮戦敵弾に中つて死を遂げた享年廿八歳であつた薩藩砲台半隊長田代五郎は西田郷中の出身諱を清丈、通稱を愛五郎五郎左衛門、五郎と云ふた、相撲好きであつた、伏見鳥羽の戦に奮戦し戦功多かつた明治四年徴されて近衛陸軍砲兵少佐に任と六年桂冠歸郷し明治丁丑役には薩軍の二番砲隊小隊長となりて出軍した、三月二十六日の小川方面の戦闘に薩軍利あらず親友の兒玉八之進討死した報を受取るや否や、直に單身傳家の寶刀を揮ひ敵中に斬り込みて、壯烈なる戦死を遂げた、五郎若かゝつた時、郷黨の古學者是枝生胤の門に歌道を學び、亦劍道を藥丸師範家に脩さめ、繪畫を能くし、勤王の志が深かつ

た、其京都御守衛の任にあつて盛んに角力をやる時、一日志賀の舊都に遊びて、左の一
首の和歌を詠らた

鶉鳴く野と荒れたれと大宮の跡と思へはこそ踏れぬ

薩藩小銃第六番隊の松井十郎兵衛は同隊中の相撲すきの第一人者であつた慶應四年四月
二十三日の宇都宮の戦ひに奮戦死を遂げた、享年二十四、豊府城北草牟田郷中の出身、
諱を行直と云ふた、慶長五年庚子の關ヶ原戦役に徳川家康の御曹子、松平下野守忠吉に
渡り合ひ忠吉の綴籠手の邊りを突いて忠吉落馬し忠吉を組み伏せて其首を掻かんとして
忠吉の家臣龜井九兵衛(關ヶ原大全記には加藤孫太郎とあり)駈け來り首を撃たれた松井
三郎兵衛の後裔である薩藩で書かれた文書にはすべて松井三郎兵衛を牢人としてあるが
これは三郎兵衛が家康の御曹子に及向ひしを憚りて殊に牢人とせしものである彼れの子
孫は藩主より地所屋敷を賜ひて大に優遇されたが、徳川幕府時代は表向にはこれを沙汰
しなかつた薩藩三番隊の相良吉之助は野津、樺山、伊集院、伊東 四郎左衛門 田代等の
將士につぐ相撲すぎで、相國寺の土俵に登場せぬ日はなかつた明治四年陸軍大尉に任せ

られ熊本鎮台鹿兒島分營付となつた、七年分營炎上の事あり吉之助其責を荷ふて桂冠し
私學校に入つた、十年の役薩軍の一番大隊六番小隊長となり、三月五日の二俣攻撃の時
奮戦敵弾に中つて死を遂げた、享年三十六歳であつた、吉之助骨格肥大膂力人に絶し其
鹿兒島に在住の時には、上ノ馬場の自邸の庭内に土俵を築き、遠近より壯漢を集めて角
力を取つた、其力量と云ひ、其角力手と云ひ、田舎相撲の大關格以上だといわれてゐた
薩藩四番隊の監軍永山彌一郎は好角家を以て薩藩諸隊中に鳴り、相國寺の土俵には、登
場せぬ日はなかつた、將兵を見付け次第土俵に誘き出して角力した、勝星は多かつた、
戊辰戦役には奥羽地方に出陣し白河城攻撃には、奮戦力闘して著しき戦功を樹てたが、
白河城の陥落するや、彌一郎城内に酒菰樽を發見し踊躍數番して諸將兵へ「諸君此處休
戦トや〜飲め〜」と大呼し酒菰を突いて飲むは〜大鯨の百川を吸ふにも似たりで
あつた、陣中身にはチョッキ、ツボン一つで其の上に和服をまとい戦ひ始まれば和服を
ぬぎすて、短刀を携へ戦場を往來して將兵を指揮した、豪氣比類の如きであつた、明治
四年近衛歩兵少佐を拜し次で開拓使三等出仕となり北海道に赴任し臈がて中佐に陞進し

た、彌一郎將來日本の大患は露國にありとし、身を以つて其の鎧鎧に當らんことを請ひ屯田兵の長となつたのであつた、明治八年樺太と千島の交換問題に就て意協はざるものあり憤然挂冠して東京に歸り次で鹿兒島に歸り家居悠々自適消閑し私學校黨とは志尙を同くせず獨自の意見を懷抱して敢へて動かなかつた、西郷南洲先生私學校黨に擁され武邸を出て軍旅に就かれんとさるゝに際し、桐野利秋の説くところとなり慨然私學校軍に従ひ、三番大隊長となり十年四月十三日御舟に戦つて百姓の民舎を購ひ、屋内に入り火をつけ以て自殺して相果てた享年四十、彌一郎に家弟休二又は永山休清とも云ふた、家兄同様相撲を好んで、京都相國寺の相撲土俵で角力し一廉の取的であつた明治四年近衛砲兵大尉に任せられ次で砲兵中尉に任せられ、又次で砲兵少尉に任せられ、逆進また逆進して官職降下するも、平然として全く知らざるが如き振りをしてゐた、明治十年役薩軍の四番大隊五番小隊長となり手兵を提げて克く戦つたが、三月十日の圓台寺山の戦ひに奮闘死を遂げた享年三十八、薩藩諸將士中最も奇行に富んだ同藩の山口仲吾と併稱され薩人奇人傳中の双壁であらう、茲に本文の執筆者は薩藩郷土人物の研究資料の一つ

として永山彌一郎家の山緒の梗概を提供しておきたい水戸光圀卿の史臣佐々助三郎、丸山雲平の兩儒大日本史々料採訪のため貞享二年乙丑の夏鹿兒島城下に來り、藩廳の周旋を以て、七月十七、八の兩日大乘院、太平寺、福昌寺を往訪しける時に薩藩の史臣河野六郎兵衛、伊地知少八郎の兩士へ足利義昭將軍の貴胤鹿兒島に居住し永山姓を名乗居るを以てし「興曆記」といふ書に

一、足利義昭

靈陽院殿將軍

一、足利義尋

南都大乘院後高山

一、足利義尊

尊圓圓滿院

一、足利義在

千壽丸後號

永山右近流寓薩州

とあるを詳らに語つて關係資料を獲んとした、當時、薩摩の士で永山休兵衛其人の家がそれだろうと云ふにあつた、而して薩藩では水戸の史臣へ充分の資料を提供するに及ばなかつた、此の問題は今日に残されてゐるわけだが、郷土史學専門家の示教を求めたい薩藩の兵中に指宿一次といふ若かき戦兵がゐた、其祖考の指宿納右衛門は御納戸役を勤

め、文筆の才あり筆のまに／＼書ける見聞記録は薩藩近世史の資料で、面白き書き振りのものである、其孫の一次は京都守衛中も朝夕相國寺の土俵に出入し一心不亂に角力と二本松の島津薩藩邸土俵へも往來して數番取組むことを課業とし遂に本相撲の土俵に出て相撲名を「やまと錦」とつけ職業相撲の取的となつた、明治十年役には官軍より陸軍歩兵中尉として従軍した、田上唐湊方面の戦鬪に薩軍が敗を取つたは、該地方の地理に精通した一次の攻撃が効を奏したものである、やまと錦の一次さんどで郷土人に名を知られた好角家であつた薩藩將兵の相撲道は明治御一新後になつても旺盛を極はめたもので東京市ヶ谷兵學寮に在寮中の薩藩將士の角力は大に振ひたちて、面白き勝負を見せた多數の取的中最も異彩を放ち勝負に興味を湧かしめたのは、山本權兵衛、松下助四郎、山田直次、鮫島四郎、伊地知堅介、土師正之進、安樂清助の諸士であつた、松下助四郎は明治戊辰の役三番隊に屬し明治四年陸軍歩兵少尉に任じ明治五年の關西九州行幸に近衛供奉隊の旗手を勤め十年役薩軍に従軍した上荒田郷中の出身者伊地知堅助は戊辰の役北越に戦ひ明治四年近衛軍曹となり十年役薩軍に従軍した紙屋谷郷中の出身者、山田直次

は新屋敷郷中の出身、眉目清秀の好男兒安樂清助は喜入郷の出身後の警視總監の安樂兼道、山本權兵衛は新屋敷中の出身者、權兵衛の角力振りは覇氣滿身に横溢して手取の巧みなこと群を抜いて松下助四郎とは互角で權兵衛と安樂清助との取組は兩者とも體軀に於ても相齊しきものあり技も同様巧みで、取り組みなら容易に躰を動かせなかつた、見物人をして片唾を吞ませて、其間電光石火の早業によつて勝負が決されたが、面白い力業を見せたものであつた、明治の御一新と共に大内山に角力道が振興したが、それは參議の西郷南洲先生が宮中の大改革を斷行して天王の常侍に長袖者流の公卿の外に剛健質朴の田舎武士を簡拔して侍從に補した、この特選を蒙つた田舎武士は薩藩の高島鞆之助高城十次長藩の有地品之充、肥後藩の米田虎雄、舊幕の山岡鐵舟の一騎當千の剛の者ばかりで天皇に常侍し宮中の餘暇には皇城の御庭にて相撲を取つた、又近衛兵の將兵も宮城御守衛に來て、盛んに角力した、其際には天皇出御ありて天覽麗しく勝者には御恩賞品あり、恩賜の近衛將校の如きは、光榮に感激して一入力業を勵みたものであるが薩人が朝廷に角力するは、古昔、大隅隼人阿多が朝廷を守衛し禁庭に角力し先業を復活した

よるなものであつた、薩藩の相撲の技が古く大隅隼人、阿多隼人の禁庭相撲に藍觴して天下無隻の力士を出だし、島津氏薩隅日三州を領知して以來、相撲を薩藩數戰中の武藝の一つとし、他の御關狩、馬取駒取、水泳、船漕、山坂歩行と共に獎勵し、殊に徳川幕末天下多事の秋、一層斯業を振作し、以つて藩兵の筋骨を鍛ひせしめ、明治戊辰役の實演に薩藩の強兵の實を擧げたことは説述した、次ぎは徳川幕府治世の寛永元年の初代横綱明石志賀助以來興行の江戸回向院の本相撲即ち職業相撲の力士中、我が薩藩出身の力士に就て聊か述べよう

一、安永三年四月の番付中

(東ノ方)

大 關(江州) 比志嶽志賀右衛門
關 脇(備中) 雲井川 兵太夫
小 結(薩州) 出水川定右衛門
十兩前頭(薩州) 二十山定右衛門

(西ノ方)

大 關(奥州) 駒ヶ嶽儀右衛門
關 脇(雲州) 釋ヶ嶽雲右衛門
小 結(仙台) 關ノ戸森右衛門
前 頭(同) 達ヶ關森右衛門

同 同 (薩州) 卷戸 金右衛門

(以下略)

同 同 (薩州) 御崎山 門太夫

前記二十山は十兩前頭の三枚目卷の戸は六枚目、御崎山は八枚目なり

一、安永四年十月の番付中

(東ノ方)

大 關(九州) 大木戸 源太夫
關 脇(江州) 比志嶽志賀右衛門
小 結(南部) 黒岩 川右衛門
前 頭(同) 石見瀉丈右衛門
十兩下前頭(薩州) 御崎山 門太夫

(西ノ方)

大 關(江戸) 虹ヶ嶽柚右衛門
關 脇(仙台) 伊勢海億右衛門
小 結(同上) 達ヶ關森右衛門
前 頭(備前) 方海 捷右衛門
(以下略)

前記御崎山は十兩下前頭の十六目に陥落した、それより安永五年より同九年まで、天明元年より同六年に至る番付中に薩州出身の力士名を認めない
一、天明七年四月の番付中

(東ノ方)

大 關(久留米) 鷲ヶ濱音右衛門
 關 脇(同) 小野川 喜三郎
 小 結(阿波) 鬼面山 谷五郎
 前 頭(小倉) 筆ノ海金右衛門
 十兩前頭(薩州) 廣瀬川葉右衛門

(西ノ方)

大 關(江戸) 九紋龍 清吉
 關 脇(仙台) 谷風 梶之助
 小 結(雲州) 柏戸 勘太夫
 前 頭(仙台) 沖津風梶右衛門

一、寛政三年霜月の番付中

(東ノ方)

大 關(久留米) 小野川 戈助
 關 脇(伊豫) 陣幕 島之助
 小 結(久留米) 九紗龍 清吉
 前 頭(同上) 鷲濱 音右衛門
 前 頭(薩州) 梶ヶ濱力右衛門

(西ノ方)

大 關(仙台) 谷風 梶之助
 關 脇(雲州) 雷電 爲右衛門
 小 結(同上) 柏戸 勘太夫
 前 頭(仙台) 宮城野 錦之助
 (以下略)

前記薩州力士梶ヶ濱力衛門は前頭の四枚目の地位を領し活動した

寛政三年六月十一日曉六ツより江戸城竹橋御門外御春屋に於て徳川將軍家齋公の上覽相撲が行はれた勸進元は鍛山喜平治添役は伊勢海村右衛門、東方の大關は小野川、關脇は初代の陣幕、西方の大關は谷風、關脇は雷電なりと註される、當日東方前頭四番目の薩州力士梶ヶ濱力右衛門は西方前頭筆頭の江戸生の出羽の海と取組んだ行司は木村庄之助であつた、兩力士は互角の勢ひを以て寸分の隙を見せずして肉弾相うつたよく相戦つたが遂に梶ヶ濱のツメの手が極まつて致敵出羽海を土俵の外に投げつけて團扇は梶ヶ濱に揚つた、眞に力の籠もつた龍攘虎撃の力業を發揮した當日第一の好取組の大角力であり薩州力の氣焰萬丈とも形容すべきであつた

一、寛政六年六月三日の番付中

(東ノ方)

大 關(久留米) 小野川 戈助
 關 脇(伊豫) 陣幕 島之助

(西ノ方)

大 關(仙台) 谷風 梶之助
 關 脇(勢州) 鱈ヶ嶽 源太夫

小 結(薩州) 千歳川 庄太夫
 小 結(雲州) 雷電 爲右衛門
 前 頭(薩州) 梶ヶ濱力右衛門
 前 頭(備前) 龜渡 岡右衛門

三年前の寛政三年將軍家の上覽相撲に勁敵を屠つた薩州力士梶ヶ濱も寛政六年の番付面には陥落して前頭最下位に名を列らね餘喘を保つといふ哀れさ、相撲こそは實力の外に頼むべきものもない前記安永三年四月の番付中東方小結三役の地位を占めてゐた出水川定右衛門は初代の出水川、我が薩州出水郷米の津生れで出水川といふ相撲の手を工夫し始めて、此の手で勁敵を屠つた天下に隠れなき名力士であつた、而して寛政七年より同十年に至るまで四ヶ年間の番付面に薩州力士の名なく寛政十一年の二月の番付中

(東の方)

大 關(勢州) 廣原 海浪右衛門
 大 關(勢州) 雷電 爲右衛門
 關 脇(肥後) 不知火光右衛門
 關 脇(同上) 千田川 吉五郎
 小 結(庄内) 花頂山 五郎吉
 小 結(同上) 稻妻 咲右衛門
 前 頭(丸龜) 平石七右衛門(以下略)

(西の方)

(以下略)

とある東方の十兩前頭十二枚目に薩州鍋ヶ崎源治といふ名のもものが列らつてゐるが後にも名を爲さなかつた其他薩州谷山生れて相撲名を三國山といふ剛力士あり足の甲一尺ほどもありしとの傳説がある、いづれの時代の力士なるか判明せぬ安永七年の江戸大相撲の番付中の十兩力士に三國山兵太夫といふ名が出てゐるが生國は江戸とあり、谷山生の三國山とは別人であらう、徳川幕末文久の頃より元治、慶應に亘り我が薩藩出身の江戸回向院相撲に逆鋒や山分等の如き名力士あり又藩主お抱の出雲人日の下開山横綱陣幕久五郎あり天下無敵の剛のもの様であつた事は説述したが、明治の御宇に至り我が舊薩藩から横綱西の海を筆頭に高千穂、逆鋒等の名力士を出し初代横綱西の海に次いで二代の西の海及源氏山の二力士とも力士最高の横綱を張り且角力巧者の逆鋒あり薩州力士の氣を吐いたことは淵源ある薩摩相撲史に特筆せねばならんことでのこの筆の序でに薩藩出世力士名の由來に就て二、三の事を述べよう、由來力士に山、川、海等の名を附けるは、地理、歴史に胚胎して其の出身地の地名の山、川、海、海の名稱其他の土地名を取りて其出身地を代表してゐることである譬へば西の海で西陲の雄藩たる薩州の廣海たる西の

一五、西郷家と使用人家僕

西郷家の使用人、家僕の事に就て若干述べよう、南洲先生の家に事へし人には、永田権兵衛、熊吉父子あり、父子二代の奉公譜代郎黨なれば、之れ丈西郷家に關涉あるを以て流布本の西郷傳記には、永田熊吉配役の一人者として其名が出で居る次第だが、南洲先生には其他にも、二、三の使用人家僕が事へて奉公の誠を抽んでた、慶府近郊谷山生の竹内矢太郎の如きも其一人であるかれは昭和三、四年の頃まで在世し谷山福元野頭の柴折焚く家に天壽を終へた、本文の執筆者は彼が世にありし日度々彼の廬を叩いて眞率偽りなき彼の談片を聞いてはノートに書きつけたが、下記は彼の談片である、私矢太郎は安政三年辰の四月二十九日を以て、谷山郷の在家福元の小字野頭に生れ、十四歳の時、武村の西郷様のお家に下人奉公に出て、十ヶ年間勤続し、明治十年戦争の翌十一年九月御暇を頂いて谷山に歸りました、秋が始めて西郷御邸に事へたは明治三年頃からと覺へてゐます其頃の西郷家のお家庭といふはお家長様が先生(南郷翁)に御夫人の様子様

御長男の寅太郎、次男の午次郎、三男の酉三の三人御兄弟、戊辰役にお戦死の吉次郎様の御後室園子様御長男の隆準、令嬢のみつ子様の御兄妹、先生の御末弟小兵衛様御夫人の松子様御令息の吉河口雲蓬様の惣勢十三人の大家族の御世帯でありました、島で御生誕の菊次郎様は年若いお身を以て萬里も隔てた米國といふ外つ國に御遊學中で、暫らくして武やしきにお歸朝になりました、明治六年先生(南洲翁)が陸軍大將に參議の重きお役を兼られて、東京御在中には、私にもお供を仰付られ東京のおやしきに事へて居ました、當時私は十八歳の小者でした、當時の先生様のおやしきは東京日本橋區の小綱町の長屋でありました、當時私の給金は月に三圓を頂戴してゐました、この住宅長屋には、小者の私の外に東京人の兒玉勇次郎鹿兒島城下生れの小牧新次郎、親の権兵衛さん以來父子二代奉公の永田熊吉さん、伊集院生れの田中與助、谷山宇宿生れの市の七人が先生に事へて先生の御身邊其他日常の炊事雜用を承りました、婦女は一人も御使用なく男子ばかりの大世帯でありました私ども奉公人は西郷丸といふ巨船に乗つてゐる氣持一杯で愉快極りなき御奉公をいたしました、此の年の五月五日といふ日に宮城炎上の御事があ

りまして先生には取り急かされて御衣服を改められ即刻宮城に御参内でした、かの熊吉殿が御供を勤めんため先生の後を追ひかけましたが追ひつかず宮城の御門は閉ちられて居て悄然として小網町の長屋に歸つて來ました、小網町の長屋には偉らい方々がお見へになりました、其中で岩倉様は何時もお馬上で威風四邊を拂ひ御入來になりました、さて此の年の夏頃から朝鮮征伐と何とかで世の中が穩かならぬ風聞を小耳に挟みてゐましたところ先生には其御事で近衛都督、参議のお役を罷められ、十月二十八日東京を御出發鹿兒島に向はれ、私もお供を勤めました一人でした、先生には四、五日大阪に立ち寄り鹿兒島の平の出身の有川七之助様(海軍少將有川貞白氏先考)方に御滞在、數日ののち大阪に別れを告げられ、夫より長崎に出で茂木港より御乗船、阿久根に船を着けられ、其處より御上陸市來湊に御一泊の上十一月十日に久々振りで鹿兒島に御到着即時武のおやしきに入られました、それ以來先生には、西別府のお假屋の島に野菜を作られたり、諸方の山々の狩にゆかれたり、甲突川尻、新川筋の漁獵に参られたり、おやしき内御家居の時はお栽培の萬年青に水を注がれたり、鑿匏を以て木履下駄を製つて御親戚の椎原

様や、お家族へ配られたり、お手細工は見事なものでした、御居間の小座敷の前庭に土俵を築かれ、お舎弟の小兵衛様や、菊次郎様、これに小者の私をも御呼び出して、數番の角力を所望されたり、相撲の師匠は阿波生のもと力士、千石馬場通に藍玉商を營む岩船といふものでした、先生の御狩の御供中に最も壯快豪爽なことは、先生が出羽のお家老の菅様と申す方を内の浦の狩倉に御案内し猪を狩られた時でした、先生の御一行は、木立も茂けき深山の奥に一泊されましたが、其夜、焼酎に山のものを肴に清宴が開かれ、先生等と御一緒の新屋敷の近藤金吾さんといふ仁が、劇かに飲まれて満顔熟柿の如く赤々となつて大に謠ひて數度踊られました、先生も出羽の御家老様も愉快トや／＼山中の酒宴哉と申されて上機嫌でした、また、明治八年の四月頃、先生の栗野の狩しにお供仕りました御宿泊所は民宅でしたが突然暴風雨襲來して、難をキノコ山に避け二、三日間はこの地に御滞山されたが、先生は消閑のために、晝夜揮毫され私へも少し許りは字を知つておけど申され私には虎狩の記や、其他六ヶ敷ものを書いて給ひました、亦、先生には明治九年の師走の六日頃から小根占、田代、大根占方面の狩に参られ鹿兒島よ

り私一人御供を仕りました、お宿所は小根占の海岸平瀬十助ドン方でした、十日間位も山々を狩り立てられました、邊見十郎太さんや、御舎弟の小兵衛様も参られ、先生に御面談あつて、先生は鹿兒島に歸られ、武のおやしきに御一泊、翌日、御厩舎跡の私學校に入られ、明けて正月御出陣になりました、私も先生に御供仕り、八日間熊本二本木の本營にゐましたところ菊次郎様が高瀬の戦に負傷されたので私は菊次郎様の許に急行し菊次郎様を背負ひて川尻病院に参り菊次郎様の御介抱をいたしました云々、世の流布本の西郷傳記の多くは南洲先生が征韓論のため議相協はず官を罷めて歸國の途に上らるゝや數日大阪に立寄られ夫より鹿兒島に直行された如くに物されてゐるが前記矢太郎は先生には大阪より長崎に出でられ茂木港より阿久根に着船し市來湊に一泊鹿兒島歸着の道程を語つて居ることは、注目に値すべきであらう

二六、南洲先生の歴史的感興物語り

南洲先生には、明治二年の冬、上ノ園町の舊栖より新たに武村に居をトし翌三年一月鹿兒島藩の参政を辭し更に藩政顧問に擧げられ、翌四年勅旨を奉ト重要國策協定のため上京し同月二十五日には鹿兒島に歸り次いで四月上京し参議に任せられ、越へて五年夏聖上の關西九州行幸に扈從して鹿兒島に來られ明治六年五月十日陸軍大將に任ト近衛都督を拜し参議を兼ね、けんく匪躬の節を致し一意國家の奉公に餘念なかりしが、此の年征韓論問題起り、先生の議相容れられず、十月二十五日参議、近衛都督の重職を罷め十一月十日鹿兒島に歸臥され「武村吉」の恬淡なる境地に悠々自適以つて消閑の際に、意外にも明治維新第一功臣の身を明治十年二月十七日私學校黨軍の爲すがまゝに任せ、最後の別れを鹿兒島に告げ出發されるまで、先生の武村家居の年數は前後通トて約五ヶ年間位であつたらう、この五ヶ年の家居に先生を訪問した天下の群衆に就ては、歴史的感興の物語りが少くどしないが、茲に其若干を述べやう、記録の筆頭は、出羽鶴岡城の

第十三代の城主酒井出羽守忠篤侯を推さなければならぬ、忠篤侯には明治戊辰役歸順後の明治三年、西郷南洲先生の高風を欣慕の餘、薩州遊學を思立たれ、家老、近習、藩士七十余名を率ゐ、其年の十一月出羽城を出て十三日横濱より汽船に控乗海路を取て二月十日鹿兒島に着港され、藩吏の案内にて御供衆とともに御城下海岸(今の易居町)なる藩主のお茶屋に旅装を解かれたのであつた、而して忠篤侯は東修を南洲先生に納めて教へを受けられ、藩士七十餘名は薩藩の軍師に就て洋式練兵を稽古するにあつた當年十八歳の若かさ酒井忠篤侯は入慶早々一日、南洲先生を武村の邸に訪問あり、侯は入慶の挨拶より、先生に師事して修養せんことより、藩臣七十餘名の洋式兵學研究に就ても援助を仰ぎたい旨を懇囑された其日南洲先生には慇懃に忠篤侯を客間の正座に請して鄭重なる挨拶の交換あり、先生夫人絲子は、座に入て侯に茶菓をすすめられた、聽て侯は鄭重に別を告げて座を起たれる、南洲先生は侯の後より侯を表玄關まで見送り直に踵を後庭の瀬戸より西郷家本門前入口に廻らし、其處に土下座して、玄關より出て來られる忠篤侯を迎送された、先生の其態度の敬虔謙讓なることは我が島津藩主に對すると同様の

臣禮を執られたもので、斯くて南洲先生は酒井侯を家門に迎送して本屋の居室に歸り夫人に向はれて、今のお客來に茶菓の接待には頗る恐縮赤面せざるを得なかつた、お客は出羽一國の御殿様とや我に取つては貴賓の御入來で禮讓を正さなければならぬ、本來貴賓の接待には、先づ貴賓より御茶一服と所望ありし時に茶菓を献ずるを例とするものである、殿様の如き貴人の侍べらるゝ座に貴人よりお茶一服と所望ありて、始めてお次の間より御茶道坊主が茶菓を捧げ出でて來ることは、芝居で見、講談でも聞くことであらう、先刻酒井様の御前に茶菓子を持參せしとき手振りして、これを控へよと合圖をなせしが、其意旨が徹せなかつたよと語られました、絲子夫人より近頃になき權貴の方の御客來とて、態々小者を街頭の菓子店へ走らし、よき菓子をこうて御前へ持參しましたが、お手振りも氣付きてゐました、そのお手振りは、菓子買ひのため、時を移つたれば、急ぎお菓子をおすゝめ申せどのお合圖なりと思ひ侍べりました云々どあつた、南洲先生の居常禮讓を重んぜらるる事かくの如く進退節度に注意の深かつたこと大概この類であつたさて南洲先生の門に贅を取りて懇なる教を受けられた酒井侯は翌明治四年三月南洲

先生の出京と共に鹿兒島に別れを告げられ東京の藩邸に歸られたが、翌五年南洲先生の懇切なる勸告に従ひ兵學研究のため獨逸に留學され、明治十二年に至りて歸朝された、しかして恩師の南洲先生の死は、獨逸の學窓にこれを聞かれたのである、當時侯の胸底の感慨いかなりしか、人知れず暗涙に咽びられたであらう、侯の鹿兒島遊學中、南洲先生は侯のために明治二年の春藩の參政となられし時、孤島幽囚の當時を追懷して

世上毀譽輕似塵、眼前百事僞耶眞、追思孤島幽囚樂、不在今人在古人
 と賦された七言絶句を揮毫して呈上された、見事の筆跡で、此の詩幅は今日酒井家に珍襲され同家々寶の一つである、なほ前記七十餘名の出羽庄内藩士は入覽以來夫れ一〇班を分ち、薩藩の兵學寮に入寮して英式操練法、雷銃操法の講義を聞きたり、又は御城下の練兵場にて小隊運動の稽古を爲したり、毎朝天保山の射撃場に出て、實彈射撃を練習したこれら一切の兵學教授、練兵の號令は軍師の村田勇右衛門後の村田銃發明家の陸軍少將村田經芳男が其任に膺つた當時薩州の兵隊は四大隊より編成され其四大隊は城下隊より成り各郡城兵を合せて七十大隊となつてゐた右四大隊は隔日大手御門前の練兵場で

二大隊宛の運動二、三日間を以て散兵とした若き出羽侯はお城下四大隊長を旅舎に招かれ、清宴を張られ、陽氣に夜更くるまで歡談を交へられたこともあつた、明治四年の春勅使岩倉公の下覽あり一日、薩州の四大隊大手門前の練兵場で一齊操練を施行した岩倉公も來場あり庄内一隊も大隊列に加はつたが隊列整齊殊に銃劍術の如きは薩州兵も遠く及ばなかつたと軍師の村田勇右衛門は月旦した、此の年二月廿九日七十餘名の出羽庄内隊は學課實地とも優秀の成績を收めて鹿兒島に別れを告げ出羽へ歸つたのであつた

二七、他縣より年少慷慨の士來覓私熟 して自ら名乗る四西郷

武村に「武村吉」の南洲先生を訪問し人懐しき先生の風貌に接し感激して先生のために胸中に死を誓ふた年少慷慨の士は少くなかつた、其訪客の江州の大海原尙義、大東義徹、備前の杉山與三郎、小倉の加藤海藏、金澤の島田一郎、豊後の矢田宏、東奥の佐瀬熊鐵等の如きは世の耳目を聳ばしめた青年志士で中にも大東義徹は近江西郷、杉山與三郎は備前西郷、加藤海藏は小倉西郷、小倉處平は飢肥西郷と呼稱され、ただでは濟むまどき面魂の持主である、お伽話の日本一の勇將の桃太郎さんは桃から生れたと頭に刻まれてゐるが前述の各西郷は武の西郷さんから生れた西郷と銘打つてもよからう、そして其西郷にも小があつた、其一例を云へば隈州加治木郷の小濱半之丞(後に氏興)の如きも加治木西郷の名を得てゐたかこの加治木西郷は加治木郷限りの西郷で近江西郷の大東義徹が武村に南洲先生を訪問したのは、明治九年の五月である、本文の執筆者は明治三十三年の頃義

徹を麻布豪の寓居に訪ひて、當年の事を以てしたるに何等消息を語らず只だ人懐しき南洲先生から笥子の御馳走を振舞はれ旨まかつたこと丈より外に何にも話さなかつた五月と云へは鹿兒島では苦竹の笥の子の眞盛りであれば、南洲先生には居村の竹林より掘り立ての苦竹の笥の子を饗されたであらう、義徹は長香豊軀の偉丈夫で、南洲先生の風ぼうにも似寄つたところもあり近江西郷の名天下に博したものである、而して義徹は眞先に南洲先生の賊名解消論を主張して政府に請願した第一人者であつた、備前西郷の杉山與三郎は備前一國を脊負つて立つた備前西郷であつた、桐野利秋と深く相許してゐた明治十年役前には、西郷起たば、桐野起たばと西南の天地を睥睨し利秋とは靈犀相通するものがあつたらうされば政府に於ても與三郎を西郷桐野徒の備前一國の敵なりと見、彼起たば、直に彼を撃滅せざる可らずとなし、彼れに對するに高崎五六を岡山縣知事とし深く彼れに備へせしめた五六は舊薩藩の出身、明治維新以來桐野利秋等と共に國事に奔走し死生の間を彷徨した豪膽にして且つ機略に富んだ人物であつた、杉山も備前一國を脊負つた豪邁にして機略に長ト知事五六とは共通の手腕家であつた、彼我虚々實々の對策は

施されでわらう而して十年役の鎮定まで、備前の地には何事も起らなかつた次に佐瀬熊鐵に就て語る「佐瀬熊鐵は年少白面の慷慨の士で南洲先生の高風を慕ひ明治九年の始め遠く鹿兒島に來り先づ桐野利秋に頼つた、利秋は彼が未だ二十歳左右の若齡を以て遠く鹿兒島に來つた其熱烈さと其人と爲りが沈毅にして敢爲の氣象に富むを愛し彼を私學校の校外生として學ばせしめた彼は利秋の恩寵に感激して入念に讀書し志操の鍛鍊に餘念なかつたが九年の末に至り薩南の天地風雲穩かならざるものあり利秋は彼が年少の身を思ひ歸國を促がした彼は今にして去るは義にあらざとし歸國を悦ばなかつたが利秋の切々懇々たる訓誨に遂に歸國を決心して鹿兒島港より便船に搭乘した而して便船佐多岬に到つた頃十年役は爆發したのである熊鐵は明治十年役後沼間守一に知られて朝野新聞社に入り文章報國を以て任とした、後ち新潟新聞の主事に聘されその赴任に當り隅州加治木出身の年少記者枝元長辰を伴つた長辰は新潟新聞在社中に専ら文章を稽古し記者修業の効を積みて又熊鐵に縋られて歸京し報知、都新聞社に歷職し東都の新聞記者として名を知られ東都文壇の雄鎮矢野文雄夫人の令妹を娶り明治二十七八年戰役には新聞記者と

して晝夜活躍文章報國の任をつくしたが蒲柳の質遂に病を得て再び起つことを得なかつた佐瀬熊鐵が隅州生れの年少記者の枝元長辰を寵遇し東都の新聞界に名を爲さしめしはその少年時代に於ける桐野利秋の恩遇を懐ふ彼れに報ひしものとは熊鐵の自から云ふ處であつた熊鐵は近世書家として名高き佐瀬得所の長男であつて明治二十五年の頃病歿した一弟あり佐瀬得三と云ふた、本文執筆者とは明治三十年以來の交友であつた今は故人で當時彼が家には七十余歳の母堂健在して長男なる熊鐵の鹿兒島客遊當時の桐野利秋の恩顧を受けたことを感涙を垂れて物語られたものであつた尙同家では利秋の靈位を安置して冥福を祈禱してゐられた

二八 敬天愛人の信條は人種の差別なく外人にも注がれてゐた

鹿兒島在住の本學校の雇教師スケツプル(蘭人英語を教授す)コツプス(佛人佛語を教ゆ)の兩人醫學校の雇教師英醫ウキルスの如き洋人も度々南洲先生を武邸に伺候し敬意を表したもので、先生は彼等を客間に請して懇懃に接待し、歡談を交へ羈愁を慰められ彼等に好印象を與へられてゐる英醫ウキルスは明治戊辰の役、官軍に招聘されて戰時病院に勤務し多數の負傷兵を治療し其功績少なからざるものがあつた、後ち南洲先生の肝煎で鹿兒島縣に招聘され、鹿兒島學校に教鞭を取り病院の治療に従ひ民間の診察に應じ鄭寧懇切一般の親愛するところとなり、夫人も舊藩士江夏氏の女八重子を娶り男子を擧げた、南洲先生とは明治戊辰の役の戰場往來の知己であり交情當ならざるものがあつた而して彼は明治十年役前薩南の地風雲急なる時鹿兒島を去つて英國に歸つた彼が鹿兒島醫學校で教授した生徒はいづれも立派に業を卒へて、明治十年役には大概薩軍の軍醫と

して從軍し負傷病兵を治療してよく其任を果した、要するに鹿兒島醫學校は外人醫を招聘して十年役に於ける軍醫養成の爲に創設されたやうなものであつた南洲先生とウキルスとの分袖に就て次ぎの如き一齣の物語がある十數年前、帝國外交官の着宿であり後ち宮中入りをなした林權助男が英國駐劄の日本大使として任に龍動大使館に一同ゐたとき古色蒼然たる英國の古物記念館を參觀し風雅の薩摩焼(朝鮮焼又は高麗焼とも云ふ)菓器が陳列しあつて説明書が附いてゐる、權助男はその説明書を讀めば、該品は明治九年英醫ウキルスが多年住みなれし鹿兒島の山河に別を告げ故國に歸るに際し一入惜別の感を深ふした西郷南洲先生が餞別としてウキルスへ贈つた朝鮮焼即ち薩摩焼でウキルスが死後この館へ陳列された由緒が書いてあつた、權助男は明治八年來明治十二年頃まで南洲先生と同村なる武村の兒玉四郎太の家に寄食して鹿兒島に生ひ立ちため幻げながらも當年のウキルスの風ぼうは描き出すことを得武村の往時を追懷して殊に該品は大西郷の記念品でもあり、國際上の交渉もあり歴史的の参考品でありこれは日本へ返さなければならぬとて出品館へ交渉したが其結果權助男の所有に歸して今男爵家の家寶の一つとし

て襲藏されてゐる南洲先生の敬天愛人の信條は人種の差別觀念なく外人に對しても注か
れてゐるではないかまた先生には次の如き田夫漢と牀を共にされた一話が傳はつてゐる
南洲先生には、明治十年戦争の爆發直前、愛犬を曳いて、隅州は、小根占、大根占、山
代方面の山々を狩り立てられた、當時の先生の宿所は小根占海岸の旅舎平瀬十助方であ
つた、十助は先生より少こし一、二年若かつた素朴義理一徹の男であつた、先生と十助
とは、先生が明治維新前國事に奔走されるころより面識の間柄であつた、十助に一人の
娘あり、名をお舟さんと云ふた、この娘さんは、父十助が小廻船を新造して其の進水式
を擧げた日に生誕したものだ、十助はその命名を南洲先生に頼みけるに、新造船の進水
式當日に呱呱の産聲を揚げた娘さんトヤ、船にゆかりがある、お舟さんと命名すとあつ
た、十助夫婦は天下の大西郷様を娘の命名親御としたとて欣喜雀躍した、そして十助に
は男が生れなかつた、南洲先生はよき女婿を世話すと申され、數日十助方に滞在の時
ある十助の親族を物色し、一人の男子を見立て、これをお舟の婿養子として媒介の役を
執られた、その養子名を新兵衛と云ふて、養父に劣らない志操堅固の好漢であつた十助

は小根占から鹿兒島に出て来る毎に武の西郷邸に伺候して寒暄を叙した、南洲先生は十
助を居間に請して一泊して歸れと勧められ、十助一泊の時は先生の居室に布かれてあつ
た大熊の皮の上に先生と共に枕を並べて臥し兩者の間に四方山の話が交換されるが中
にも狩獵話がはづんで深更に及んだものだつた

二九、上村彦之丞氏先生の一言で危き 命助かる

南洲先生が征韓論後、決然衣を拂ひ、郷里鹿兒島の武村邸に歸臥されると、先生と進
退死生を共にせんと、腕を扼して東京より鹿兒島に馳せ歸つた少壯血氣の輩が少くなか
つた、中にも海軍兵學寮の山本權兵衛や、上村彦之丞の如きは密かに東京を脱出して歸
郷し武村の邸に南洲先生を伺候し所信を披瀝せるに、却つて先生の叱咤を貰ひ切々懇々
に戒諭されて歸京し、再び學に就て切磋琢磨途に志成りて武將の極官たる海軍大將の

位に出身したるは一に曩の南洲先生の懇々切々たる子弟愛の訓戒が與かつた處である
 う、前記上村大將の南洲先生往訪に就いて、同大將は生前一夕本文の執筆者へ次ぎの如
 く語られてゐる、明治六年征韓論の起つた當時俺は今の海軍兵學校の前身なる築地の海
 軍兵學寮の生徒で南洲先生を始め村田、桐野、篠原の諸先輩が挂冠して歸郷されたど
 聞いて、薩藩出身の近衛將校等が南洲先生の後を追つて東京を去つた、俺も先生の許
 に投せんと志し九年の冬、潜かに兵學寮の寄宿舎を脱出した、時に身に衣るものは、
 紋付綿入一枚のみであつた、大事な旅費とても僅かに大阪に至るまでしかない、道は
 東海道五十三驛の舊道を取り、宿泊は木賃宿その他神社や、寺院の軒の下に假寝の夢
 を結びて、徒歩をつゞけ、濱松から板橋附近までは山道を間行して野宿した、この時身
 に着けた紋付綿入は雨露に晒され、着ながら日光に乾かすなど困難して京都伏見に辿り
 着き此處よりは淀船にて大阪に下るを得たとして大阪に着いては些やかなる下等の旅舎
 に入つた、時に裏底には一文半錢もないが、大阪には舊薩藩出身のキレ者の五代友厚先
 生が繕居して豪勢な門戸を張つて居らるる、此の先生に頼つて路銀を得んと心算を立て

て弊衣垢面の俺が漸く工夫して友厚先生に面接するを得て路銀を恵まれんことを懇請し
 た先生は兵學寮生の身を以つて東京を脱出して鹿兒島に馳せ歸るとは學生の本分をわす
 れたる行動だ、南洲先生においても其所業をば賞賛はされまじく思はる、路銀の用立御斷
 り申すとあつた、事茲に至つては進退極まり殆んど他に詮術もなく泣面して旅館に歸つ
 て思案にくれてゐると、旅館の女中が俺の部屋に来て、今し小者がこの服紗包みを持參し
 て此處に鹿兒島の書生がゐる筈なればこれを其書生へ交付してくれよと述べて立ち去つた
 と話した、俺は其服紗包を開けば奉書紙に水引をかけた包物であるが、それに何等記名
 がない、全くの白紙の包物だ而して其中を改むれば少からざる紙幣か折り重なつてゐる
 俺はこゝに無名氏の合力を得て踊躍して鹿兒島行の汽船で鹿兒島港に着し直に上陸して
 大門口の錢座(もと料亭萬勝亭今の玉村亭の所在地)に休憩し、夕陽は武ヶ岡に落ち、暮
 色蒼然たる頃武村邸に南洲先生を訪問した導かれて座敷の中の板縁を通過すれば一室に
 は邊見十郎太さんが二、三の壯士と黒茶架を擁して飲まるゝ狀を目撃したが十郎太さん
 がトろりと俺に背を投げられた、元來十郎太さんは爛々たる眼光の持主であつたが、此

日は殊に閃々として輝かやいたやうに思はれたのである、俺は導かれて先生の居室に入つて先生に歸郷に就て一伍一什をお話申した、先生には、一言も答へられず、只煙管の吸口の方にて眼球の外部を表面より表面へグル／＼と撫で廻はされる、先生は難問題に遭遇される時は、眼球の外部を煙管の吸口にて撫で廻はさる癖があつた、今、先生はこの特有の癖を表現されたのである、而してかく口煙管を撫で廻はして除ろ口を開かれた、上村さん、戊辰役後、諸隊を解いて、殊に年若かいものどもに、陸軍教導團（陸軍士官學校の前身）や、海軍兵學寮（海軍兵學校の前身）に就學せしめたのは、決して今日己が處に來いといふ意ではない、露西亞の東方經略の大抱負を知つてゐるが危機は必ず日本に到來する日があるトや若いものどもの就學は陸軍なり又は海軍の將校たる資格を作り、國家有事の秋に身命を擲ち國家に御奉公させんためである、然るに何ぢや其本を忘れて今己が許に馳せ來るとは、その意を得ないことトや、一刻も早く歸東して學問を續け將來有爲の海軍將校たれ、放ひに兵學寮を脱出したものが、復校の事はなか／＼容易ならぬであらう、川村（時の海軍大輔川村純義）へ宛た復校依頼狀を書くから川村の許

に持參せよと申された、俺に情理併せ兼ねたとも云ふ如き大西郷先生の慈腸には、何で一言を陳ずることが得やう、只感極まつて首を垂れるのみであつた、かくて先生に別を告げて座を起せば、先生は兵學寮脱出の俺を玄關まで送つて來られ、何時歸るか、用があるから出發前に今一度來いと云はれた、先生の意を了して新照院の親族の家に至らんとする途中に、先刻先生の家に居た親友が俺の後を追ひ來りて云ふには先刻南洲先生が再び來いと云はれたは、再び來るには及ばぬから速かに此の地を去るべしといふ眞意トや先生の言は畢竟君が生命を救はんがためである、若し然らざる時は君を殺さんとする人新照院町の親戚の附近に徘徊する、唯先生再來の一言にて殺さんとするものも猶豫するであらうと注意を與へてくれた而して俺は新照院の親族（前田家）の家に至れば親友の言の如く家の周圍に俺を殺さんとするものが徘徊して、親族では俺を納戸の押入の中にかくまつてくれた、暫くすると親族の門前に上村彦は殺すな、彦は武の先生の所に參つて先生が用があるからまた來いと云はれたとある、殺せば先生の意に背くことになるから殺害は猶豫せねばならぬと聲高かに話し合ふを耳にして間もなく門前の人々も影を沒

し去つた足に於て俺は、南洲先生の慈愛と甚深の注意とを興へられしたために、私學校黨の刃を免れて歸東し兵學寮に復校することを得たのであつた、而してこの南洲先生の慈愛と大阪で俺に路銀を贈られた無名氏の特志とは終世忘れ得ざるところである、俺に路銀を興へられた無名氏は誰れなる乎俺が兵學校を脱出して鹿兒島への途上大阪に立ち寄つて路銀に窮し居れる憫狀を知れるは俺が無心してはねつけられし五代友厚先生一人あるのみで俺はその無名氏を五代友厚先生なりと確信して、今に先生の義侠に感激してゐる。

三〇、明治十年役の勃發より武屋敷焼失まで

明治十年の役前の勃發前、即ち危機一觸の非常時に於ける武村西郷邸の風景に就て若干述べよう明治九年は師走の月の一夕新屋敷郷中の汾陽五郎右衛門家に内神祭あり、當夜招かれた私學校黨の勇士が酔酩に乗ト海陸軍所轄の火藥庫を襲撃して彈藥を掠奪した變あり、此變の直後、武村の私學校の廣庭に於て彈藥の配付あり玉藥の配給を受けた私學校の壯士は、日々寒風吹き荒ぶ武岡の老松を標的として小銃の射撃を行つたが銃の音が非常に喧しきかつた、これと同時に私學校の壯士が、一組五列の編成を以て凡そ五十歩の間隙を取つて西郷邸の周圍を巡邏し蟻も通はさない堅固な警戒を爲した、殊に夜間の如きは警邏の壯士が提げた籠燈の蠟光が螢光の飛び交ふにも似て美しき螢狩の繪巻物を披けた如き風景を呈した、其時武邸附近ではこんな秘話が次から次へと傳はつた東京から歸つて來てゐる中原尙雜等の一味の黨が火を武村西郷邸附近の民家に放ちて西郷邸に延焼せしめ其混亂に乗トて西郷家に闖入し南洲先生を暗殺せんとする陰謀が暴露され

たゞめ私學校の壯士達が晝夜西郷邸を巡邏警戒を嚴重にするものと武町を中心とし其附近では人心恟々夜も圓かな夢が結ばれないといふ光景だつた、而して私學校黨壯士の警戒は二、三日にして解除された、是より先き南洲先生には家僕竹之内矢太郎氏を従へ小根占海岸の平瀬十助の家を根據とし小根占、大根占、田代の山々に出獵中に私學校黨の彈藥掠奪の報に接し末弟小兵衛等に促がされ武村の邸に歸られたが、先生の身に變わらんことを憂悞し前述の如く私學校の壯士の晝夜の武邸の警戒となつたが、武邸に歸つた先生は一兩日にして武邸を出で屋形馬場の御厩舎の跡なる私學校の本部に入られ武邸の警戒も解かれた、而して私學校徒の一萬五千の將兵は南洲先生を擁し大口、伊集院西北二道に分れ二月十五、十六、十七日(明治十年新曆)の三日を連ねて肥後路に向つて進發し二月廿一日には前軍熊本鎮台の斥候兵と開戦して戦線は次第々々に擴大された二月二十七日の夜のことである武村の西郷邸に留守居の南洲先生の愛犬數頭が突如として訴ふるが如く泣くが如き聲へで吠へ叫びてやまなかつた、西郷邸の留守居の家族達を始とめ近隣の人々も先生愛犬の悲聲を聞いて這はたゞ事ならず何んらかの知らせではない

かどさゞやき合つた果然の其日は先生の末弟なる陸軍一番大隊一番小隊長の西郷小兵衛が肥後高瀬川の南に戦ひ敵彈に中り三十一歳を以て勇ましき最後を遂げたといふ報が、後日、武の西郷邸に達したのである、明治十年役の戦ひ關なる五月は四日に薩將中島健彦、貴島清の率ゆる行進十八中隊、振武二十中隊奇兵一中隊が突如として前戦地より鹿兒島に來襲し行進隊本營を吉野帶迫に置き兵線を磯濱に連絡せしめ振武隊の本營を伊敷に置き兵線を武村より谷山に布き奇兵隊を常盤、西田間に配布して其兵凡そ四千三百人餘と註され、鹿兒島全街は、官薩兩軍のために兵火の巷に化されんとした此戦狀を目撃した鹿兒島全街居民は狼狽荷擔して村落に避難し全街を擧げて家屋皆虚となり武村の西郷家の留守居家族も一里半餘の西別府の拘地に引揚げられた而して鹿兒島に來襲の薩軍は砲臺を要地の催馬樂の丘桂山(鼓川)山王丘、武丘に築いて毎壘に巨砲數門を置き晝夜彈射を行ひ六月廿二日には官兵催馬樂の壘を拔きて又其翌日は薩軍に奪取されし等、其他吉野磯濱に亘り連句交戦あり廿三日には官軍の隊長永田貞伸少佐三中隊の兵を提げて武村を進撃し敗衄して貞伸之に戦死した翌廿四日には官軍大擧し、西南の薩壘を陥落せ

しめんどし甲突川の四橋より並進した、薩軍之を半途に逆へ撃ち激戦良久して薩軍敗色あり官軍勢に乗じて進み唐湊武村の民家に火を放つた武村は全く砲煙火焰に包まれ、明治二年以来の西郷南洲先生の住宅も焼失したのであつた、時に午前十時頃、豪雨頻りに降至りて戦袍を撲ち砲銃の音は雷鳴と相和し凄壯を極はめ官軍は焼跡を利用し武丘砲臺に肉逼し一齊に攻撃を加へ遂に壘兵を官兵支ゆる能はず砲を土中に埋め壘を放棄して去つたこの戦鬪に山本権兵衛の家元なる陸軍大尉山本吉藏も奮戦之に死したものであるた焼失後の武の西郷邸を見るも跡形もなく焦土に歸し、只残るは三樹の巨松と相撲土俵の原形ばかりであつた三樹の巨松には無数の彈痕より啼涙の如く樹脂が滴り垂れ、土俵の上には寫眞の額縁や、硝子の破片が散亂してゐた、そして土俵の側には薩軍が築いた土壘が残つてゐる、この土壘を築くには其土俵を取り毀ちて補助材料とするに最も適宜の方法なるに薩軍が敢へてこれを爲さざりしに薩摩人の心の奥床かしさがこゝにも窺はれる等傷心の種ならざるはなかつた、現在の武町西郷侯の家は、十年戦役に焼失前の家屋の舊模も多少取入れて建築されたるため往時の舊觀が偲ばれるのである、而して十年

戦役後の西郷家の家風といふものが眞個に模範的であり世人が取つて學ぶべきもの少くないのである明治八、九年頃より鹿兒島の縣學に北條竹堂といふ土佐出身の學徳兼備の漢學の先生が傭聘され教鞭を執り南洲先生を始め大山縣令等の先輩に器重された、而して十年戦役の勃發に當り、縣令大山綱良は何事かを畫策し竹堂に機密書を携へ東上せしめたが不幸途中で捕はれ長崎の獄舎に繋がれ後ち放免になつて鹿兒島に歸來した、武の西郷家では學徳兼ね具ふ人格者たる竹堂を家庭教師に聘して寅太郎、午次郎、酉三（南洲翁遺兒）隆準、みつ子（吉次郎遺子）小吉（小兵衛遺兒）の子女達の教育を託された子女達は竹堂に懷づみてよく其教へに遵つた、其の後三年份にして竹堂は鹿兒島を去り東上することになつて西郷家に訣別を告げた最も竹堂に懷みた當年六歳の酉堂の袖を攬みて泣いて分袖を惜みたが、竹堂も亦双眼に感涙を宿らして「時ならぬ五月雨別れかな」の一句を讀んで、子女達の書齋なる小座敷の道路に面した離牆の傍に小松の記念樹を手植して同家を辭し東上した、竹堂の手植へし小松は昭和十二年の今日は抱拱の巨樹となり翠綠陰を成し當年の武村西郷邸を追懷し低回之を久しうするのである東京に赴いた竹堂は

後年、武の西郷家の家風に就て次の如く語つてゐる、余は西郷家の囑を受けて南洲先生の遺児を訓育せしこと三年餘に亘つた、先生の遺児は嫡を寅太郎、次男を午次郎、三男を酉三と云ひ、庶子を菊次郎と云ひ先生の次弟吉次郎の遺子を隆準、みつ子と云ひ先生の末弟小兵衛の遺児を小吉と云ひ皆幼年であつた四遺児の母氏四人皆寡居一家にありて南洲先生夫人家事を主宰し諸嫡唯々命を受けて怨言が出でなかつた、感化の深厚なる事に感嘆に堪へなかつた云々と餘所の人の見た西郷家の家庭観にかくの如きものがあつた之を要するに模範的の家風の存する武西郷邸は、南洲先生最後の遺宅として郷土史上より、日本歴史上より、精神感化の資料上より、史蹟名勝上より國又は縣、市が永久に鄭重に保存するべきものであらう

昭和十二年五月十五日印刷
昭和十二年五月十八日發行

「南洲先生新逸話集」

定價五十錢

不許復製

編輯者

淵上福之助

鹿兒島市武町五四七番地

印刷者

山本壯之助

鹿兒島市上龍尾町四〇番地

印刷所

鹿兒島新聞社印刷部

鹿兒島市山下町一七一番地

鹿兒島市山下町一七一番地

發行所

鹿兒島新聞社

電話代表三、三〇〇番 振替口座

東京八、八七六
福岡一、七三五
熊本一、二六八

375
25

不刊之書

民國十七年五月十八日發行

上海商務印書館發行

編輯

校對

印刷

卷一

卷二

卷三

卷四

卷五

卷六

卷七

卷八

卷九

卷十

定價

每冊

每部

每部

每部

每部

每部

每部

每部

每部

每部

每部

每部

終

